

2018 年度 博士学位論文

主指導教員 大島 巖 教授

副指導教員 藤岡 孝志 教授

**精神障害のある人を対象とした
競技性スポーツの実施・普及の特徴と
その発展のあり方に関する探索的研究**

Exploratory Model Construction of Dissemination and
Implementation Approaches to Promote Competitive Sports for
People with Severe Mental Illness, and Directions of their
Development in Japan

日本社会事業大学大学院 社会福祉学研究科

Graduate School of Social Welfare, Japan College of Social Work

鎗田英樹

Hideki Yarita

目 次

序論 研究の背景と目的

第1節 本研究の背景	6
1. 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの現状	6
2. 精神障害の領域における「スポーツへの社会化」	8
3. スポーツを介した社会的統合への期待	9
4. 精神障害のある人を対象とした「実施・普及モデル」の必要性和、その意義	9
第2節 本研究の目的	11
1. 本研究の目的と意義	11
2. 用語の定義	12
第3節 本研究の構成	13

第1章 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの現状と課題に関する先行研究 レビュー：先行文献に基づく実施・普及モデルの構築～

第1節 目的	15
第2節 方法	15
1. 文献検索の手続	15
2. 分析方法	16
第3節 結果	17
1. 障害者スポーツの概要と現状の課題	19
2. 精神障害のある人のスポーツの意義と効果	22
3. 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及の可能性	27
第4節 考察	28
1. 理論研究から示唆された競技性スポーツの意義と実施・普及の可能性	28
2. 先行研究から構築した暫定版理論モデル	29

第2章 当事者トップ選手に対する全国聞き取り調査の内容分析

～質的研究に基づく実施・普及モデルの構築①：当事者トップ選手は競技性 スポーツに何を望んでいるのか

第1節 目的	32
第2節 方法	32
1. 当事者選手に対する聞き取り調査	32
2. 分析方法	33
3. 倫理的配慮	33
第3節 結果	34
1. 対象者の属性	34
2. 内容分析による結果	35
第4節 考察	41
1. 当事者選手にとっての意義・目的と、その発展段階	41
2. 当事者選手へのインタビュー調査から推測される理論モデルの発展	45
3. 当事者選手へのインタビューから得られた実施・普及の課題	46

第3章 競技性スポーツに実績のある支援者に対する全国聞き取り調査の内容分析 ～質的研究に基づく実施・普及モデルの構築②：支援者は何を目的に競技性 スポーツの推進を行なっているのか

第1節 目的	48
第2節 方法	48
1. 支援者に対する聞き取り調査	48
2. 分析方法	48
3. 倫理的配慮	49
第3節 結果	49
1. 対象者の属性	50
2. 内容分析による結果	50
第4節 考察	56
1. 支援者にとっての意義・目的と効果的な実施・普及方法	56
2. 支援者へのインタビュー調査から推測される理論モデルの発展	60
3. 支援者インタビューから得られた競技性スポーツの意義と実施・普及の課題	61

第4章 競技性重視のスポーツ大会に参加するチームを対象とした全国質問紙調査の分析 ～暫定版実施・普及モデルの妥当性検証を中心に～

第1節 目的	63
第2節 方法	63
1. 精神障害のある人を対象としたスポーツチームに対する質問紙調査	63
2. 対象チームの選出	63
3. 調査内容	65
4. 倫理的配慮	66
5. 分析方法	66
第3節 結果	66
1. プロフィールおよび基本情報	68
2. 経済状況	70
3. 実施・普及活動	70
4. 志向度に関する質問項目と信頼性の検討	72
5. チーム形態によって、志向性に違いはあるのか	75
6. 競技種目の違いによって、志向性に違いはあるのか	80
7. スポーツの発達段階と志向性に、関連はあるのか	82
8. 年代と志向性に、関連はあるのか	86
9. 志向度の相関	90
10. チーム代表者は競技性スポーツをどう、捉えているのか (志向性についての因子分析)	91
11. 何が社会的統合を後押しするのか (社会的統合に関する重回帰分析)	94
12. 暫定版実施・普及モデルの妥当性について	96
13. 自由記載	98
第4節 考察	101
1. 質問紙調査結果による、暫定版実施・普及モデルの補足・補強	101
2. 質問紙調査から考察される重要概念の位置付け	103

第5章 総合考察と結論

第1節 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの意義と実施・普及モデル	・ ・ ・ ・ 105
第2節 身体障害モデルから見た精神障害領域実施・普及モデルの特徴	・ ・ ・ ・ 108
第3節 本研究からの示唆、社会的意義	・ ・ ・ ・ 113
第4節 本研究の意義、独自性と研究の限界、今後の研究の課題	・ ・ ・ ・ 114
第5節 結論	・ ・ ・ ・ 115
謝辞	・ ・ ・ ・ 117
文献／ 資料	・ ・ ・ ・ 118

序論 研究の背景と目的

第1節 本研究の背景

精神障害のある人を対象とした障害者^{注1}スポーツは、近年になって徐々に注目されるようになり、同時にその競技性スポーツの取り組みも広がって来た。これは身体障害のある人を対象とした障害者スポーツが競技性スポーツとして確立し、パラリンピックなどにおいて社会の注目を浴びているのに対して、精神障害のある人を対象とした障害者スポーツは病院や施設内でのレクリエーションやリハビリテーションが中心となるなど、大幅に遅れている。また、そのありようも異なっている。特に競技性スポーツについては、精神障害独自の障害者スポーツという社会的認識を得るのは難しく、その実施・普及の障壁となっている。

しかしながら、精神障害の領域でも、競技性スポーツへの関心が高まり、全国的競技大会、国際的競技大会への参加を目ざしたチームも現れるようになった。このような中、競技性スポーツの実施・普及の取り組みが本格的に取り組まれるようになった。しかし、その取り組みは身体障害の領域とは異なり、競技性スポーツの実施・普及がスポーツ参加者の裾野を広げるだけでなく、一般市民も参加するチームへの広がりとともに発展することが観察されるようになった。身体障害のアダプテッドスポーツ（関根,2003）（安井 2009）と同様に、精神障害の競技性スポーツの実施・普及とスポーツによる社会的統合の関連が注目される

以下では、精神障害のある人を対象としたスポーツの現状について概観を示すとともに、身体障害のある人を対象としたスポーツと対比することで、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及の必要性について、論じたい。

注釈1：本研究では障害を「障害」と記載するが、「全国障害者スポーツ大会」など固有名詞において「障害」と記載されているものについては、「障害」と記載する。

1. 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの現状

障害者スポーツとは、「障害のある人も実践可能な運動やスポーツのことを指すが、何か特別な領域のスポーツというわけではない。リハビリテーション（医療分野）や障害児の体育（教育分野）、日常生活のQOL（生活の質）向上のため（福祉分野）、勝つことや技術向上、楽しみのため（スポーツ分野）など、さまざまな場面で多様な目的を持って実践される」と定義されている（日本体育学会,2015）。近年は障害者だけでなく様々な人が参加出来る、より社会的統合の視点を強くした「アダプテッド・スポーツ」（日本体育学会,2015）や、障害のある人もない人も共に出来る事を視点に置いた「ユニバーサル・スポーツ」といった概念も提唱されるなど、幅を持って理解されるようになってきている。

本研究では精神障害のある人を対象とした障害者スポーツについて論じていくが、その中でも特に「アダプテッド・スポーツ」や「ユニバーサル・スポーツ」といった社会的統合の要因に注目して論じていく。

精神障害のある人を対象とした競技性スポーツは、身体障害や知的障害の領域に比べ、大きく出遅れていると言わざるを得ない。これまで独自の発展を遂げてきた全国身体障害者スポーツ大会と全国知的障害者スポーツ大会（ゆうあいピック）は2001年に統合され、第1回全国障害者スポーツ大会が開催された。しかし、精神障害の領域においては過去にスポーツにおける全国規模の大会実績がなかったことなどから、他の2障害と同時に参入することが出来なかった。

これまで精神障害のある人を対象としたスポーツは、病院内におけるレクリエーションや、リハビリテーションを主としたものが多く、競技としてのスポーツと言った視点が育ってこなかったこ

とが要因の一つとされる（大守.2003）。また日本は戦後、医療法特例や医療金融公庫の融資、ライシャワー事件を契機に積極的に民間病院の設立を政策的に後押しし、精神障害のある人に対して入院治療中心の施策を行ってきた。いま現在においても日本の精神科病床数は諸外国に比べ圧倒的に多く、また平均在院日数も極めて長い。このような入院治療偏重の施策も、競技としての視点が育たなかった一因と言える（金田 b.2017）。

現在、身体障害の領域や知的障害の領域においては、競技性スポーツとして様々な取り組みが行われており、障害別のスポーツ団体としても競技別のスポーツ団体としても、全国のおよび国際的な統括団体が存在している。またパラリンピックについても、知的障害が不祥事（宮崎ら.2003）のため現在保留状態とはなっているものの、大会への参加実績があることなどから、国内のみならず国際的にも一定の活動が確認出来る。しかし、精神障害の領域については身体障害や知的障害のように全国規模でスポーツを統括する様な団体が組織されたことはなく、実績のないままの実施・普及が日本障がい者スポーツ協会に委ねられることとなった。そのため現在も、精神障害のある人のスポーツを統括する全国組織は存在しない。近年、バレーボールやフットサルなど、競技別にて全国的な展開をする団体も出てきたが、まだ限定的な活動と言える。このように国内での状況が整っていないため、当然ながら精神障害のある人を対象としたスポーツに関する国際的な統括団体は存在しない。そのため、現段階で精神障害のある人はパラリンピックに選手として出場することは出来ない。

精神障害のある人を対象としたスポーツ競技については、2008年の全国障害者スポーツ大会（大分大会）において、初めてバレーボール競技が正式種目化された。しかし、現段階において精神障害のある人を対象とした団体種目はバレーボールの1種目のみである。平成25年度障害者白書（表1.参照）によれば、精神障害者の総数は320.1万人（平成25年度版障害者白書.2014）であり、身体障害児・者の総数366.3万人にも迫る人数である。またスポーツにおいて一番パフォーマンスの期待できる18歳未満の在宅身体障害児・者が9.3万人なのに対し、18歳未満の外来精神障害者数は17.6万人と、約2倍の数が存在している。一方で、現在行われている全国障害者スポーツ大会の、障害種別の競技数を見ていくと（表2.参照）身体障害の領域では個人種目で7競技34種目であるのに対し、精神障害の領域では0種目0競技である。近年、卓球の個人種目正式種目化が議論されているが、それでも1競技である。また団体種目を見てみても身体障害の領域3種目、知的障害の領域5種目であるのに対し、精神障害の領域はバレーボールの1種目のみである。単純に障害者の総数だけで判断することは出来ないが、それであっても精神障害者総数320万人に対して団体競技1種目では十分といえない。

国際的な視点で見ると、1993年に開催された国連総会では「障害者の機会均等化に関する標準規則」が決議されており、障害のある人のレクリエーションとスポーツの機会均等確保が採決されている。日本においても1970年に制定された障害者基本法において、「すべての障害者は、社会を構成する一員として社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会が与えられる（3条2項）」と明記されている。また、その意義についても1993年、「障害者対策推進本部」が「スポーツ、レクリエーション及び文化活動への参加機会の確保は、障害者の社会参加の促進にとって重要であるだけでなく、啓発広報活動としても重要である。また、これらの活動は、障害者の生活を豊かにするものであり、積極的に振興を図ることが必要である。特にスポーツについては、障害者の健康増進という視点からも有意義である」と指摘している。2011年に施行されたスポーツ基本法においても、「スポーツは障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行なうことができるよう、障害の種類及び程度に応じて必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」と明記されており、障害者に対するスポーツ機会の保障は国内外を問わず、重要な事項であることが共有されており、また障害のある人にとっても基本的な権利であると言えるだろう。しかしながら、現在の状況を見渡す限り、精神障害の領域においては配慮しつつ推進されている状況になく、ことに競技としてのスポーツに参加する権利は、大きく侵害されている状況と言える。「ノーマライゼーション」の理念には、障害のある人たちを一人の市民としてその地域で普通に生活できるように社会の仕組みを変えていくという平和・福祉が含まれている（金田.2017a）。1981年の国際障害者年のテーマとなった

「完全参加と平等」は、この理念に基づくものとされる。そのため、精神障害のある人にとっての競技性スポーツの実施機会を確保することや、その実施・普及を行うこと、競技種目の拡大を図ることは、精神障害のある人のスポーツにおける「完全参加と平等」に貢献し、その権利を保障するといった点で、ノーマライゼーションの観点からも重要なことと言えるだろう。

表 1. 日本における障害者の全体状況

		総数	在宅者	施設入所者
身体障害児・者	18 歳未満	9.8 万人	9.3 万人	0.5 万人
	18 歳以上	356.4 万人	348.3 万人	8.1 万人
	合計	366.3 万人 (29 人)	357.6 万人 (28 人)	8.7 万人 (1 人)
知的障害児・者	18 歳未満	12.5 万人	11.7 万人	0.8 万人
	18 歳以上	41.0 万人	29.0 万人	12.0 万人
	年齢不詳	1.2 万人	1.2 万人	0.0 万人
	合計	54.7 万人 (4 人)	41.9 万人 (3 人)	12.8 万人 (1 人)
		総数	外来患者	入院患者
精神障害者	20 歳未満	17.9 万人	17.6 万人	0.3 万人
	20 歳以上	301.1 万人	269.2 万人	31.9 万人
	年齢不詳	1.1 万人	1.0 万人	0.1 万人
	合計	320.1 万人 (25 人)	287.8 万人 (22 人)	32.3 万人 (3 人)

(平成 26 年度障害者白書)

表 2. 全国障害者スポーツ大会における障害別競技数

	障害種別	競技数	種目数
個人	身体	7	34
	知的	7	8
	精神	0	0
団体	身体	3	
	知的	5	
	精神	1	

2. 精神障害の領域における「スポーツへの社会化」

精神障害のある人のスポーツ参加機会が保障されるためには、スポーツ実践またはその希望があることが必要となる。そのためには、精神障害のある人の「スポーツへの社会化」が求められる。

Kenyon ら (1973) はスポーツ社会学において、人がスポーツを行うようになる過程を「スポーツへの社会化 (Socialization into Sport)」にて説明しており、その 3 つの要素として「個人的属性」と「重要な他者」、「社会化場面」を通して役割学習をして行くとした。また藤田らは、身体障害における中途障害者がスポーツで再起する過程をスポーツへの社会化で説明している (藤田, 1998)。つまり、「個人的属性」を持つ中途障害者が「重要な他者」と出会い、スポーツという「社会化場面」を介すことで「役割学習」をし、スポーツへ社会化されて行くと言うモデルである。精神障害も同じく中途障害とするならば、精神障害の領域においても特有な「スポーツへの社会化」の在り方があり、その在り方を明らかにすることが実施・普及に大きく影響すると考える。

現在、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの取り組みが注目される一方、どのような経緯をたどって精神障害のある人が、スポーツを始めるようになるのかは明らかでない。権利やノーマライゼーションの視点から重要な活動であるものの、精神障害のある人すべてが競技性スポー

ツを志向するわけではない。そのため、競技としてのスポーツを望む当事者がどのような過程を辿ってスポーツに取り組むようになったのかは、実施・普及を考える上では重要な事項と考える。

3. スポーツを介した社会的統合への期待

精神障害のある人の「スポーツへの社会化」が進むことで、当事者のスポーツ参加機会は増加するだろう。しかしスポーツ機会の増加が、そのまま精神障害のある人の社会的統合へとつながる訳ではない。

障害者スポーツは「障害者特有のスポーツ」と社会的に認識されてきた流れがある。しかしながら近年、アダプテッド・スポーツ（岡川ら.2014）やユニバーサル・スポーツと言った、障害の枠を超えた活動が見られ始めている。特にアダプテッド・スポーツは日本での造語であり、語源が「Adapted Physical Activity」であることから、身体障害を主として提唱された概念と言える。

視覚障害のある人や車椅子使用者、聴覚障害のある人においては、健常者と一緒にスポーツを楽しむながらコミュニケーションを取ることが、障害理解の契機として有効であることが報告されている。

またアルペン競技である「アイススレッジホッケー」（関根ら.2003）などは下肢が完全に固定されるため、健常者と障害者のハンディが少なく、共に行えるスポーツと言える。このような健常と障害を隔てない「ユニバーサル・スポーツ」の普及が社会的統合の推進として期待されている（関根ら.2003）。

また知的障害のある児童についても、2008年の教育指導要綱からは「障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること」との文言が追記されたことにより、体育の授業が通常学級の生徒と特別支援学級の生徒が共に行われるようになってきており、体育の授業が社会的統合の機能を果たしてきている。

2004年よりホームレス・サッカーを支援しているNPO法人日本ビックスチャー財団は、ホームレスの人だけでなく、難民やひきこもり、依存症患者、生活保護受給者など、社会から排除されがちな人を主な対象とした「ダイバーシティカップ」を開催し、207名を動員するなどスポーツを通じた社会的統合としての活動を行い、一定の成果をあげている（スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会.2016）。

このようにスポーツは本来、多様な人を惹きつけ競技を通じてつながり相互理解を促すと言った強い社会的統合の力を持っている（藤田.2008）。しかしながら、精神障害の領域においては前述した通り院内でのリハビリテーションやレクリエーションが主であったため、障害のない人と交流する機会には恵まれてこなかった。また競技種目も少なく、接点を持つ機会は少ないと言える。また思春期以降に好発する後天的な疾患・障害にも関わらず、義務教育の中で社会的統合を意図した教育が行われておらず、スポーツの持つ社会的統合の効果が活かされていない現状がある（学校メンタルヘルスリテラシー教育研究会.2011）。

4. 精神障害のある人を対象とした「実施・普及モデル」構築の必要性和、その意義

精神障害のある人の「スポーツへの社会化」を促進し、スポーツを介した「社会的統合」を実現させるためには、障害のある人もそれを支援する人たちも、共に競技としてのスポーツ参加に魅力を感じ、実践して行く必要がある。しかし、競技性と競技人口は密接に関係しているため、競技性を上げるためには、競技人口を増やすため「実施・普及モデル」の構築が必要と考える。

現在、精神障害のある人を対象としたスポーツに対して注目が集まってきているが、その実施・普及は十分ではない。前述した通り、現状では精神障害のある人のスポーツを統括する全国組織は存在せず、実施基盤が存在しないとも言える。日本精神保健福祉連盟・精神障害者スポーツ推進委

員会の尽力によりバレーボール競技は全国障害者スポーツ大会の公式種目となったが、トップダウン的な推進であったためか、それに伴って精神障害のある人のバレーボール競技団体が設立されるような運びとはならず、当事者および家族の受け身的な姿勢が指摘されている（大西.2014）。そのため、現状では精神障害者スポーツ推進委員会がバレーボール競技の主幹団体となっており、いびつな状況を生んでいる。また近年、フットサルなど新たな競技として全国的な活動を展開する団体も出てきたが、まだ限定的な活動であり、その実施・普及の知見は共有されていない状況である。

精神障害のある人の競技としてのスポーツの確立は、ノーマライゼーションの視点からも重要であり、社会的統合の一助としても期待が寄せられる。しかしながら、これまで競技としての実績がないため、その実施・普及の在り方は未知であり、競技としてスポーツに取り組みたいと考える当事者どうすればいいのか分からず、またそれを後押ししたいと考える支援者にとっても、実施・普及活動を行うべき指針が見えにくい状況となっていると思われる。そのような状況を打破するためには実施・普及モデルの開発が必要であり、その指針を示すことで当事者選手も競技を通して自身が進むべき道が明らかとなり、また支援者にとっても後押しすべき方向性が見えるものとする。またその過程を通して、社会的統合の可能性を実感出来るものとする。

第2節 本研究の目的

1. 本研究の目的と意義

以上の背景より本研究の目的は、以下の2点である。

まず、身体障害など他の障害と際だった特徴をもつ精神障害領域の競技性スポーツの実施・普及のあり方について、取り組みが進む競技性スポーツチームに対する質的・量的調査から、当事者選手と支援者の相方が目指す実施・普及の方向性を明らかにし、それを踏まえて有効な実施・普及モデルを探索的に構築することである。

また、精神障害の領域での競技性スポーツの効果的な実施・普及の取り組みが、当事者選手や社会にどのように影響するのか、またその特徴は他障害の取組みとの比較から、どのように位置付けられ、どのように共通し、どのように異なるのか、その発展のあり方を探索的に明らかにすることである。

これらの分析を通して、精神障害特有の競技性スポーツの実施・普及と発展のあり方について示唆を得ると共に、社会からの理解を得るのに大きな困難を有する精神障害のある人たちに対して、スポーツを介した社会的統合という新しいアプローチの発展可能性を検討することにした。

これらのことから、以下のことが社会的意義として期待できると考える。

まず第1に、競技としてのスポーツに取り組みたいと考えている精神障害のある人にとって、競技性スポーツがもたらす意義や効果、目ざすべき方向性について共通認識を持つことが出来るようになるだろう。また、精神障害のある人の競技性スポーツの実施を支える支援者についても、何をモチベーションとして取り組むのか、支援者支援動機とも照らし合わせることで、競技としてのスポーツに取り組む当事者と支援者の間で、その取り組むべき方向性を含めてサポート内容などにミスマッチを生じることなく、適切な方向へと推進することが可能になると思われる。また目指すべき実施・普及モデルを構築し、精神障害のある人を対象としたスポーツがより身近なレベルで実践されるようになることで、競技としてのスポーツに取り組みたいと考える当事者はチームを探すことに困難することなく、チームにコンタクトできるようになるだろう。また実施・普及に伴いチーム数が増えれば、チームを選択することも可能となるだろう。競技種目に関しても同様のことが言えるが、当事者に対して選択の幅が与えられていることが重要であろう。

第2に、身体障害の領域や発達障害の領域においては、すでにスポーツを介した社会的統合の意義が報告されているが（関根.2003）、精神障害の領域においても、その独自の位置づけを明らかにすることで、精神障害において特に困難が考慮される社会的統合のあるべき方向性を示すことがなると考える。精神障害のある人は、身体障害のある人のように肢体不自由があるわけではない。そのため、精神症状が安定していれば特殊なスポーツ機材などを用いなくても、健常者とともに障害のあるなしに関わらないスポーツ活動を営むことが十分可能と考える。

第3に、本来スポーツとは障害のあるなしに関わらず、「心身の健康」に寄与するものである。精神に障害のある人は、障害の面からも環境の面からもスポーツを行う機会に恵まれていない。モデルに従い実施・普及を行うことで、精神障害のある人がスポーツに接することのできる機会を増やすことは、競技性が主導する形で精神障害のある人のスポーツ参加の裾野を広げ、多くの精神障害のある人たちがスポーツに触れ合えるだけでなく、生きがいや楽しみ、心身の健康など、当事者の幅広い Well-Being にも大きく貢献するものと考ええる。

2. 用語の定義

本研究における用語については、以下のように定義する。

- ①競技性スポーツ：地域において行われる、レクリエーションではなく競技性を重視したスポーツ。
- ②当事者選手：精神疾患および精神障害を有し、かつ大会等に選手として出場している当事者。
- ③地域型クラブチーム：施設や病院の垣根を越え、地域で活動しているスポーツのサークル。
- ④支援者：チームのスポーツ活動や大会運営などに携わる当事者以外の支援に関わる者。

第3節 本論文の構成

本論文は、序章を含め、全体は5章で構成される（図1.参照）。

序章では、本研究の背景および目的、研究の全体構成の概略を示した。

第1章では、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツについての先行研究レビューを行い、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツがどのような経緯で関心の高まりを見せ、現状どのような課題を持っているのか。また、他の障害とはどのように異なっているのかを整理した。その上で競技性スポーツの実施・普及が当事者や社会に対してどのような影響を与え、発展するかについて理論的枠組みを構築し、暫定版実施・普及モデル（仮説）を作成した。

第2章では、競技性スポーツに取り組む当事者選手に対する質的調査研究から、精神障害のある人にとっての競技性スポーツの意義や実施・普及の重要性を明らかにした。また、プログラム評価理論を援用することで、その発展していく過程を【導入期】【本実施期】【発展期】の3期に分け、当事者選手にとって望まれる競技性スポーツのあり方を、ライフサイクル論的な視点および実施・普及の視点で考察し、実施・普及モデル（仮説）の構築を行った。

第3章では、これまで精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及に取り組んできた全国の支援者（GP 事例）に対する質的調査研究から、支援者にとっての意義・目的を明らかにした。また、これまで行ってきた効果的な実施・普及方法についても聴取し、2章で構築した実施・普及モデル（仮説）に追記・修正する形で効果的な実施・普及モデルを作成した。

第4章では、全国で活動する競技性スポーツ大会に参加実績のある精神障害当事者選手を対象としたスポーツチームに対して郵送調査を行い、それらの結果を探索的に分析した。その結果、量的な知見から競技性スポーツの実施が精神障害のある人や社会に対して与える影響や、実施・普及に必要な要因などが示唆されたため、それらを踏まえて前章までで構築した実施・普及モデルについて理論的な補足・補強を行った。

第5章では本研究の成果に基づき、精神障害のある人にとっての競技性スポーツとその実施・普及の意義を示すとともに社会的統合の可能性について示した。また、3章、4章の結果から構築した暫定版実施・普及モデルについて修正を行い、理論的・実証的研究を総合した探索的仮説モデルを提示した。また今後、精神障害のある方を対象とした競技性スポーツが実施・普及して行くため、またスポーツを介した社会的統合が促進されるための後続研究への提言および本研究の限界と課題、結論について述べる。

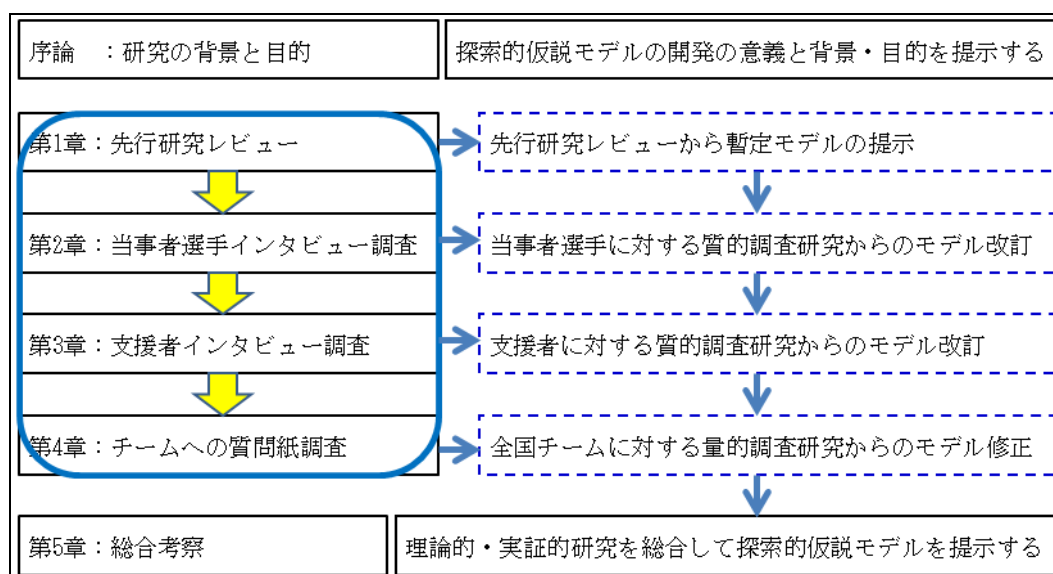


図1. 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの探索的な仮説モデル構築のプロセス

第1章 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの現状と課題に関する先行研究レビュー：～先行文献に基づく実施・普及モデルの構築～

近年、活発になりつつある精神障害のある人を対象とした競技性スポーツであるが、まだ比較的新しい取り組みであり、その実態が十分に明らかとなっていない。また障害者スポーツに関する文献も国内文献、海外文献ともに生理学的および治療的効果についての文献が多く、実施・普及や意義などについて言及しているものは少数であった。

そのため、本章では文献調査の結果から、他障害を含む障害者スポーツ全般がどのように発展してきて、どのような課題を持っているのかを概観し、その上で精神障害のある人を対象とした競技性スポーツがどのような経緯で関心の高まりを見せ、現状どのような課題を持っているのか。また競技性スポーツの実施・普及の発展が、当事者や社会に対してどのような影響を与える可能性があるのか、先行研究に基づいて提示する。

第1節 目的

本調査の目的は、障害者スポーツ全般について概観した上で、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツについて文献調査を行い、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツがどのような経緯で関心の高まりを見せ、現状どのような課題を持っているのか。また、他の障害とはどのように異なっているのかを明らかにすることである。

また、その上で競技性スポーツの実施・普及の発展が当事者や社会に対してどのような影響を与えるか、仮説としての理論的枠組み構築を行うことである。また併せて他障害の領域における競技性スポーツの実施・普及に関する調査を行うことで、精神障害の領域における実施・普及方法への示唆を得ることである。

第2節 方法

1. 文献検索の手続き

本研究では、精神障害のある人が勝利を目指す目標を持った競技性スポーツと出会い、その取り組みの中で同じ障害を持つ仲間たちと「勝利」という目的を共有し、各自の役割を全うする中で達成感を得ていくものとする。また、この競技としてのスポーツへの取り組みが当事者満足度を高めるだけでなく、その発展に伴って社会的統合やアンチ・スティグマの効果を示すことを概念的な枠組みの仮説とし、探索的な先行文献検索（ハンドサーチ）と、文献データベースを用いた系統的文献検索を併用して文献検索を行った。

文献データベースを用いた系統的文献検索については、障害者スポーツ全体の状況を概観するために、キーワードとして「身体障害」および「知的障害」、「精神障害」（検索上では『障害』ではなく『障害』とする）、および「スポーツ」を用いた。国内文献の検索に使用した日本語文献データベースは、CiNii、医学中央雑誌を使用した。なお、治療目的を主としたものや内容が障害者およびスポーツと無関係なものは除外した。また英文文献については、文献データベースに PubMed を用いて、検索領域を[Title/Abstract]とした。使用したキーワードは、「mental illness」AND「sport」、OR「mental disorders(MeSH)」AND「sport」を使用した（最終検索日：2019年1月16日）。

また、本研究は競技としてのスポーツに焦点を当てているため、「理論」または「概念」をキー

ワードに設定し、「スポーツ」を掛け合わせて上記日本語データベースで検索を行い、「スポーツ」に関する概念整理を行った。また同時に、スポーツを介した社会的統合の可能性を模索するため、本研究の重要な概念である「社会的統合」または「社会的包摂」を「スポーツ」と掛け合わせて検索した。また精神障害のある人の社会的統合を阻害する大きな要因である「スティグマ」についても併せて検索を行った。また障害のある人がスポーツに向かう過程について知見を得るため、「スポーツへの社会化」および「障害者」についても検索した。実施・普及については、「障害者スポーツ」、「普及」のキーワードで検索した。

検討文献の除外条件として、治療目的を主としたもの、内容が障害者スポーツの実施・普及と無関係なものは除外した。

2. 分析方法

抽出された論文は検索条件に従い分類を行った。また概説的な文献については記載内容と独自性をみて筆者が判断し、分類を行った。また、どこにも分類出来ず、かつ意味をなさないと判断した論文は除外対象とした。該当した文献については前述した理論的枠組みに沿って、キー概念となる①障害者スポーツ（精神障害スポーツを中核に置く）、②社会的統合、③スティグマ、④スポーツ、⑤スポーツへの社会化、⑥実施・普及に分類し、分析した。

第3節. 結果

探索的文献検索、および文献データベースを用いた系統的文献検索の結果、日本語論文は探索的先行文献検索にて検索した 47 文献および系統的文献検索において検索し、検討文献加入条件に合致すると判断した 18 文献を併せて 65 文献を本研究において検討・分析した。また英文論文は、探索的先行文献検索において検索した 2 文献と、系統的文献検索にて該当した 48 文献から検索条件に合致すると判断した 7 本の計 9 本をレビューした。

英文論文は多数検索されたものの（検索領域を[Title/Abstract]に限定しなければ 9000 論文以上）、[Title/Abstract]を限定した検索では 48 文献になった。これらは、脳震頭や外傷など他の障碍に関するものや、治療的効果に関する論文が多くを占めており、検討論文除外基準によって取り除くと 3 文献となった。

これらを整理した結果を以下に示す（表 3.参照）。

表 3. 対象文献一覧

	原著論文・研究報告書等（24 件）	雑誌記事・紀要・書籍（41 件）	学会抄録（9 件）
～ 1989	<ul style="list-style-type: none"> ・ Kenyon GS(1973).Becoming involved in physical activity and sport. ・ Goffman.E(1963). Stigma : note on the management of spoiled identity. ・ 浜口(1983).「スポーツ概念の意味的研究」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Simmel.G(1966).『闘争の社会学』 ・ 佐伯(1978).「新しいスポーツインターナショナルリズム」 ・ Fraleigt.W.P(1989).『スポーツモラル』 	
1990 ～ 1999	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大島ら(1993).「精神障害者施設とのコンフリクトを経験した大都市近郊進行住宅地域の精神障害者観」 ・ 久保(1997).「エンパワメントー障害者の福祉」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 影山(1977).「スポーツ参与の社会学について」 ・ 能村(1996).「知的障害者スポーツの現状と展望」 ・ 米満(1998).「知的障害者とスポーツ」 	
2000 ～ 2005	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内田(2002).「規則的にスポーツをしているデイケア患者の生活時間の特徴」 ・ 内田(2002).「精神障害者スポーツと競技性」 ・ 藤田(2003).「身体障害者施設における運動・スポーツの実施状況に関する調査研究」 ・ 大西(2003).「精神障害者のスポーツ振興のための組織基盤確立に関する研究」 ・ President' s New Freedom Commission on Mental Health (2003). Achieving the promise 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 西銘(2000).「長崎県における精神障害者スポーツ交流事業の効果」 ・ 高畑(2001).「精神障害のある人の社会統合を促進するスポーツ大会に関する研究」 ・ 大西(2002).「精神障害者スポーツの振興に関する最近の動き」 ・ 太田ら(2002).「スポーツにおける社会化要因の検討」 ・ 岡崎(2003).「精神障害者スポーツ振興の現状と展望—障害者スポーツ界における真の三障害統合を目指して—」 ・ 宮崎信一（2003）. 競技性の高い知的障害者スポーツの現状と問題点. ・ 大西(2004).「こころとスポーツ 精神障害者スポーツの現状と課題」 	

	<ul style="list-style-type: none"> ・濱野(2005).「精神障害者における QOL 評価の試み 精神障害者のスポーツ活動の有用性の検討」 ・高橋(2004).「障害者スポーツの歴史」 	<ul style="list-style-type: none"> ・岡崎(2004).「精神障害者スポーツ振興における精神科医の役割」 ・濱野(2004).「地域における精神障害者スポーツの展開に関する一考察」 ・上出(2005).「アジアユースパラ競技大会マレーシア 2013 医務活動を通じた障がい児のスポーツ参加における一考察」 ・塩野谷(2005).「スポーツに見る競争の倫理」 	
2006 ～ 2010	<ul style="list-style-type: none"> ・岡村(2007).「統合失調症における競技スポーツと薬物療法について」 ・大西(2009).「精神障害者スポーツ振興のための体制整備に関する調査研究」 ・Carless D, Douglas K. (2008). Social support for and through exercise and sport in a sample of men with serious mental illness. ・Takahashi(2010).Functional deficits in the extrastriate body area during observation of sports-related actions in schizophrenia ・皆川(2010).「精神障害者スポーツを行うことにより精神障害のある方の精神面での変化の有効性」 	<ul style="list-style-type: none"> ・向後(2006).「精神障害者スポーツ振興(ソフトバレーボール大会)の経過と今後の課題」 ・大西(2007).「精神障害者スポーツの歴史と課題」 ・高畑(2007).「精神障害者とスポーツ大会」 ・平井(2007).「3 年間にわたる本県の精神障害者スポーツ支援の報告」 ・佐々木ら(2007).「障害者のスポーツへの社会化に関する研究」 ・岩田正美 (2008) .「社会的排除 参加の欠如・不確かな帰属」. ・大西(2008).「日本における精神障害者スポーツの展望」 ・友枝(2009).「社会統合」.福祉社会事典 ・田所(2009).「精神科領域における QOL の向上 精神障害者スポーツがもたらすもの」 ・高畑(2009).「障害者スポーツ協会と精神障害者」 ・長澤(2009).「視覚障害者サッカー(Blind Football)の現状と展望(2) 」 ・宮島(2009).「移民の社会的統合と排除」 ・倉本(2010).「精神障害者の競技スポーツに参加して一当事者の声」 ・古川(2009).「インテグレーション」.社会福祉学事典. 	<ul style="list-style-type: none"> ・荒谷(2009).「ボッチャ教室の試み:ー地域への普及を目指してー」 ・坂井(2010).「精神障害者スポーツの効果と課題 障害者スポーツ大会参加者調査」
2011 ～ 2014	<ul style="list-style-type: none"> ・高橋(2012).「精神障害者スポーツの今とこれから 精神障害者スポーツ実態調査」 ・田中(2013).「精神障害者スポーツ推進システムに関する国際比較研究」 ・Herdt A, (2013) .Social anxiety in physical activity participation in patients with mental illness 	<ul style="list-style-type: none"> ・坂井(2011).「スポーツ精神医学におけるコメディカルの役割 作業療法士の立場から」 ・高畑(2011).「スポーツと精神医学ー精神障害者スポーツ競技の動向」 ・佐藤(2012).「地域障害者スポーツの普及」 ・高畑(2013).「精神障害者スポーツの今とこれからわが国の精神障害者スポーツ大会とその推移」 ・井上(2013).「精神障害者スポーツの国際化に向けて」 ・岩田(2014)「社会的包摂」.社会福祉学事典 	<ul style="list-style-type: none"> ・横山(2012).「精神障害者スポーツの今とこれから 精神障害者スポーツの効果」 ・酒井(2012).「精神障害フットサルがメンバーに与える影響」 ・鎗田(2012).「千葉県における精神障がい者フットサル推進の試み」 ・鎗田(2012).「千葉県における精神障がい者バスケットボール推進の試み」

	<ul style="list-style-type: none"> ・ Battaglia(2013).Soccer practice as an add-on treatment in the management of individuals with a diagnosis of schizophrenia ・ Mangerud(2014).Physical activity in adolescents with psychiatric disorders and in the general population 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 野邊ら(2013).「スポーツへの関わりに関する研究動向」. ・ 鎗田(2014).「精神障害領域におけるスポーツ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高野(2012).「地域運動プログラムの有用性」 ・ 藤田(2013).「障害者のスポーツへの社会化における重要な他者に関する研究」
2015 ～ 2018	<ul style="list-style-type: none"> ・ 森本(2016).「アンチ・スティグマ活動」 ・ Soundy (2015).Investigating the benefits of sport participation for individuals ~ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田川(2017).「障害者スポーツの推進の取り組み」 ・ 後藤(2017).「知的障害のある人とスポーツ」 ・ 中岡(2018).「増補ハーバース」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 下田(2015).「ベルーにおける障がい者スポーツの普及・促進 JICA 短期ボランティア活動報告」

1. 障害者スポーツの概要と現状の課題

①身体障害のある人を対象としたスポーツにおける歴史的背景と現状

障害者スポーツは戦争負傷者の医学的リハビリテーションとして導入された経緯から、身体障害者を中心に進んできたといえる。第二次世界大戦後の 1948 年、イギリスのストークマンデビル病院にて脊髄損傷者のリハビリテーションとしてスポーツが用いられ、その成果を競うためスポーツ・フェスティバルが開催された（高橋.2004）。この大会がパラリンピックの原点とされており、1952 年にはオランダが参加した第 1 回国際ストークマンデビル大会（ISMG : International Stoke Mandeville Games）が開催され、車椅子使用者の国際大会として定着した。その後、1960 年にオリンピックの開催地であるローマにて第 9 回大会を開催したことによって、後にこの大会が「第 1 回パラリンピック」として位置づけられることになる。

日本において身体障害のある人のスポーツが認知され始めたのは、1964 年の東京オリンピック開催直後に開催された、第 13 回国際ストークマンデビル大会（パラリンピック東京大会）とされる（日本障がい者スポーツ協会.2017）。このパラリンピック東京大会の成功がきっかけとなり、第 20 回国民体育大会（岐阜大会）にて第 1 回全国身体障害者スポーツ大会が開催される。その後の第 36 回国民体育大会（富山大会）にて全国身体障害者スポーツ大会は幕を閉じ、2001 年からは知的障害を加えた全国障害者スポーツ大会へと移行することになった。

上記に示した通り、もともとは戦争負傷者の医学的リハビリテーションとして導入された経緯がある。しかし、現在は医学的リハビリテーションだけではなく、QOL の向上やノーマライゼーション、健康増進と社会参加などの意義も報告されている（草野.2009）。また 2014 年には、東京パラリンピックを見据えて全国障害者スポーツ大会の管轄がオリンピックと同じ文部科学省に移管され、パラリンピック選手についてもオリンピック選手同様の強化措置を行うための措置が取られるなど、より競技性に重きが置かれる傾向が伺われる。このように身体障害者のスポーツは競技としての分野が確立していると言える。

身体障害の領域では、中途障害者を対象にライフサイクル論の視点から、これまでの健常者としてのアイデンティティから、障害者スポーツのアスリートとしてのアイデンティティに移行するという「競技者アイデンティティ獲得」の課題や、発達期において障害者スポーツ競技者以外のアイデンティティが持ち難いと言った、「多様なアイデンティティ形成」の課題（内田.2015）などが指摘されている。また第一線で活躍した競技者が競技を引退することによってセカンドキャリアを模索しなければならないと言った、「キャリア・トランジション」の課題（田中.2005）なども指摘

されている。

一方で精神障碍の領域では、これまでレクリエーションやリハビリテーションとしてスポーツが扱われることが主であったため、競技としてのスポーツが精神障碍のある人のアイデンティティにどのような影響を及ぼすのかといった研究は見られない。また、キャリア・トランジションに関する報告も見られないため、今後明らかにしていく必要があるだろう。

②知的障碍のある人を対象としたスポーツの歴史的背景と現状

知的障碍のある人を対象としたスポーツ組織として、1968年にケネディ財団の資金援助にて設立されたスペシャルオリンピックスインターナショナル（SOI: Special Olympics International）と国際パラリンピック委員会（IPC: International Paralympic Committee）が挙げられる（米満,1998）。SOIの世界大会は4年ごとに夏季大会と冬季大会がそれぞれ開催されているが、あくまでもトレーニングの成果を発揮する場であり、高い競技性を目指すものではない。一方、パラリンピックにおいては1996年のアトランタ大会から知的障碍クラスが設置されるなど、より高い競技性が望まれている。

2000年に開催されたパラリンピック（シドニー大会）では、知的障害クラスの参加基準を1998年に国際知的障害スポーツ連盟（INAS-FID: International Sports Federation for Persons with Intellectual Disabilities）が定めた基準 1)IQ75以下で、2)18歳未満で発症し、3)社会的不利な状況（教育・就労、生活環境、経済的環境など）の3点が採用されたが、バスケットボールにおいて金メダルを獲得したスペインチームに知的障碍のない選手が参加していたことが判明。また第2位のロシアチームも参加資格に問題があったことが判明し、両チームともメダルをなく奪られるという事態が生じた。これにより当面知的障碍のある人のパラリンピック参加は見送られることとなるなど、参加資格の厳密化が大きな課題となっている。

日本においては、1992年から第1回全国精神薄弱者体育大会（ゆうあいピック）が東京都にて開催され、2001年に開催される全国障害者スポーツ大会の開催まで継続された。「ゆうあいピック」はスペシャルオリンピックスに近いスタンスを取っており、「参加中心型」の大会であった（能村,1996）。しかし近年は、より競技性を重視した各種競技団体が組織化されるようになり、健常者のトップクラスの選手を指導者にし、ナショナルチームを組織してパラリンピックなどに出場するなど、競技性を重視した動きが活発となっている。

しかし一方で、知的障碍のある人のスポーツにおいても実施体制の課題が指摘されている。障害者スポーツ指導員資格を持つ者の多くは知的障碍のある人と日常的な接点を持っておらず、スポーツ大会時のボランティアのみに留まることが多いとされる。結果、スポーツに理解のある施設職員や学校教員から指導を受けている、「環境の整った人」が勝者となる図式となっている（後藤,2017）ことが指摘されている。

③精神障碍のある人を対象としたスポーツの歴史的背景と現状

これまで、別々の大会として発展を遂げてきた身体障碍のある人のスポーツと知的障碍のある人のスポーツは2001年に「全国障害者スポーツ大会」として統合された。しかし、精神障碍のある人のスポーツについては過去に全国規模の大会実績が無いことから、統一開催を果たすことは出来なかった。

これまで、精神障碍のある人を対象としたスポーツは施設内でのレクリエーションやリハビリテーション（高畑,2011）として扱われることが多く、競技としてのスポーツという概念が育ってこなかった。そのため身体障碍のある人や知的障碍のある人に比べ、組織基盤の整備が非常に遅れていた。

この問題を解決するため、公益社団法人・日本精神保健福祉連盟は精神障害者スポーツ推進委員

会を設立し、第1回全国障害者スポーツ大会（宮城県）の開催に合わせ、地元宮城県・仙台市内関係者の努力により同じく宮城県にて全国精神障害者バレーボール大会を開催し、実績をアピールした（岡崎.2003）。

その翌年、開催の高知県関係者の努力と知事の英断により、第2回全国障害者スポーツ大会（高知県）からは精神障害のある人のバレーボール種目はオープン競技（公開競技）となった。また2008年の第8回全国障害者スポーツ大会（大分県）では正式種目化され、ついに3障害合同の競技大会開催に至ることとなった。これを契機に、精神障害のある人を対象とした競技としてのスポーツは、大きく推進されることとなった（高畑.2013）。また大会参加資格（内田.2002）も精神障害者保健福祉手帳所持者に限定されるべきかといった議論が生じるなど、競技性スポーツとして確立していく上で、必要な議論が深まってきた。

これまでは全国障害者スポーツ大会がきっかけとなり、精神障害のある人のスポーツ大会への参加を牽引したが、大阪を中心にフットサル競技が広がりを見せ始めた。そのきっかけとなったのが、2006年にJリーグ「ガンバ大阪」の協力により実現した、精神障害のある人を対象としたフットサル大会、「第1回スカンビオカップ」（倉本.2010）である。これを契機にフットサルは爆発的な広がりを見せ、各地でフットサルのチームが設立され、大会が開催されるようになった（高畑.2011）。

また2006年には大阪府にある高槻精神障害者フットサルクラブ・WEAREを中心としたフットサル代表チームがイタリアに遠征（鎗田.2014）して交流試合を行い、大きな話題をよんだ。

また、千葉県では競技種目の拡大を目的に有志にて「千葉県精神障害者バスケットボール大会実行委員会」が結成され（鎗田.2012）、2013年3月に全国で初となる精神障害のある人を対象としたバスケットボール県大会、「ちばドリームカップ2013」が開催されるなど、全国障害者スポーツ大会とは異なる形での競技種目拡大の動きがみられ始めてきた。

各地において実施・普及の動きが見られてきたものの、そのスポーツ活動や大会開催の多くが精神保健福祉関係者の有志で行われており、運営基盤は脆弱である（鎗田.2012）。身体・知的障害のある人のスポーツに比べて精神障害のある人のスポーツに対する障害者スポーツ協会の取り組みは遅れており（大西.2009）、また精神障害のある人の県組織も、まだ少ないことが指摘されている（高畑.2009）。

日本において精神障害のある人のスポーツは、入院施設から地域主体のスポーツへの移行期にあり、大会開催や組織育成、組織基盤の拡充など様々な整備が急務となっている（大西.2008）（向後.2006）。平成23年にはスポーツ基本法も施行され、「スポーツは障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行なうことができるよう、障害の種類及び程度に応じて必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」とされる（高橋.2011）。これらのことから、障害者の権利の視点からも精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの整備は急務といえる。

実施・普及に向けて精神障害のある人のスポーツについてのニーズ調査（大西.2008）（高橋.2011）が実施されている。しかし、その対象は都道府県の行政機関や障害者を支援する各種施設など、支援者を対象としたものである。当事者選手に対しては大会時におけるアンケート調査などが行われているが、当事者ニーズの把握としては不十分な感をうける。

また内田は、身体障害のある人や知的障害のある人の障害レベルがある程度固定しているのに対し、精神障害のある人は皆、治療を継続しており、かつ症状に変動があることを指摘している（内田.2002）。そのため、競技性を高めることはストレスをかけることに他ならず、結果的に症状の増悪を招くことも予想される。そのため、競技スポーツとして確立するためには、身体障害のある人や知的障害のある人とは異なる、特別な配慮が必要であると言える。

2. 精神障害のある人のスポーツの意義と効果

①心身機能への影響

精神障害のある人のスポーツの意義と効果については、ノルウェーにおける若年精神障害者を対象とした身体活動の種類と頻度についての調査結果から、精神障害のある若者の身体活動レベルは、一般の若者に比べて低いことが指摘されており、精神面だけではなく身体的な健康に対しても早期介入の重要性が指摘されている (Mangerud, W.L.2014)。また、スポーツを行うことは陰性症状の軽減につながる (西銘.2000) や生活リズムの安定化を図ること (内田.2004)、またコミュニケーション技術の改善に一部有効である (高野.2012) など、心身面への好影響も多く指摘されている。18名の統合失調症患者を対象にサッカーのトレーニングを行った調査では、介入後に体重とBMIにおいて4.6%の減少と、身体面において有意な改善が確認されるなど、サッカーの実践が統合失調症患者の精神・身体的な健康改善に有効であることが指摘されている (Battaglia.2013)。また併せて抗精神薬の減薬や健康関連QOL向上の可能性についても指摘がなされている。新薬の登場により、今まで以上に統合失調症患者は体重増加に注意が必要 (横山.2012) となったが、競技性スポーツに取り組むことが当事者選手の服薬の重要性について、認識を高めることなども (岡村.2007) 指摘されてなど、機能面だけではなく、心理面にも大きな影響を及ぼし得ると言えるだろう (Takahashi.2010)。

またリカバリーについても、その効果が指摘されている。リカバリーとは、「人々が生活や仕事、学ぶこと、そして地域社会に参加できるようになる過程であり、またある個人にとってはリカバリーとは障害があっても充実し生産的な生活を送ることができる能力であり、他の個人にとっては症状の減少や緩和である」 (President's New Freedom Commission on Mental Health.2003) と定義されており、上記の指摘はスポーツが当事者選手のリカバリーを推進しうる重要な活動であることを示していると思われる。また、リカバリーの過程は a.希望を持つこと b.エンパワメントされること c.生活の中に役割を担うこと d.自己責任を負うことの4つの過程で定義されている (Ragins.M.2005)。「エンパワメント」は、「社会的な抑圧のもとで、人間としての生き方が保障されてこなかった障害者自身に力をつけて自己決定を可能とし、自分自身の人生の主人公になれるようにという観点から、あらゆる社会資源を再検討し、条件整備を行っていかうとすること」 (久保.1997:37) とされる。このリカバリーの過程を競技性スポーツに当てはめると、a.スポーツに新たな希望を見出し、b.競技を通して自分に価値を見出すことでパワーレス状態を改善して行き、c.チームの中で役割を担い、d.選手として責任を負う過程を通してリカバリーしていくことと言いかえることが出来るだろう (2014.鎗田)。

競技としてスポーツに取り組むと言うことは、単なる楽しみでは終わらない。その過程で興味・関心が引き出され (皆川.2010)、生きがいまで発展することもあり得る。また個々のストレングスを伸ばし、生かす場ともなり得ることが指摘されている (坂井.2012)。競技性スポーツを通して他者から受け入れられる経験や集団の一員として共に助け合うこと (濱野.2005)、達成感等を得ることによって自尊心を回復し (岡崎.2004)、希望を取り戻す一つのきっかけとすることが出来るだろう (西銘.2000)。田所は「課題があっても自分の取り組むべき目的が整えば、彼らは持てる力を十分に発揮でき、多くの可能性があるのだと私は心から思えるようになった」 (田所.2009) と指摘している。そのような視点で見ると、競技としてのスポーツは、精神障害のある人たちを「勝利」という目的で団結させ、その過程を通して当事者選手をエンパワメントし、個々のリカバリーゴールへと向かわせる活動と言えるだろう。

日本スポーツ精神医学会では、その研究の方向を a.スポーツの精神医学への応用、b.精神医学のスポーツの応用、c.身体運動と脳機能の基礎的研究を柱とし、そこに障害者スポーツを加えている。(日本スポーツ精神医学会ホームページ.2018 検索) そのため、PubMed を用いた海外論文の検索では多数の論文が検索されるも、多くは上記 a~c に当てはまる内容であり、障害者スポーツに該当

する論文は少数であった。

諸外国におけるスポーツ組織と現状調査（大西.2003）では、全般的に精神障害のある人を対象とした競技性スポーツを推進している国は少数であったことなどから、精神障害者スポーツに関しては、むしろ日本が牽引している状況と言える。

2013年に世界7カ国を対象として実施した調査（田中.2013）では、統合失調症患者および気分障害患者を対象にフットサル競技が支援されており、近年フットサルを中心国際化の取り組みが活発となってきている。また諸外国では精神障害を持つ人の競技性スポーツ推進に必ずしも障害者スポーツ関連団体が関わっているわけではなく、スポーツ団体等がその支援を行く国も見られた。

2013年5月には精神障害のある人を対象としたスポーツの国際大会開催に向けて、世界で初となる精神障害のある人のスポーツに関する国際シンポジウムおよび会議が開催され、日本を含む8カ国が出席するなど、国際交流大会の開催に向けての機運が高まっている状況である。今後世界と歩調を合わせていく上では、国内基準の構築や情報発信が重要となるとの指摘が為されている（井上.2013）。

②スポーツを介した社会的統合の可能性

社会的統合（Social Integration）は、社会関係および社会集団間の関係が良好であり、社会システムに秩序がある状態を示す。社会的統合の逆概念は社会システムに矛盾や紛争があり、社会病理状態もしくは社会解体の状態になっていることとされる（友枝.2009:425-426）。宮島（2009:214-216）はフランスにおける移民や移民の2世が、言語などの文化的側面は、社会的に統合の努力はされても、雇用や教育、住居や政治参加など社会的な側面で受け入れられていないことや、差別を受けやすい状況にあることなどから、社会的統合の文化的側面のみならず、社会的側面の双方へのアプローチが必要であると指摘する（宮島.2009:205-216）。

社会的統合という用語の一部を構成する「統合」（Integration）について、古川（2009:58）は、「ノーマライゼーション概念の一部を構成する要素であり、社会から分離あるいは隔離された状態にある人々を通常の状態に復帰ないし回復させる過程」とし、排除された人々を受け入れていく幅を持った過程と解釈する（古川.2009）。

類似する概念である社会的包摂（Social Inclusion）は、「社会的排除という社会問題把握の用語として対となった社会福祉政策の新たな概念」とされ、このタームの起源を1980年代の若者の長期失業問題に直面していたフランスにおける取組みを起源としている（岩田.2014:40-43）。そのため本来は労働市場から排除された人々を労働市場へ統合することが政策的には主に意図されており（岩田.2014:40-43）、従来から使用されて来たより一般的な概念である社会的統合（Social Integration）の一側面であり、政策的・政治的な用語であると理解することができる。しかし高齢者や障害者、子供までを対象とした「社会的排除」を念頭に置いた場合、社会参加の軸に労働を置くことには異論（岩田.2008:174-175）もあり、日本国内においては「つながりの再構築」として、多様な観点から、政策的・政治的な用語として使用されている。

これに対してハーバーマスは、社会関係の2つのタイプとして、「社会統合」と「システム統合」をあげ、生活世界では「社会統合」が優勢であるのに対し、システムでは「システム統合」が優勢であり近代社会では「システム統合」が肥大化し、「システムによる生活世界の植民地化」が生じるため、生活世界の復権をとした人間の解放が必要であるとした（Habermas.=1985.400-401; 友枝.2011.425-426）。このように、生活世界に基盤を置き、人々が目標などを共有する「社会統合」では、文化的な意味や価値の再生産を務めとするコミュニケーション合理性の領域がある。これに対して、機能的なサブシステム（行政や経済）に基盤を置き、社会の「システム統合」を志向して、社会の物質的再生産に貢献するシステム合理性の領域がある（中岡.2018:164-165）。

以上のように、「社会統合（Social Integration）」は、「つながりの再構築」などのコミュニケーション行為や、コミュニケーション合理性を重視する。たとえば、序論で挙げた「ダイバーシティ

「カップ」では、社会から排除されがちなホームレスや難民やひきこもり、依存症患者、生活保護受給者などを対象としたフットサル大会というコミュニケーションの場を用いて、「つながりの再構築」の活動が行われており、成果をあげている（スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会.2016）。高畑は（高畑.2001.100）は精神障害のある人の自立や社会参加にとって芸術や文化、スポーツの振興が重要な問題であり、スポーツ大会がその社会的統合を促進することを指摘している。また知的障害のある人のスポーツにおいても、スポーツを通して健常者と障害者が交流することが、社会的統合を促進する上で重要（宮崎.2003）であることが指摘されている。

以上を踏まえて、本研究においては、「社会的統合(Social Integration)」という概念を、社会から排除されやすい精神障害のある人などを文化的、社会的に統合して「つながりの再構築」を志向する用語として位置づけることにしたい。

これまで施設内でのレクリエーションや医学的リハビリテーションとして捉えられてきた精神障害のある人のスポーツであるが、坂井は「競技としてのスポーツ大会に参加すること自体が、ノーマライゼーションの一過程でもある」（坂井.2011）とし、そのことで「人との交流を回復できる」と指摘している（坂井.2010）。また「当事者選手の人間関係づくりに寄与している」（田所.2009）ことや、「精神障害のある人が競技としてのスポーツに参加することは、社会参加や社会的統合の機会として重要な意義がある」（酒井.2012）（高畑.2009）こと、またスポーツ参加が良い経験として、当事者の Well-Being に影響する（Soundy.2015）ことが指摘されている。このように障害のある人の社会参加や交流など地域共生社会づくりの活動が、社会的統合につながると考えられる。

社会参加（Social participation）は国際生活機能分類（ICF：International Classification of Functioning, Disability and Health）において、「生活・人生場面（life situation）への関わり」（WHO.2001）と定義されており、人々の健康を考える上で重要な要因であると言えるだろう。

しかし一方で、障害者のスポーツ参加が、必ずしも障害者と健常者の統合化がはかれることに繋がっていない（奥田.2012）との指摘もあるため、競技としてのスポーツを介して、どのように社会的統合が図られていくのか明らかにする必要があるだろう。また、精神障害のある人は一般の人に比べ、身体活動やスポーツへの参加に対して、不安が強いことが指摘されている（Herdt A.2013）スポーツ参加に際しては、「情報提供」や「具体的」、「自尊心」、「感情的」支援が必要（Carless Dら.2008）との指摘もあるため、精神障害特有の配慮も必要となると考える。

③障害者スポーツとアンチ・スティグマの関連

スティグマの語源は古代ギリシャにおいて、奴隷や犯罪者、謀反人であることを知らしめるための刻印または肉体上の印とされ（Goffman.1963）、「汚名・屈辱」、「烙印」、「偏見」などと訳されている。本研究においてはスティグマを「地域社会から精神障害のある人を排斥する態度、烙印」として扱うこととする。

精神障害の歴史は偏見の歴史と行っても過誤ではない程、大きな問題である。これまで精神分裂病とされたものが統合失調症へと病名変更がされたのも、全国精神障害者家族会連合会が中心となり、少しでも偏見や差別をなくせればと働きかけた結果である。2002年には厚生労働省より報告書「こころのバリアフリー宣言」が提出されており、行政としても解決すべき重要な事項としていることが分かる。そのような中、精神障害のある人が選手としてスポーツ大会に参加することが、アンチ・スティグマにつながることを指摘されている。またスポーツという場で健康的な姿を示すことが県民の障害に対する理解（平井.2007）や差別や偏見の軽減（高畑.2009）に効果的と考えられ、これ等のことは他の2障害のスポーツにおいても、同様の成果が示されている（内田.2002）。

また、当事者や家族が発信することによってスティグマが解消されとの指摘（森本.2016:101）もあり、当事者が自らスポーツを介して発信していくことがアンチ・スティグマにつながる可能性が伺える。また大島らの地域住民の社会復帰施設建設に対する反対運動発生などの施設コンフリクト研究から、態度変容への可能性に対して接触体験の要因がきわめて重要であることが指摘されて

いる（大島ら.1989:26）。これらのことからスポーツを介して接触体験を図ることにアンチ・スティグマの効果が期待できるだろう。そういった意味では、アンチ・スティグマと社会的統合は相関関係にあり、当事者や家族が競技としてのスポーツを介して主体的に健康な面を示していくことが、アンチ・スティグマに繋がり、結果として社会的統合へと繋がっていくと考えられる。また当事者や家族が競技性スポーツを介して主体的に地域住民と交わっていくと言った社会的統合に根差した活動を行うことが、結果的にアンチ・スティグマに繋がっていくだろう。

また競技性が注目されるに伴い、精神障害のある人の権利擁護やノーマライゼーション実現の必要性も指摘され始めている。これまで偏見などの問題などから、病名を開示しない当事者も少なくない状況であったが、全国障害者スポーツ大会にて正式種目化されたことから身体障害のある人や知的障害のある人と同一レベルでのプライバシー確保の必要性（大西.2007）が指摘されてきており、競技として実施・普及を図っていくのであれば、スポーツを介したアンチ・スティグマ活動を当事者が並行して行っていく必要はあるだろう。

④競技としてのスポーツがもたらす効果

スポーツとは、スポーツ基本法において「心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵（かん）養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」（スポーツ庁.2018）と定義される。語源はラテン語の *Deperare*（楽しみ、気晴らし）であり、「遊び」であることが根底にある。スポーツの概念規定については時代によって様々な議論があるが、基本的には「遊戯性」、「競争性」、「身体（活動）性」がスポーツの特徴であり、多くの定義の議論は、これらの要素の強調の違いとされる（浜口.1983:78）。塩野谷はスポーツを競争の視点から、陸上競技や水泳のように記録や成績への挑戦を目的に一人で行うスポーツを「記録型」とし、野球やサッカー、柔道のようにゲームが成り立つためには必ず対戦相手を必要とし、互いに技と力をぶつけ合い戦うものを「闘争型」とした。そしてそこに、集団競技において勝つためにチームワークに務め、集団における各自の役割を全うする「協調型」が加わるとした（塩野谷.2005:82-83）。

「闘争型」は語感として強く感じるが、基本的に競争は闘争の一形態（Simmel.G.1966）とされる。そして競争は、a.他者とチャンスをめぐって展開される並行的・平和的な努力であること b.その手段は間接的・平和的（他者を傷つけるものではない）であること c.互いに認めたルールがあること d.たとえ相手を否定することがあっても統一に到着しようとする方法とされる。

精神障害の領域において、スポーツが全く行われてこなかった訳ではない。前述した通り、これまでは病院や施設などでレクリエーションやリハビリテーションとして行われてきた経緯がある。そういった意味では「遊戯性」が全面に出たスポーツが実践されてきたことになる。しかし、精神障害のある人のスポーツが注目を集め、活発となってきたのは「競技性」としてのスポーツが取り組まれだしてからである。また従来のレクリエーションやリハビリテーションとしてのスポーツでは社会的統合につながるような動きは見られてこなかった。そこには、「競争性」のある競技性スポーツが持つ特有の意味があり、その活動を通してこそ社会的統合に繋がっていく道筋があるものと思われる。また現在、精神障害の領域のスポーツはバレーボールを始め、みな団体競技種目となっている。そのため、そこにはチームとして団結する「協調型」の要素も含まれており、これらの要素が精神障害の領域における競技性スポーツの実施・普及に大きく影響していると思われる。そのような視点で見ると、精神障害のある人の競技性スポーツは、学生の団体種目の部活動のような活動と言える。そこには「競争性」が必要であり、「勝利」という目的を掲げ、「協調性」を持ちながら自己および集団の成長を図っていく道筋が伺える。

また対戦相手との関係については「相克性」と「相乗性」という相対する2つの概念があるとされる（佐伯.1977:20-22）。「相克性」とは対戦相手を勝利という自己実現を阻む存在として捉えるものであり、「相乗性」とは対戦相手がいることにより競争がより高められ、より自身の力が引き出され

発展に導かれると捉えるものである。勝利を目指して行われるスポーツの競争において、その全面に来るのは「相克性」と言えるだろう。しかし、対戦相手との競争によって自身やチームが高められ、成長していく「相乗性」の過程が精神障害のある人の競技性スポーツにおいて重要と思われる。Fraleigh.W.P は対戦相手を「促進者」(Fraleigh.W.P.1989:106-108)として捉えており、競争を「相手に敵対する活動というより、むしろ相手と一緒にやる活動」としている。精神障害のある人の競技性スポーツにおいて、対戦相手は勝利を競い合う相手ではあるが、同じ障害を持つ仲間でもある。競技としては敵対するも、スポーツという活動を通して成長して行き、それぞれのリカバリーゴールへと向かって行く過程が精神障害領域における「相乗性」と捉えることが出来るだろう。

⑤精神障害の領域における「スポーツへの社会化」

1973年、Kenyon.G.S と Mcpherson BD によって、「スポーツ社会化論 (Sports socialization)」が提唱された (Kenyon ら 1973:305)。スポーツ社会化論は、「スポーツによる社会化 (Socialization via Sports)」と「スポーツへの社会化 (Socialization into Sports)」に大別することが出来る。前者の「スポーツによる社会化」は、スポーツへの関わりを通して態度や価値を学ぶことによって性格形成や社会性の発展にどのような役割を果たすかに焦点を当てたものである。一方、後者の「スポーツへの社会化」は、人がどのようにしてスポーツを行うようになるのかに焦点を当てたものである。Kenyon ら(1973)は、この過程を「個人的属性 (性別や年齢、社会的地位や学歴など多様な個人因子)」と「重要な他者 (両親や兄弟、友人、教師など)、社会化場面 (社会化場面)」を通して役割学習をして行くとモデル化した (図 2.参照)。

本研究では「スポーツへの社会化」を「スポーツの技術や知識、規範、スポーツに対する態度、価値などを内面化することによって、その集団や社会に相応しいスポーツ的行動様式を身につけていくこと」(野邊.2013:110)として扱う。なお、「スポーツへの社会化」は人がどのようにしてスポーツを始め、その活動を通して役割学習をして行くかを理論化したものであり、社会的統合と同義ではない。

身体障害のある人を対象とした「スポーツへの社会化」では、中途障害者がスポーツで再起する過程を、「個人的属性」を持つ中途障害者が「重要な他者」と出会い、スポーツという「社会化場面」を介すことで「役割学習」をし、スポーツへ社会化されて行くと言うモデルで説明がなされている (藤田.1998:80-82)。また、スポーツ開始のきっかけをつくる「重要な他者」については、大学生 (体育学部) を対象とした研究においては、教師を含む指導者の存在が大きいことが指摘された。

また、継続要因としては「勝利」が最も支持され、次いで「技能の向上」、「成績・記録の向上」、「達成感」などが重要とされており、これらのことを達成するためには、人とスポーツを強く関わらせる影響力や一定の成功体験に導く力を持った指導者の存在が必要条件とされる (太田.2002:34)。そのような視点で見えていくと、精神障害のある人の競技性スポーツを実施・普及して行くためには、やはり「競争性」が重要であり、かつ「勝利」といった成功体験や成長の実感を伴わなくてはスポーツ活動の継続が難しくなるため、指導者の役割は大きいと言える。

また 2010 年に開催された全国障害者スポーツ大会に参加した身体障害のある選手 1,247 名を対象とした調査では、回答者全体の結果からは「友人」との回答が最も多く、医療関係者は少数であった。また、先天性障害の場合は教師の影響を受けている者が多く、一方中途障害においては友人の影響が大きいことが示された (藤田.2013:401)。知的障害のある人を対象としたスポーツにおいても、養護学校の事例調査より、「重要な他者」として多くの時間を共有する学校教員や友人、家族の重要性が指摘されており、上記の結果を裏付けていると言えるだろう (佐々木.2007)。

また Kenyon ら(1973)が提唱した「スポーツへの社会化」だが、社会化される個人の主体性が考慮されていないとの批判 (景山.1997)があり、後に「主体的社会化論」の必要性が指摘されている。

上記のことより、スポーツに慣れ親しんだ一般健常者を始め、身体障害のある人や知的障害のある人においても、「スポーツへの社会化」がなされるためには、身近な存在である「重要な他者」の

存在が必要であると言え、これは精神障害のある人においても同様であろうと考えられる。また、その存在はスポーツに関わらせる強い影響力と成功体験に導く指導力が必要であり、それらがスポーツ継続に大きく影響している。またその上で当事者の主体性をどう引き出すかが大きなカギになると考える。

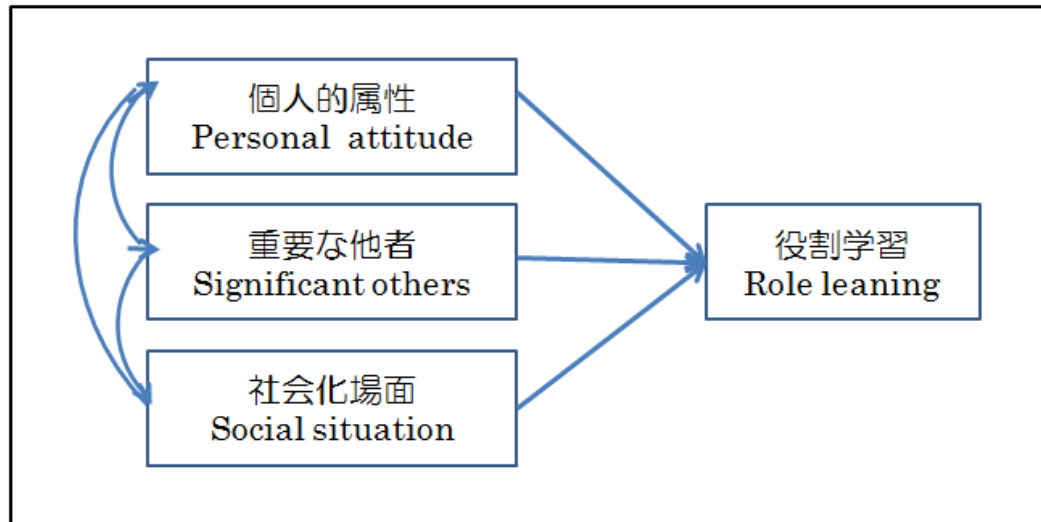


図 2. 社会化過程の 3 要因(Kenyon,G.S.&Mcpherson,B.D.1973)

3. 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及の可能性

精神障害のある人を対象とした競技性スポーツは、未開拓の領域である。そのため、他障害およびスポーツ途上国での実施・普及実践が、今後の実施・普及に向けての重要な示唆となると考える。

下田はペルーにおける障害者スポーツの実施・普及事業の体験から、「まず知ってもらうこと」の重要性を指摘している（下田.2015）

長澤は、ブラインド・サッカーの実施・普及体験から、「体験会の実施が重要な役割」を果たしていることを指摘している。車椅子バスケットボールの実施・普及においても同様の指摘がされていることから、実施・普及において「体験会の実施」（長澤.2009）は欠くことの出来ない重要な事項と言える。また荒谷は、参加者の自主的なクラブ設立が地域への普及および生活環境支援に重要な役割を果たすことを指摘した（荒谷.2009）。

また佐藤は、「病院外の活動として希望者を募ってサークルやクラブをつくることも継続のためのひとつの方法」（佐藤.2012）であることを指摘している。しかし一方で、指導者や適切な施設が見つからない時に頓挫する可能性も指摘しており、継続のための工夫が必要と言える。それに対して藤田は「指導者派遣およびプログラム提供事業」（藤田.2003）を提案しており、これが実施・普及の一助となる可能性がある。また高畑は「精神保健福祉関係者と障害者スポーツ関係者が同じ目線で、パートナーシップで行う必要性」（高畑.2013）を指摘しており、単なる精神障害のある人を対象としたスポーツの推進ではなく、関係者全員に対等性のある社会的統合に根差した組織作りが重要となると考える。また上出は、障害者スポーツが都市部中心に普及していることを示し、普及に向けた取り組みを地方と情報共有(上出.2015)ながら裾野を広げる必要があることを指摘している。現在、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツも、一部の地域での限定的な活動と言える。そのため、現在の中核地域の発展と合わせながら、地方との連携が必要となると思われる。

第4節 考察

1. 理論研究から示唆された競技性スポーツの意義と実施・普及の可能性

戦争負傷者の医学的リハビリテーションとして導入された経緯から、障害者スポーツは身体障害のある人を中心に進んできたが、近年になって精神障害のある人を対象とした競技性スポーツも、各地において着実に広がりを見せている。その効果についても身体的な面から心理的な面まで、様々な報告が行われており、人生の転機とも成り得る有益な活動の一つとなっていることが伺われる。

これまでもレクリエーションやリハビリテーションとしてのスポーツは行われてきたが、大きな動きとはなっていない。現在における関心の高まりは、スポーツを行う権利の保障だけでは生じることはなく、そこには「競争性」を伴う競技の視点があったからこそと考える。そして、同じ障害を持つ仲間たちと「勝利」という目的を共有し、同じ障害を持つ「促進者としての対戦相手」と競技性スポーツという活動を通じて成長して行くことで、各自のリカバリーゴールへと向かって行くものとする。

また、他障害の領域においても、その効果が指摘されているように、精神障害の領域においても競技としてのスポーツに参加することが社会参加の機会となり、スポーツを通して「つながりの再構築」することが社会的統合につながるものとして期待することが出来るだろう。しかし障害者のスポーツ参加が、必ずしも障害者と健常者の統合に直結している訳ではないとの指摘もあり、何が競技性スポーツへの参加と社会的統合をつなぐのかを明らかにする必要がある、その在り方や道筋にも精神障害特有のものがあると思われる。

また、この競技としてのスポーツへの取り組みが当事者をエンパワメントするだけでなく、精神障害のある人が選手としてスポーツ大会に参加すること自体が、アンチ・スティグマにつながることを指摘されており、その効果が期待される。特に当事者や家族からの発信は極めて重要であり、スポーツを介して一般住民と接触体験を図ることにアンチ・スティグマの効果が期待できるだろう。

しかしながら、これらの報告も支援者側からの実践報告的なものが多く、実際に当事者選手がどのように効果や意義を感じているかについては不明である。また運営についても、多くは支援者の有志で行われているなど、運営基盤は十分なものとなっていない。

またニーズ調査についても支援者を対象としたものが中心であり、当事者対象のものは少数である。また現在の精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及がバレーボール競技を全国障害者スポーツ大会の正式種目化するためにトップダウン方式で行われた事を考えると、現在のモデルは当事者の意見を反映させている確証はなく、そのことが実施・普及させていく上で支障になっているとも考えられる。特に本研究では競技性を重視し取り組んでいるため、より競技性の高いスポーツに取り組んでいる当事者選手からの意見聴取が重要であろう。

実施・普及については、現段階では日本精神保健福祉連盟の取り組みが一つのモデルと言えるだろう。しかし組織を介したトップダウン形式であるため般化するモデルとは言い難く、またすべての競技が全国障害者スポーツ大会の公式種目化を目指すことは、障害枠の点からの現実的に難しい。一方、大阪の高槻精神障害者フットサルクラブ・WEAREのように地域で精神障害のある人のスポーツを支援する団体や、NPO 法人日本ソーシャルフットボール協会のように精神障害のある人のフットサル競技を統括する団体が生まれるなど、各地において少しずつではあるが、実施・普及の動きが見られ始めている。日本精神保健福祉連盟の先行的な取り組みを参考にしつつも、各団体が持つ知識や経験、効果的な取り組みなどを共有することで、より効果的な実施・普及のモデルを開発することが出来るだろう。実施・普及のモデルを開発する上では、対象者のスポーツ開始についても考慮しなくてはならないが、「スポーツへの社会化」の視点から、精神障害のある人にとって誰がそのきっかけをつくる「重要な他者」と成り得るのか、明らかにする必要があるだろう。これまでレクリエーションやリハビリテーションとしてのスポーツしか提供されてこなかった精神障害のある人が、「重要な他者」と出会って「スポーツへの社会化」が行われる。そして、そこには「競争性」

を含む競技性が伴っていることが重要と考える。

またスポーツの継続には影響力や指導力をもつ指導者の存在が重要とされており、実施・普及の質にも影響を与えると考える。また、当事者の主体性をどう引き出すかが大きなカギになるだろう。

他障害およびスポーツ途上国での実施・普及実践では、「体験会実施の重要性」や「病院外サークルの設立」、それを支える「指導者の派遣やプログラム提供」などが指摘されており、これらも実施・普及モデルに反映されてくるかと思われる。

現在、フットサル競技を中心に、国際化への取り組みといった上位大会整備への取り組みが活発となっている。確かに選手の意欲喚起や潜在的ニーズを持つ層の掘り起こしと言った意味では重要と思われるが、一方で国内での実施・普及方法が確立しておらず、不十分な状況下といえる。そのため、国際化の取り組みを尊重しつつも、まず当事者にとっての意義を明らかにするとともに、その実施・普及に携わる支援者にとっての意義も明らかにし、当事者と支援者相方の目指すべき競技性スポーツの在り方を明らかにし、社会的統合としても効果的な実施・普及を推進するモデルを開発する必要があるだろう。

以上のことを理論的な枠組みとして暫定版理論モデルを示す（図 3.参照）

2. 先行研究から構築した暫定版理論モデル（仮説）

先行研究より得た示唆から、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及に関する暫定版理論モデル（仮説）を構築した（図 3.参照）

これまで精神障害のある人たちは、施設内でのレクリエーションからリハビリテーション（高畑 2011）としてのスポーツしか提供されずにいたが、「重要な他者」との出会いからスポーツに取り組むようになる。身体障害の領域では友人が（藤田.2013）、また知的障害の領域では学校教員が「重要な他者」（佐々木.2007）となることが多いことが報告されているが、精神障害の領域では誰が「重要な他者」となり得るのか、現段階では不明である。

初めはレクリエーションとしての取り組みかもしれないが、「競争」という視点が加わることで競技としてのスポーツに取り組むようになる。スポーツの継続要因としては「勝利」や「技能の向上」などが指摘（太田.2002）されており、競技性スポーツを通して「勝利」と言った成功体験や「技能の向上」と言った成長の実感が重要となる。現在、精神障害の領域で行われているスポーツは、みな団体競技である。この団体競技を介して、同じ障害を持つ仲間たちと「勝利」という目的を共有し、同じ障害を持つ「促進者としての対戦相手」（Fraleigh.W.P.1989）と切磋琢磨する中で「スポーツへの社会化」（Kenyon ら.1973）を進めていく。その過程は単なる楽しみでは終わらず（皆川.2010）、個々のストレングスを伸ばし、活かす場ともなり得る（坂井.2012）。また希望を取り戻す一つのきっかけ（西銘.2000）にもなり、達成感を得ることで自尊心を回復（岡崎.2004）する機会となるなど、その過程を通して当事者選手をエンパワメントすることが出来ると考える。また競技としてのスポーツ大会に参加すること自体が、ノーマライゼーションの一過程（坂井.2011）であり、社会参加の機会としても重要である（酒井.2012）。なお、障害者のスポーツ参加が必ずしも障害者と健常者の統合化にはつながらず、スポーツを通して健常者と障害者が交流することが社会的統合を促進する上で重要（宮崎.2003）である。また、当事者が自ら発信することがスティグマ解消に効果的（森本.2016）であり、当事者選手が競技性スポーツを介して一般住民と接触体験（大島.1989）を図ることがアンチ・スティグマに繋がっていくと考える。

また競技人口と競技レベルは車軸の両輪といわれる。レクリエーションではなく競技性スポーツを展開するためには、並行して実施・普及活動を行う必要があり、競技性が高まることで競技人口が増え、また競技人口が高まることで、その競技性も高まる。そこには当事者の主体性（森本.2016）（大西.2014）も重要となる。そのため、実施・普及が進むことで競技レベルも上がり、当事者選手が得る達成感や自尊感情も大きくなる。またよりレベルの高いパフォーマンスを示すことが、より高いアンチ・スティグマの効果を示すと考える。

なお、これらの競技性スポーツとしての活動を通して当事者選手はエンパワメントされていき、自信をつけてリハビリゴールへと向かうと考えられるが、当事者を対象としたニーズ調査が少なく、現段階では何がゴールとなるかは不明である。今後の調査で、明らかにしていく必要があるだろう。

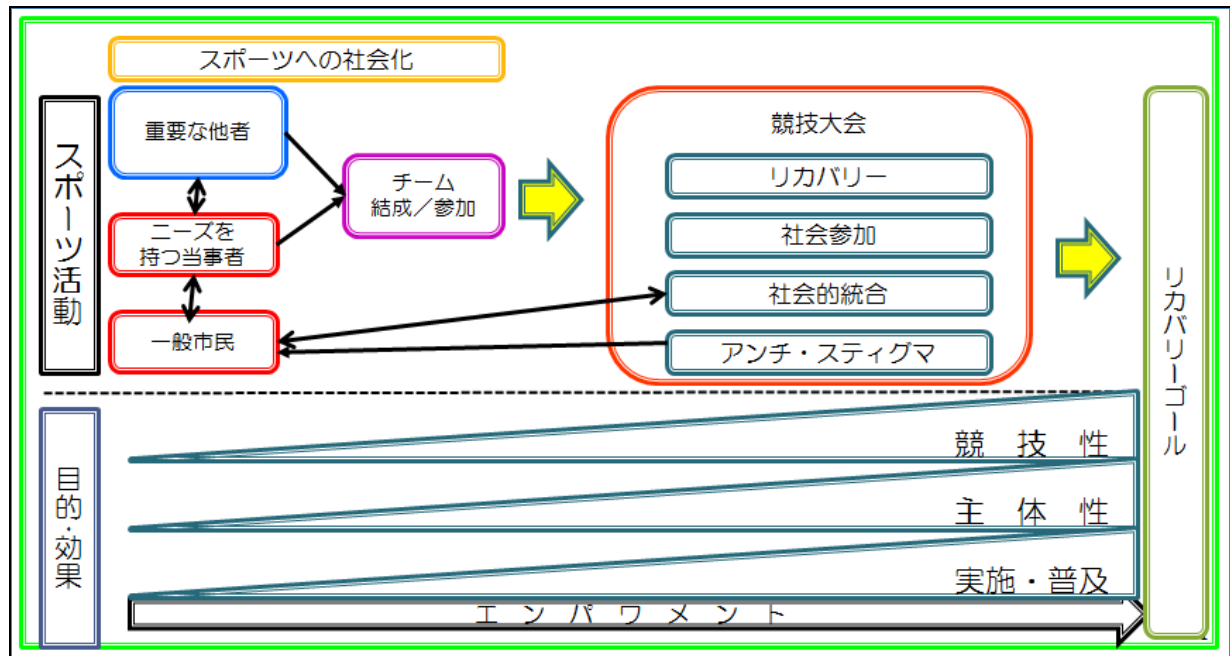


図 3. 理論研究から構築した暫定版理論モデル（仮説）

第2章 当事者トップ選手に対する全国聞き取り調査の内容分析

～質的研究に基づく実施・普及モデルの構築①：当事者は競技性スポーツに何を望んでいるのか～

前章では文献調査によって、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツは人生の転機とも成り得る有益な活動であることや、社会的統合の機会として期待することが出来る可能性が示唆された。しかし一方で、その実施・普及のあり方も未確立であることが明らかになった。日本精神保健福祉連盟の取り組みが競技性スポーツの関心の高まりに与えた影響は大きく、実施・普及の起爆剤となったことには間違いいないと考える。しかしながらトップダウン的な推進であったため、当事者のニーズと合致しているかは不明である。

そのため、本章では競技としてスポーツに取り組んでいる精神障害のある当事者選手からニーズを聴取し、当事者が競技としてのスポーツに何を望んでいるのか言及する。またその聴取を通して、精神障害のある人にとって、競技性スポーツが当事者にどのような影響を及ぼしたのかについても言及する。

第1節 目的

本研究の目的は、競技としてスポーツに取り組んでいる精神障害当事者選手に対して、競技に取り組むことの意義や目的などについて聞き取り調査を実施し、その結果から当事者選手が望む競技性スポーツの在り方を明らかにし、それと合致した実施・普及モデルを探索的に構築することである。また競技性スポーツが精神障害のある人に対して、どのような影響を及ぼしているのか明らかにすることである。

第2節 方法

1. 当事者選手に対する聞き取り調査

競技性スポーツの機会を提供する側または支援する側からは分かり得ない、当事者選手側からの視点や内情、大会出場を困難にする要因など、調査票上だけでは得られない、これまでの実施経験から得られた知見について明らかにするためには、直接当事者の語りを聞くことが重要と考え、競技性スポーツ大会に選手として携わっている精神障害のある当事者選手（以下、当事者選手）を対象にインタビューガイドを用いた（資料1.参照）半構造化面接による聞き取り調査を、1人当たり30～60分程度行った。聴取目的は、当事者選手が競技性スポーツに取り組むことの目的や意義、課題などを聴取することで、当事者が望んでいる競技性スポーツのあり方を明らかにすることである。具体的内容としては、競技性スポーツに取り組むことの意義や、競技性スポーツに取り組むようになった経緯、競技性スポーツに取り組んだことによる影響や、競技性スポーツを継続していく上での課題などである。

なお、本研究では競技性スポーツを対象としているため、対象者の選定については国際大会や全国大会に出場しているなど、競技としての取り組みが強い選手を優先的に対象とした。具体的にはNPO 法人日本ソーシャルフットボール協会のホームページ上でソーシャルフットボール国際大会選抜選手の所属チームを確認し、選手が在籍する5チームの代表者を通じて調査協力を依頼し、その上で同意が得られた当事者選手を対象とした。また、同意の得られた当事者選手に対しては、日程調整の上調査者が訪問し、再度対面にて研究の趣旨説明を行い、その上で調査協力に同意した対象者には同意書への記入を依頼し、書面での回収を持って正式な対象者とした。

またバレーボールについては現在、県選抜制となっており選手の所属チームが確認出来ないため、機縁法を用いて競技性スポーツ大会に出場している当事者チームを選出し、代表者を通じて調査協力を依頼し、その上で同意が得られた当事者選手を対象とした。なおチーム選出基準については公式大会（県大会以上）に出場経験があり、連絡先等が公開されているチームとした。またバスケットボールもチーム数が少ないため、バレーボールと同様の手続とした（調査期間：平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日）。

2. 分析方法

本研究では当事者選手が置かれている状況や、競技性スポーツに取り組むことの目的や意義、課題などを理解することが中心となる。そのため、データをもとに文脈から再現可能かつ妥当な推論を行うための調査技法である内容分析（Krippendorff.1980）が妥当であると判断した。

聞き取り内容は IC レコーダーにて録音し、後日逐語録を作成した。作成した逐語録は、1 つの意味を含む単位で抽出し、素データとした。素データの内容を保ったまま簡潔な表現に変換したものをコードとした。コードの意味、内容から共通性のあるものを統合し、サブカテゴリーとした。また同様に、サブカテゴリー間において意味・内容から共通性があるものを統合し、メインカテゴリーとした。

また、導き出された精神障害のある当事者トップ選手の語りの内容をもとに、プログラム評価理論を援用し、その発展していく過程を【導入期】【本実施期】【発展期】の 3 期に分け、ライフサイクル論的な視点および実施・普及の視点で考察し、モデル構築を行った。

3. 倫理的配慮

本調査は、日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審の承認を得て実施した（平成 27 年 5 月 14 日承認：受付番号 14-1201）。

本研究の参加者には文章と口頭にて研究目的および内容や、本調査によって不利益になることはないこと、回答は拒否できること、調査結果の公表および個人情報保護についての説明を行い、その上で調査協力に同意した対象者には同意書への記入を依頼し、書面での回収を持って正式な対象者とした。また、聞き取り調査への協力撤回は随時可能である旨を伝え、撤回した場合においても不利益にはならない事を説明し、いつでも研究に関する説明を求めることが出来るよう、研究者の氏名、所属、連絡先を明示した。

対象者の同意を得て録音したデータは、聞き取り調査終了後速やかに逐語録を作成し、その後録音データは消去した。また、逐語録の入ったデータはパスワードを設定するとともに鍵のかかる場所に保管した。また聞き取りデータは対象者ごとに ID 番号で管理した。

データの保管期間は本研究終了時（平成 31 年 3 月）を最長とし、廃棄に関しては電子データに関しては消去、ペーパーベースに関してはシュレッターにて廃棄することとした。また公表に当たっては、個々の氏名や所属機関が特定されない形でアルファベットや記号を用いて匿名化を図った。

第3節 結果

1. 対象者の属性

17団体25名（男性22名、女性3名、平均年齢30±5.6歳）より調査協力の下承を得て、聞き取り調査を実施した（表4.参照）。なお、1人当たりの平均聴取時間は27分であった。なお、25名中6名は日本ソーシャルフットボール協会が開催した、第1回ソーシャルフットサル国際大会（2016年2月開催）の選抜選手であり、9名は日本ソーシャルフットボール協会主催の全国大会およびバレーボールは全国障害者スポーツ大会のブロック大会、日本ドリームバスケットボール協会が主催する全国大会に選手として参加した実績を持つことから、競技性スポーツの対象者として代表性があると判断致した。

表4. 対象者（当事者選手）の属性

ID	所属チーム	所属属性	年齢	性別	競技	競技実績
A01	A	クラブチーム	30代前半	男性	バスケットボール	全国大会出場
A02	A	クラブチーム	30歳前半	男性	バスケットボール	全国大会出場
A03	B	DCチーム	20代後半	男性	フットサル	県大会優勝
A04	B	DCチーム	20代前半	男性	フットサル	県大会優勝
A05	B	DCチーム	30代前半	男性	フットサル	県大会優勝
A06	C	DCチーム	30代前半	男性	フットサル	県大会優勝
A07	D	クラブチーム	非公開	女性	バレーボール	市大会優勝
A08	D	クラブチーム	30代半ば	男性	フットサル	県大会入賞
A09	E	DCチーム	40代前半	男性	バスケットボール	全国大会優勝
A10	E	DCチーム	20代半ば	男性	バスケットボール	全国大会優勝
A11	F	DCチーム	20代後半	男性	フットサル	日本代表
A12	F	DCチーム	20代後半	男性	フットサル	日本代表
A13	G	クラブチーム	20代後半	男性	フットサル	日本代表
A14	G	クラブチーム	20代後半	男性	フットサル	地区代表
A15	H	クラブチーム	20代半ば	男性	フットサル	地区代表
A16	H	クラブチーム	30代半ば	男性	フットサル	地区代表
A17	H	クラブチーム	30代半ば	女性	フットサル	地区代表
A18	H	クラブチーム	30代後半	男性	フットサル	地区代表
A19	H	クラブチーム	40代前半	男性	フットサル	地区代表
A20	I	クラブチーム	20代後半	男性	フットサル	日本代表
A21	J	クラブチーム	20代半ば	女性	フットサル	日本代表
A22	K	DCチーム	20代前半	男性	フットサル	地区代表
A23	K	DCチーム	20代前半	男性	フットサル	日本代表
A24	L	クラブチーム	30代前半	男性	フットサル	地区代表
A25	L	クラブチーム	30代前半	男性	フットサル	地区代表
対象者の診断名（n=25）			統合失調症：15名 気分障害：3名 社会不安性障害：3名 適応障害：2名 強迫性障害：1名 チック：1名			

2. 内容分析の結果

結果、7つのカテゴリーが抽出された（表5参照）。なお、本文中においてカテゴリーについては【 】、サブカテゴリーについては〈 〉、対象者の発言については太字・斜体で示した。

以下、特徴的なサブカテゴリーのみ記載する。

①【競技としてスポーツに取り組む意義・目的】

本調査では対象者が競技性スポーツに参加している当事者であるため、当然ながら競技志向・向上心〉といった意見が多く聞かれた。

やっぱり公式の大会に出ると言うことは、勝つという事が目標にえられるっていうので、意欲的に取り組める。デイのお遊びみたいのとは違うので（A703）

また、競技として取り組むことによって、やりがいがあるんじゃないか（A304）といった〈やりがい〉にもつながっていることや、真剣にやることで自分の中の意識で、何かが生まれる変化を期待している（A614）といった自身への〈変化への期待〉なども含んでいることが示唆された。また競技性スポーツではあるものの、障害者大会の方が、リラックスして出来る（A1017）も聞かれるなど、一般の競技性スポーツとは異なる障害者スポーツという〈保護的な環境の希求〉があることが示された。

しかし一方で、最初は、本当にリハビリ感覚で「日常生活がしっかりできるようになっていけばいいかな」みたいな（A2203）といった、〈リハビリテーション〉を目的としてスポーツを行っていると言う意見や、スポーツは楽しみとした方が、やっぱりいいと思う（A105）など、〈レクリエーション〉として捉えている意見も聞かれた。中にはこんなに本格的にやると思ってなかったんだと言った意見も聞かれるなど、やや競技性スポーツの中に他のニーズを持つ人たちも、一括りになっている印象も受けた。

また、いろんな病院の人と接することができたことは、すごくいいことだと思う（A507）と言ったように、主に同じ当事者選手を中心とした施設の枠を超えた〈仲間との交流〉を求める意見も伺われた。特に多くの対象者から「人と接する」という発言が聞かれるなど、スポーツという媒介を通して、同じ障害を持つピアとしての当事者選手と、施設の枠を超えた交流を行うことに、大きな意味合いがあることが伺われた。

②【病状への影響】

最初は電車乗るのきつかったけど。今は全然、そういうの感じなくなった（A1206）と言うような〈症状の安定〉を感じている者が多く見られる一方で、病状に変化は特にありませんね。変わらないです（A808）、基本的に症状がなくなったことは、一回もないんで（A2408）といったような、〈影響なし〉と感じている者も一定数見られた。

また、スポーツをして疲労すると、喉の筋肉が強張って喉に強い力が入るんですよ。（A108）などと言った〈不安や疲労〉など、マイナスの面を訴えるものも一定数おり、回答者の約半数は、病状に良い影響を感じてはいなかった。上記の【競技としてスポーツに取り組む意義・目的】では、〈リハビリテーション〉としての目的が挙げられていたが、必ずしも医学的リハビリテーションとして機能しているわけではないことが示唆された。

③【気持ちの変化】

物事に前向きに取り組めるようになったというのはありますね (A208)、いろんな人と会話、接することが出来るんで。それはちょっと自信になりましたね (A514)というようなく前向きになれた><自信がついた>などの気持ちの変化が伺われた。また生活が、すごくメリハリが出来た (A807)、体を鍛えるようになった (A205)といった意見が聞かれるなど、<気分の充実>や<生活の変化>にも大きく影響していることが分かった。これらの経験を踏まえて就労など社会に戻っていく選手が多いことから、単に症状が良くなるかどうかといった医学的リハビリテーションと言うよりは、むしろ競技としてのスポーツを介しつつ、様々な人たちと交流を重ねることによってエンパワメントされていくという、社会的リハビリテーションとして機能していることが伺われた。

一方で、仲間の発言に傷ついたり、ちょっと不安になったりする (A720)と言った<心理的ストレス>も抱えていることが示唆された。

④【大会に望むこと】

チーム数が少ないので。もっと多くのチームが参加できるような、チームを増やしていければいいかなと思いますね (A2214)と言った<より一層の普及>やいろんな競技が増えたら一番いいのかなって思います (A1246)といった<競技種目の拡大>が望まれていた。また競技性スポーツであるがゆえに、レクリエーションではなく、厳密な大会を開催してほしい (A322)といった<ルールの厳格化>や世界大会みたいな国際大会になってほしい (A322)といった<上位大会の整備>が望まれており、これらの活動を前向きになるきっかけ (A1716)と捉える意見も伺われた。また、これからも続けていってください (A1049)といった<継続の要望>も聞かれており、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツは、当事者の意見からも実施・普及が望まれていると言えるだろう。

また一方で、多くの選手から<社会的統合>を大会に望む意見が聞かれた

当事者だけ。福祉・医療に携わる人だけとか。そういう区別は、僕はしたくないなあと。当事者だからとかじゃなくて、同じようにかき混ぜて出来たらと思うんですよね (A240)

今は精神障害の人たちだけでやってますけど、一般の人たちとの交流とか、そういう機会。大会とか通じて、その差っていうか境をできるだけ縮まっていけばいいかなと思いますね (A1117)

あんまり、くくりをつくらないでほしいですよ。本当に健常者も性別も年齢も障害の種類とかも関係なく、ごた混ぜで僕はやりたいですよ (A2415)

本来、競技性の高いスポーツであれば、勝負に勝つことが最大の目的となる。障害の有無をさておき、プロスポーツやオリンピックなどを見れば、その目的は明らかであろう。本研究においても調査の対象とした方々は世界選抜に出るような、より競技性の高いスポーツに取り組んでいる選手たちであるが、その選手たちがあえて社会的統合を望むところに、精神障害のある人の競技性スポーツの特徴が伺われる。また一方で僕たちは勝つことも大切なんですけど、楽しくやるっていうのも大切です。楽しむっていうのは大事なんで (A425)といった、競技性とは対極の<レクリエーション>を望む意見も多く聞かれた。

⑤【競技性スポーツに取り組む上での課題】

今、チームとして人数が減少してて。新しく入ってくる人も、今あんまりなくて (A1221)

と言った<競技人口の不足>が挙げられており、なかなかチームやメンバーが増えないことが課題として挙げられた。

また競技に専念する一方で、今は安定してますけど、もし悪くなったら続けられなくなるっていう不安はありますね (A1632) といった自身の<病状への不安>を持っており、それがスポーツ活動を継続する上で支障となっていることが示唆された。競技としてのスポーツが実施・普及されても、それが当事者の心身の健康に悪影響を与えてしまえば、本来の当事者の心身の健康や Well-Being に貢献するという意義から逸れてしまう。これらの不安に対しては、何らかのサポート体制を考慮する必要があるだろう。一方で精神症状の云々は自己で対処します (A943)、競技としての配慮、スポーツ大会としての配慮を望みます (A945) といった意見も聞かれるなど、競技性スポーツの場における医療的サポートではなく、競技としての配慮も望まれていた。

また、競技性スポーツの活動が社会的リハビリテーションの一環として作用しているにも関わらず、就労という社会復帰の一步を踏み出すことで社会に進出するにつれて、そっちが忙しくなって難しくなってくるのかなあと。競技をすることが (A1124) といった<就労や日々の生活>に追われてしまい、競技継続が困難になってしまう様子が伺われた。例え新しいメンバーが増えたとしても、定着して行かなければ結果として競技人口は減ってしまう。この事は<競技人口の不足>にも大きな影響を及ぼしていると思われる。またスポーツ活動を楽しむ機会が阻害されてしまうと言う意味では、当事者の well-Being を損なっているともいえる。この事は、競技性スポーツから離れたあとの受け皿が準備されていないことも示していると思われる。

また、やはりちょっと金銭的に厳しくて大会に参加ができないとか (A1847)、お金が出る選手の中の選抜チームみたいな感じになってきてる。(A1349) といった意見もあり、<経済的な問題>により、大会に参加することが難しい選手が出てきていた。筆者も経験的に、就労移行が難しく生活保護を受給しながらスポーツ活動に加わっている当事者選手を複数見てきている。

平成 24 年度障害者白書によると、精神障害者の平均月収は 12.9 万円とされる。さらに就労継続支援 A 型事業所の利用者の賃金の平均月額が 7.2 万円、就労継続支援 B 型事業所では 1.3 万円であり、経済的には非常に切迫した状況と考えられる。また一方で遠征費とかは、チームとしてクリニックに援助してもらっている (A1130) と言った意見も聞かれるなど、チームの形態および個人の置かれた経済的状況により格差が生じ、活動に制限が生じていることが示唆された。

また、競技としてやっているけど、そこに参加する意識に差があったりする (A210) といったチーム内における<目標の不一致>があることが示唆された。また練習場所が、なかなか取れないと言ったことがあり (A952) といった<練習場所の確保>が課題となっていることが分かった。

⑥【精神障碍の領域におけるスポーツへの社会化】

ほとんどの選手は、所属している施設が、スポーツが盛んな施設で「やってみないか」と声をかけられて (A101) といったように、たまたま通院もしくは通所した施設にてスポーツ活動が行われており、偶然の出会いからスタッフや仲間に繋がり、<スタッフや仲間からの声かけ>をうけてチームに加入していた。他は<親の進め>や<偶然>でチームに繋がっていた。

人がどのようにしてスポーツを行うようになるのかは、「スポーツへの社会化」によって説明がなされている。スポーツ開始のきっかけをつくる「重要な他者」について、身体障碍の領域では「友人」との回答が最も多く、医療関係者は少数あり、知的障碍の領域では多くの時間を共有する学校教員などが示されたが、精神障碍の領域においては精神科デイケアなどのような医療施設や地域活動支援センターのような福祉施設が多く、結果として精神保健福祉関係者とそこに通う仲間が「重要な他者」となるところが特徴的と言える。またチームを自ら探して所属した当事者は少数だった。

そういった意味では、必ずしもニーズを持った人が競技性スポーツにアクセス出来ているわけではなく、入口の部分が未整備であることが想定された。

⑦【その他】

幸いチームに繋がったものの、このチームとしてのまとめ役は、やっぱスタッフさんがやってるのです (A2419) と言ったように、その運営等を病院または施設の職員に依存するなどスタッフ主導の運営>が行われている様子が伺われた。特にこれらは施設型のチームに見られ、主として施設の活動の一環として行われているが故にスタッフ主導となっていると思われる。しかし先行研究からも、「スポーツへの社会化」に対して当事者の主体性が重視されており、選手の主体性やエンパワメントを行っていく上では、支障となる可能性が高いと思われる。

また技術面とか磨くために、指導してくれる人がいる場所があれば行きたい (A755) といったく指導者の希求>も見られた。指導者を望む行為は、それ自体が主体的な活動とも言える。スポーツの継続要因としても、「勝利」や「技能の向上」、「成績・記録の向上」、「達成感」などが重要とされており、実力を持った指導者の重要性も指摘されている (太田.2002)。先行研究からは、他の障害者スポーツにおいて「指導者派遣およびプログラム提供事業」(藤田.2003) が提案されており、これが実施・普及の一助となる可能性がある。

また、競技性スポーツという活動を媒介とし、勝利と言う目標を共有することで、強い連帯感が生じていることが分かった。選手の中には、自分が一番苦しんでいるときに会った仲間です。自分が生きていくうえで、当たり前だけど欠かせない人たちです。 (A255) と話すなど、<仲間に対する思い>を訴える選手も多く見られた。また地域クラブチームなどでは、ピアサポートの効果からスポーツを介したクラブハウスの機能を持ってきたことが示唆された。

また選手の一部は、偏見はちょっと怖いですけど、確かに (A1667)、まだまだ偏見があるので、そういう目で見られるんじゃないかっていう不安はあります (A2314) と発言するなど、<偏見に対する不安>を抱えながらスポーツ活動に取り組んでいることが示された。精神障害のある人を対象としたスポーツにおいて、アンチ・スティグマは大きなテーマである。現在、全国障害者スポーツ大会において平成 20 年度より精神障害のある人の正式参加が認められたことから、他障害と同一レベルでのプライバシー確保の原則や、大会参加資格として精神障害者保健福祉手帳所持者に限定する方向が示されている。平成 28 年には障害者差別解消法が施行されるなど、法的保護環境としては整ってきたと言える。しかしながらセルフ・スティグマの課題は法的な整備で解消されるものではないため、競技性スポーツの普及度に合わせて柔軟に対応する必要があるかと思われる。そのような状況下、当事者選手たちは<偏見に対する不安>を抱えつつも、スポーツを通して社会復帰を果たそうとしている姿勢が見て取ることが出来る。

5. カテゴリー一覧（当事者選手）

メインカテゴリー	サブカテゴリー	コード（代表例のみ抜粋して表記）	n
競技としてスポーツに 取り組む意義・目的	競技志向・向上心	公式大会に出ると、勝つという目標にたえられる（A203） 競技として行い、頂点をめざしたい（A403） 目標を設定し結果も求め、真剣に取り組みたい（A917） やるからには負けたくない（A1412） 試合に勝ちたいとかっていうのもある（A1812）	21
	リハビリテーション	病状を良くするため、頑張っている（A341） 勝ちを目指すことが一番リハビリになる（A1211） リハビリ感覚で取り組んでいる（A2203）	14
	仲間との交流	いろんな人と接することが出来た（A507） 人と関われる場があるのがいい（A2510）	11
	レクリエーション	スポーツは楽しみとした方が、いいと思（A105） スポーツできる喜びを感じたい（A1012）	10
	やりがい	真剣にやることで生きがい、やりがいを感じる（A304）	7
	保護的環境の希求	障害者の大会の方が、リラックスして出来る。（A1017）	5
	変化への期待	自分の中に何か生まれる変化を期待している（A614）	3
	その他	こんなに本格的にやると思っていなかった（A504）	4
病状への影響	症状の安定	症状だと思う精神的な弱さを持たずに済む（A810） 電車乗るのがキツかったが、感じなくなった（A1206） 人との関わりも苦ではなくなってきた（A1612）	18
	変化なし	病状には、あまり関係ないかも知れない。（A535） 基本的に症状がなくなったことは、一回もない（A2408）	11
	不安・疲労の影響	スポーツをして疲労すると、喉の筋肉が強張る（A108） 一生懸命やりすぎて（増悪したことが）ある（A1308）	16
気持ちの変化	前向きになれた	物事に前向きに取り組めるようになった（A208） 小さな悩みを、気にしなくなった（A1710）	9
	自信がついた	いろんな人と会話、接することが自信になった（A514）	8
	気分の充実	生活がすごくメリハリが出来た（A807）	7
	心理的ストレス	仲間の発言に傷ついたり、不安になる（A720）	6
	生活の変化	体を鍛えるようになった（A205）	4
大会に望むこと	社会的統合	当事者だけでなく、かき混ぜて出来たらと思う（A240） 一般の人たちとの境をできるだけ縮めたい（A1117） 障害者とかが一般とか関係なく、交流したい（A1554）	14
	より一層の普及	チームを増やしていければと思います（A2214） 競技チームが増えてほしい（A924）	12
	レクリエーション	楽しくやるっていうのも大切で（A425）	7
	ルールの厳格化	レクではなく厳密な大会を開催してほしい（A322） 競技としてのスポーツ大会の配慮を望む（A946）	6
	上位大会の整備	世界大会みたいな国際大会になってほしい（A321）	6
	継続の要望	大会を楽しみにしているんで続けてほしい（A1049）	4
	競技種目の拡大	いろんな競技が増えたらいいと思う（A1246）	3
	その他	前向きになるきっかけになったと思う（A1716）	2

メインカテゴリー	サブカテゴリー	コード（代表例のみ抜粋して表記）	n
競技性スポーツに取り組む上での課題	就労や日々の生活	社会に進出したことで、忙しくなった（A1124） 就労した後は、なかなか厳しいなと思う（A937） 仕事との両立が厳しいと思う（A1835）	12
	経済的問題	金銭的に厳しくて大会に参加ができない（A1847）、 お金が出る選手の選抜チームになっている。（A1349）	10
	競技人口の不足	チーム人数が減少し、新しく入る人もいない（A1221）	8
	病状への不安	もし悪くなったらという不安はある（A1632）	8
	目標の不一致	競技としてやっているが、参加意識に差がある（A210）	5
	練習場所の確保	習場所が取れないことがある（A952）	4
精神障害の領域におけるスポーツへの社会化	スタッフや仲間からの勧誘	所属施設でやってみないか声をかけられた（A101） デイケアのスタッフに勧められた（A1701） 入院中に監督に誘われた（A2201）	17
	親の勧め	親に勧められて（A501）	4
	体を動かすため	障害とか関係なく、ただやる場がほしかった（A2401）	1
	偶然	ニュースでやっているのを、偶然見た（A1601）	1
その他	スタッフ主導の運営	スタッフが決めている。（A523） 監督とかコーチがエントリーしてくれる（A22018） まとめ役は、スタッフがやっている（A2419）	15
	チームや仲間への思い	自分が生きていく上で欠かせない人たち。（A255）	6
	指導者の希求	指導者のいる人がいる場所があれば行きたい（A755）	5
	偏見に対する不安	まだ偏見の目で見られないか不安はある（A2314）	2

非
公
開

非
公
開

い
間へ

仲
して

試合に臨み
ルに

ベリーゴー

あ

ア

非
公
開

目
続
おり、

本
も
てい

く。また同様に、
新たに
章

非
公
開

非
公
開

非
公
開

第3章 競技性スポーツに実績のある支援者に対する全国聞き取り調査の内容分析 ～質的研究に基づく実施・普及モデルの構築②：支援者は何を目的に競技性スポーツの推進を行っているのか～

前章では、当事者選手へのインタビュー調査から、当事者選手にとって競技としてのスポーツに取り組むことの意義や目的について、明らかにした。またその目的も、仲間とのスポーツ実施を通してエンパワメントされることで重層化して行き、障害のある人もない人も一緒に行うスポーツ活動に変化した。また障害を持ちつつも一般の大会に出場する様な社会的統合としての活動に変化して行くことが明らかになった。

しかし、上記の活動は当事者だけで成り立つものではなく、支援者の存在が大きく影響を及ぼしていると言える。前章で示した「スポーツへの社会化」では支援者は「重要な他者」であり、スポーツを始める上で重要なキーパーソンである。また大会の多くは支援者を中心とした実行委員会が開催していることが多く、当事者の望む形と支援者が支援したい方向が合致していなければ、実施・普及は停滞してしまうだろう。そのため、本章ではこれまで精神障害のある人の競技性スポーツの実施・普及に実績を残してきた支援者に対して、支援者が考える意義や目的、効果的だった方法などを聴取することで、支援者側の視点からの実施・普及のあり方を以下に言及したい。

第1節 目的

本研究の目的は、これまで精神障害のある人を対象とした競技性スポーツ大会の開催や、実施・普及に取り組んできた実績のある支援者が、実施・普及に取り組むことの目的・意義や効果的だった取り組み、今後の課題や展望などを聴取することで、支援者にとって精神障害のある人の競技性スポーツを支援する目的・意義や効果的な実施・普及のありかたを明らかにするとともに、前章で構築した実施・普及モデル（仮説）の追記・修正を行うことである。

第2節 方法

1. 支援者に対する聞き取り調査

精神障害のある人の競技性スポーツについて、実際に普及・推進活動に携わっていなくては分かり得ない、サービス提供者側からの視点や内情、うまく普及・推進につながった要因など、調査票上だけでは得られない、これまでの実施経験から得られた知見について明らかにするためには、直接実績のある支援者（以下、支援者）の語りを聞くことが重要と考えた。第1章で分析したとおり、競技性スポーツの発展にとって「重要な他者」の存在は不可欠であり、支援者からの聞き取りを位置づけることにした。この調査では、先進的な実施・普及に取り組んできた支援者を対象に、競技性スポーツとその実施・普及の意義・目的の聞き取り中心のインタビューガイドを用いた（資料2.参照）半構造化面接による聞き取り調査を、1人当たり30～60分程度行った。

聴取目的は、これまで精神障害のある人を対象とした競技性スポーツ大会の開催や、実施・普及に取り組んできた支援者が、実施・普及に取り組むことの目的・意義や効果的だった取り組み、今後の課題や展望などを聴取することで、効果的な実施・普及のありかたを明らかにすることである。

なお、対象者の選出については機縁法を用い、これまで精神障害のある人を対象とした競技性スポーツ大会の開催や、実施・普及に取り組んできた実績のある団体を対象とした。具体的には精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの大会を全国または県レベルで主催したことのある団体と

した。結果、全国で9団体が確認できたため、その団体代表者もしくはそれに代わる関係者に対して趣旨説明を行い、研究協力の承諾を得た。また後日、日程調整の上調査者が訪問し、再度対面にて研究の趣旨説明を実施。その上で研究協力の同意が得られた支援者には同意書への記入を依頼し、書面での回収を持って正式な対象者とした。

2. 分析方法

本研究では支援者が精神障害のある人に対して競技性スポーツの実施・普及に取り組むことの意義・目的や、効果的だった取り組み、今後の課題や展望などを理解することが中心となる。そのため、データをもとに文脈から再現可能かつ妥当な推論を行うための調査技法である内容分析(Krippendorff,1980)が妥当であると判断した。

聞き取り内容はICレコーダーにて録音し、後日逐語録を作成した。作成した逐語録は、1つの意味を含む単位で抽出し、素データとした。素データの内容を保ったまま簡潔な表現に変換したものをコードとした。コードの意味、内容から共通性のあるものを統合し、サブカテゴリーとした。また同様に、サブカテゴリー間において意味・内容から共通性があるものを統合し、メインカテゴリーとした。

また、導き出された支援者の語りは、前章にて精神障害のある当事者トップ選手の語りの内容からプログラム評価理論を援用し導きだした【導入期】【本実施期】【発展期】といった3期のモデルに追記・修正して行く形でモデル化を行った。

3. 倫理的配慮

本調査は、日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審の承認を得て実施した（平成27年5月14日承認：受付番号14-1202）。

本研究の参加者には文章と口頭にて研究目的および内容や、本調査によって不利益になることはないこと、回答は拒否できること、調査結果の公表および個人情報保護についての説明を行い、その上で調査協力に同意した対象者には同意書への記入を依頼し、書面での回収を持って正式な対象者とした。また、聞き取り調査への協力撤回は随時可能である旨を伝え、撤回した場合においても不利益にはならない事を説明し、いつでも研究に関する説明を求めることが出来るよう、研究者の氏名、所属、連絡先を明示した。

対象者の同意を得て録音したデータは、聞き取り調査終了後速やかに逐語録を作成し、その後録音データは消去した。また、逐語録の入ったデータはパスワードを設定するとともに鍵のかかる場所にて保管した。また聞き取りデータは対象者ごとにID番号で管理した。

データの保管期間は本研究終了時（平成31年3月）を最長とし、廃棄に関しては電子データに関しては消去、ペーパーベースに関してはシュレッターにて廃棄することとした。また公表に当たっては、個々の氏名や所属機関が特定されない形でアルファベットや記号を用いて匿名化を図った。

第3節 結果

1.対象者の属性

9団体9名（男性8名、女性1名、平均年齢45.7±10歳）を対象に聴取を行った（平均聴取時間47分）（表6.参照）。

現段階において、精神障害のある人を対象としたスポーツ全般について、統括する団体はない。そのような状況下において、以下の9団体のうち2団体は全国を対象とした競技統括団体であり、6つは、県もしくはブロックにて大会開催等を行っている団体である。また一つは全国でも先駆的に当事者主体の地域型クラブチームを立ち上げた支援団体であり、それぞれの過去の実践実績からGP事例として適任と判断致した。

表 6. 対象者の属性（支援者）

ID	年齢	性別	職種	主要な関連団体	支援競技		実施実績
B01	50代	男性	OT	A 協議会	フットサル	バレーボール	県・ブロック大会の開催
B02	30代	男性	OT	B 連盟	フットサル		県・ブロック大会の開催
B03	60代	男性	PSW	C 協会	フットサル	バレーボール他	全国組織運営。全国、国際大会開催
B04	50代	女性	OT	D 実行委員会	フットサル		地域大会開催
B05	40代	男性	OT	E（クラブチーム主催者）	フットサル	バレーボール他	クラブチーム立ち上げ
B06	30代	男性	OT	F 協会	バスケ		全国組織運営。全国大会開催。
B07	40代	男性	DR	G 実行委員会	フットサル		県大会開催
B08	40代	男性	DR	H クラブ	フットサル		県・ブロック大会の開催
B09	30代	男性	OT	I クラブ	フットサル	バスケ	県・ブロック大会の開催

2. 内容分析の結果

8つのカテゴリーが抽出された。（表7.参照）なお、本文中においてカテゴリーについては【 】, サブカテゴリーについては< >、対象者の発言については太字・斜体で示した。

①【競技としてのスポーツに取り組むきっかけ】

何かスポーツで患者さんが社会と触れ合えるような機会を作りたいと思ってた（B4102）と言う発言にもあるように、支援者の多くは病院や支援において<リハビリテーション>を提供する側におり、そこでリハビリテーション・プログラムの一環として、スポーツ活動を用いていた。また、臨床現場に身を置いているからこそ、利用者さんの中からやりたいて話が出てきて（B2101）と言った<当事者からの希望>を拾い上げ、スポーツに取り組み始めていた。

またソフトバレーボールのチームに携わったことが、一つの経緯というか。転機でしたね（B5101）と言った意見が見られるなど、<全国障害者スポーツ大会>において、バレーボール競技が精神障害のある人を対象とした初の公式種目になったことを契機に活動に参加したものも多く見られた。

他には<学会での声かけ>や<いろいろなつながりから>活動に加わったとの意見が見られた。

②【自身のスポーツ体験の影響】

＜自身の経験が背景にあった＞

自分がやってたスポーツだからっていうところですね。(B8105) と言った発言から見られる通り、支援者の多くは自身もスポーツ経験を有しており、特に経験のある馴染みのスポーツをバックボーンに活動を行っていた。またガチンコでしたいっていう風な感覚に共感しやすいバックボーンがあったのかなーと思います (B9104) といった意見からも、自身が競技としてスポーツに取り組んだ経験があるからこそ、競技性に対する理解・共感が生じていると言える。

また単なる支援ではなく、支援者自身もやっぱり自分の好きなことに関わることで、楽しくやれてる (B2106)、自分が、やっぱり一緒になってやれるっていうことは、大きいですね (B8105) といったように＜自分もスポーツをしたい＞と考えており、競技性スポーツの実施・普及を図る上で新たな支援者を獲得するためには、①スポーツ経験があり、その種目に関心があること、②当事者選手と一緒に活動出来る土壌があることなどが重要となるかと思われる。

③【自身の心境の変化】

これまで、病院や施設でのレクリエーションまたはリハビリテーションの一環としてのスポーツしか行われていなかったため、精神障害のある人が競技としてスポーツに取り組みることに対して慎重になる意見も多い。医者が最初否定的な人が多かったんだよね、ケガさせたらどうすんだ、とかストレスで発病したらどうすんだとかって (B312) と言った発言が見られるなど、競技としてのスポーツは決して歓迎されながらのスタートではなかったことが見て取れる。しかしながら、実際に競技としてのスポーツを行ってみると、支援者が考えていた以上のパフォーマンスを見せており、競技性スポーツに好意的であった支援者でさえも活動を通して＜効果の実感＞や自身の＜イメージを覆された経験＞をしていた。また、その活動を通して＜一つの表現方法＞だと感じ、そこに携わることで＜意味のあることの実践＞が行えたと感じていた。

こんなに良くなるんだなと思いました。最初は本当に弱いボールしか蹴って無かったのが、本当に力強いボールを出して、そのうちには本当に接触プレーとか、ああいうことも (B4111)

それがある日、場所を変えて関わってみたら、こんなに環境一つで動くことが出来るし。そこまです出来るか、やれるかっていう私の中の価値観を、ガラッとひっくり返してくれた一つの機会ではあったかなと (B5109)

自分の持ってたイメージってのが、それは偏見だったし覆されたっていうイメージが多いですね、今は (B6112)

④【競技性スポーツを推進する意義・目的】

当事者選手は競技性スポーツの大会に求めるものとして＜社会的統合＞を上位にあげていたが、支援者側もそれを後押しすべく、**障害があってもなくてもってところに繋げていきたい (B2125)、これは支援者側の一つの理念ではあるんですけど。垣根を取り払いたってのがあってですね (B5176)**といった社会的統合を意図した競技環境を作り上げたいと考えていた。

また、当事者がスポーツを通し健康な面を示すことが＜アンチ・スティグマ＞に繋がることを期待して活動していた。

医療者が持つ、一般が持つ、障害者自身が持つスティグマってものを、すべて取り払うことが出

来ればってということなんですね (B6119)

その競技に取り組んでいく中で、大会とか。そういったものを通じて、アンチ・スティグマにも貢献できてるのかなってような欲望があります (B9110)

また、競技性スポーツへの取り組みを介して、当事者の方たちが元気になっていく姿を見るのがうれしい (B5114) と言ったくリハビリテーション>としての視点や、当事者にとっての目標作りと言う視点からく自己実現>という意見が挙げられた。中には当事者の事をく仲間みたいな感じ>で捉えている支援者もあり、スポーツを介して当事者と支援者の関係が変化する可能性が示唆された。

⑤【これまでの取り組みや効果的な取り組み】

実施・普及の取り組みとしては、<大会運営>や<教室開催>が効果的とされ、大会開催の実行委員会には医療・福祉関係者だけでなく当事者や一般市民も加わっていることが多かった。また実行委員会においても、**より当事者の意見が反映されやすくなりましたかね。**(B 7141) と言った意見が聞かれるなど、当事者の主体性が増すなどの変化が生じて来ていた。

また、<スポーツイベント>も効果的な取り組みであり、特にプロ・スポーツチームと連携した活動が効果的であった。事実、フットサルなどではJリーグ・ガンバ大阪協力の下、精神障害のある人を対象としたフットサル大会「ガンバ大阪・スカンビオカップ」を開催し、大変な盛況を博した。特にJリーグは、その100年構想の中で地域貢献を掲げており、札幌ではコンサドーレ札幌の、甲府ではヴァンフォーレ甲府協力の下、大会や教室などを開催している。このようなプロ・スポーツチームによる協力は、**トップリーグの人たちが絡んでいるところは、自尊心だったり自己肯定感に影響してくる** (B7150) と言った当事者選手のモチベーションや自尊心を高める上で、とても重要である。また**大会の時はメディア関係にも声はかける** (B2119) など、広報活動も重視していた。

⑥【今後の展望】

今後の展望については、**いい意味でごちゃまぜに** (B7124) と言ったように、より<社会的統合>の色合いを強めたいとの意見が見られた。また当事者選手と同様に**もっと種目が増えてほしい** (B1220)、**裾野がもっと広がってほしい** (B8117) といった<普及・推進>を望むのと同時に、**しっかりと組織や大会を作りたい** (B1139) といったくきちんとした組織作り>を望む意見が聞かれた。また組織のあり方についても精神保健福祉関係者だけでなく、**各競技のスポーツ関係者が入るべきだと思う。関係団体の人が入った組織にしないと、精神関係だけではだめだよ**ね (B3138) と言ったくスポーツ関係者の参画>が望まれていた。また競技性スポーツだけではなく、レクリエーション・スポーツを含めたく競技と交流相方の必要性>が伺われた。

⑦【実施・普及への示唆】

チームの在り方については**選手が増えないのは、チームの母体が病院だったりクリニックだったり。だから当然、そこに通う人でサッカーやる人がいなければ増えないです。**(B8175) と言った指摘があるように、<地域型クラブチームへの移行>が期待されていた。また、そのことが新たな競技者開拓に大きな影響があることが指摘された。事実、病院や施設などでプログラムの一環としてスポーツを行う場合、その施設利用者しか参加することが出来ない。そういった意味では、利用施設問わず誰でも参加出来る地域型スポーツクラブへの移行は必須であろう。

また**関東なんかね、その当事者の人たちが作る大会とか。ああいうのって、素晴らしいな**と思

って (B4291) といった＜当事者主催の大会開催＞などが期待されていた。事実、首都圏下では当事者が主催する大会も出てきており、今後の発展が期待されている。

また大会の実行委員会や競技団体と選手の間で解離が起きぬよう、＜選手会の設立＞の設立が重要であることが指摘された。当事者の意向が一番かと思うんです (B5129) といった意見もあるなど、＜当事者の意見を反映＞することの重要性が指摘された。また＜広報の重点化＞や＜スポーツ団体とのタイアップ＞が効果的との意見も挙げられた。

⑧【実施・普及の課題】

＜金銭面＞での課題が大きく、そのことが大会参加などにおいてしようとなっていることが挙げられた。支援者からがサラリーマンの給与所得に比べれば、全然もらえてないんじゃないか。それは精神障害って、障害を持っているがゆえに起こってることなんであれば、もう少しかけるお金も少なく出来ないかなと思ったりはします (B5229) といった意見が上がるなど、障害ゆえの低所得である事を考慮した計画的な仕組みが必要であることが示唆された。

また競技性が高まるにつれて競技性が高まると、新たに入ってくる人の問題が出てきて。非常にレベルの高いところで、入りづらいっていうようなところがあって (B6164) といった＜新人の入りにくさ＞が生じていることが示唆された。当事者選手からの回答でも、競技性だけではなくスポーツでできる喜びってのを感じたい (A1012) と言った＜レクリエーション＞とを望む声もあり、競技性へと単極化が、他の層を望まずも排除してしまう状況になっていることが示唆された。それゆえか、＜チーム数・参加者数の伸び悩み＞も課題として挙がっていた。また＜会場確保のしにくさ＞も、課題として挙げられた。

また「スポーツしたい」って言っても、「それで具合悪くなったらどうするの」とか不安を煽っちゃうと、どうにもなんないですよ (B5244)、「うちは出来ないから」って、支援者が決めてるは残念だと思いますね。 (B7156)、と言ったように、＜支援者の先入観＞がフィルターとなって、ニーズを持つ当事者の意思決定に影響を及ぼしている可能性が指摘された。またこの事は、競技人口が増えない一因にもなっていると思われる。

表 7. カテゴリー一覧（支援者）

メインカテゴリー	サブカテゴリー	コード（代表例のみ抜粋して表記）	n
競技としてスポーツに取り組むきっかけ	リハビリテーション	スポーツで社会と触れ合える機会を作りたい（B4102） スポーツプログラムを導入したかった(B7102)	4
	全国障害者スポーツ大会	ソフトバレーボールが、一つの転機（B5101）	2
	学会での声かけ	スポーツ精神医学会での声掛け(B6101)	1
	当事者からの希望	利用者からやりたいと話が出た(B2101)	1
	いろいろなつながりから	いろんなつながりが結びついた形(B310)	1
自身のスポーツ体験の影響	自分の経験が背景にあった	自分がやっていたスポーツだから（B8105） 真剣という感覚に共感する背景あった（B9104）	7
	自分もスポーツをしたい	自分が、一緒になってやれる(B8105)	5
自身の心境の変化	効果の実感	自信がでて意欲が出た（B2107） こんなに良くなるんだと思った（B4111）	7
	イメージを覆された	価値観を、ガラッとひっくり返してくれた（B5109） 自分の持っていたイメージを覆された（B6112）	5
	意味のあることの実践	本当に意味のあることがやれている気がする（B2198）	1
	一つの表現方法	ひとつの表現方法としてのスポーツとを感じる（B7104）	1
	視野の広がり	見えていた部分が本当に狭かった（B5111）	1
競技性スポーツを推進する意義・目的	アンチ・スティグマ	スティグマをすべて取り払いたい（B6119） アンチ・スティグマというところが強い(B7110)	4
	リハビリテーション	元気になっていく姿を見るのがうれしい（B5114）	4
	社会的統合	垣根を取り払いたい(B5176)	3
	仲間としての活動	仲間みたいに感じる（B4120）	3
	自己実現	当事者にとって目標ができるということ（B8110）	3
これまでの取り組みや効果的な取り組み	大会運営	大会をつくること（B1131） 県大会の運営（B2126） 大会のようなものを開いた(B3150)	10
	教室開催	クリニック（教室）を開催した（B1133） 年に2～3回教室を開催している（B2129）	7
	広報活動	メディアへの声かけを行った（B2119）	5
	スポーツイベント	他団体との共催イベントの実施（B6138）	3
今後の展望	社会的統合	いい意味で、ごちゃまぜにしたい（B7124） 健常者と同じ土俵でプレーできるようになる（B8119）	4
	普及・推進	もっと種目が増えてほしい（B1220） 裾野がもっと広がってほしい（B8117）	4
	競技と交流双方の必要性	競技大会と交流大会が必要（B4132）	3
	スポーツ関係者の参画	スポーツ関係者が入るべき（B3138）	3
	きちんとした組織作り	しっかりと組織や大会を作りたい（B1130）	3

メインカテゴリー	サブカテゴリー	コード（代表例のみ抜粋して表記）	n
実施・普及への示唆	当事者の意見を反映	当事者の意向が一番反映されている事（B5129）	
	広報の重点化	周知がされてないと言うのがある（B6193）	3
	スポーツ団体とのタイアップ	Jリーグなどとのタイアップ（B4203）	3
	地域型クラブへの移行	選手が増えないのは、母体が病院ため(B8175)	1
	当事者主催の大会開催	当事者の人たちが作る大会（B4202）	1
	選手会の設立	選手会つくるべき（B397）	1
実施・普及の課題	金銭面	全然もらえてない（B5229） 色々な面でお金がかかる（B6162）	8
	チーム数・参加者数の伸び悩み	チーム数が少ない（B7173）	4
	新人の入りにくさ	競技性が高まると、新入が入りづらい（B6164）	3
	会場確保の難しさ	体育館を借りる日数を増やせない（B8143）	3
	支援者の先入観	支援者が決めているは残念（B7156）	3

非公開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

第4章 競技性重視のスポーツ大会に参加するチームを対象とした全国質問紙調査の分析 ～暫定版実施・普及モデルの妥当性検証を中心に～

前章の研究では、当事者選手および支援者からの聞き取り調査により、支援者が望む実施・普及のあり方と効果的な取り組みについて明らかにした。また、第2章で明らかにした当事者選手におけるスポーツを介した社会的統合の過程を示し、【導入期】、【本実施期】、【発展期】の3期から成る暫定モデルを構築することが出来た。しかし前章で明らかとなった9項目の課題について、解決すべき方向性は明らかとなっていない。また聞き取り調査の対象者を競技性の高いスポーツに取り組む当事者選手に限定したため、理論的な偏りが生じている可能性がある。そのため、本章では全国に精神障害のある人を対象としたスポーツチームを対象に質問紙調査を行い、それらの結果に対して探索的な検討を行うことで、量的な知見から競技性スポーツの実施が精神障害のある人や社会に対して与える影響や、実施・普及に必要な要因などについて言及し、前章までで構築した実施・普及モデルについて理論的な補足・補強を行った。

第1節 目的

本研究の目的は、全国で活動している、精神障害のある人を対象としたチームに対して質問紙調査を行い、それらの結果に対して探索的な検討を行うことで、量的な知見から競技性スポーツの実施が精神障害のある人や社会に対して与える影響や、実施・普及に必要な要因などについて言及し、前章までで構築した実施・普及モデルについて理論的な補足・補強を行うことである。また、その結果からスポーツを介した社会的統合を実現させるためには、各段階においてどのような支援が必要となるのか、示唆を得ることである。

第2節 方法

1. 精神障害のある人を対象としたスポーツチームに対する質問紙調査

競技性を重視したスポーツ大会に参加している精神障害のある人を対象としたチーム（以下、当事者チーム）を対象に、郵送による質問紙調査を行った（資料3参照）。なお、質問紙の回答者はチームの代表者とし、チームメンバーと相談の上での回答も可としたが、最終的な判断は代表者に一任する形とした。

2. 対象チームの選出

対象となるチームの選出については、平成27年度現在で競技性スポーツ大会に出場実績のある当事者チームとした。詳細は以下の通りである。

①バレーボール競技

バレーボール競技の統括団体・公益財団法人 日本精神保健福祉連盟・精神障害者スポーツ推進委員会委員長宛に質問紙調査実施およびチーム情報提供に関する依頼書を送付し、承諾を得た。また対象チームの選出については、平成 27 年度に全国障害者スポーツ大会の予選会である県および市（政令指定都市のみ）大会に参加したチームを対象とした。郵送先の入手については、県・市大会を担当する部署が県・市事で異なるため、県・市の障がい者スポーツ協会、障害福祉課、家族会などに電話にて担当部署を確認。確認に改めて電話にて協力を依頼。同意の得られたチームのみ情報提供を受けた。（図 10.参照）

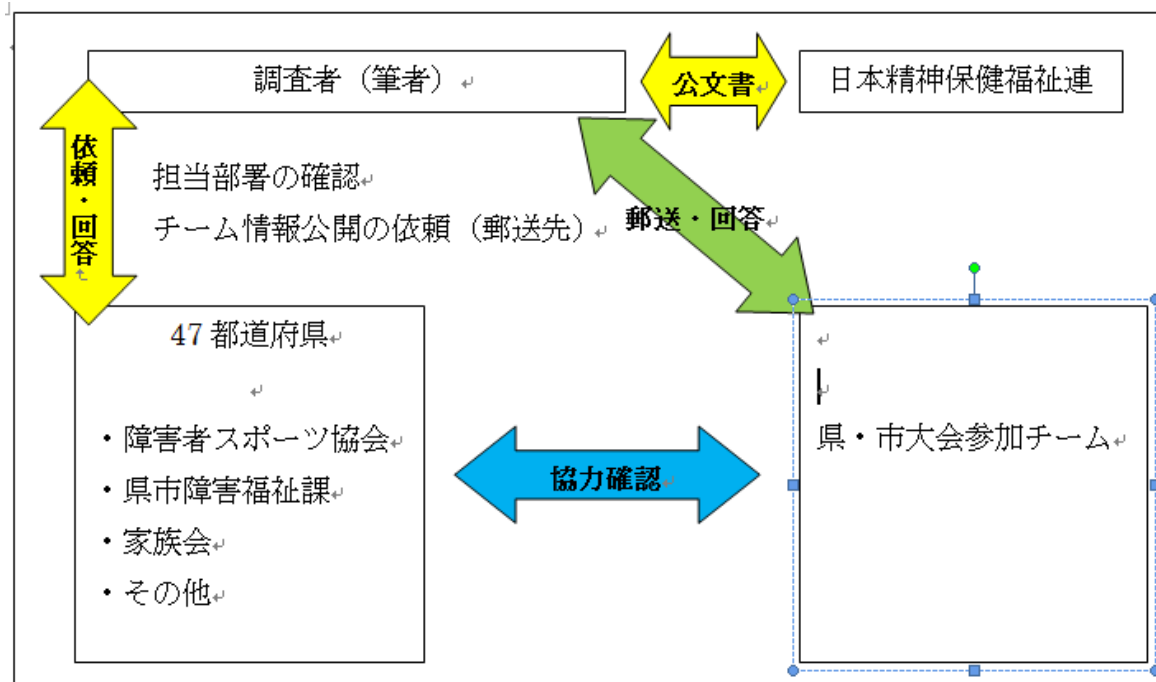


図 10.バレーボール競技調査依頼から実施までの流れ

②フットサル競技

精神障害のある人を対象としたフットサル競技の統括団体、NPO 法人日本ソーシャルフットサル協会（以下、JSFA）理事長宛に質問紙調査実施およびチーム情報提供に関する依頼書を送付し、承諾を得た。また対象チームの選出については、JSFA 主催の全国大会出場チームおよび地域大会出場チームとした。郵送先の入手については JSFA からの情報提供を受けた。また地域大会については主催する団体およびキーパーソンに協力を依頼。同意の得られたチームのみ情報提供を受けた。

③バスケットボール競技

精神障害のある人対象とした競技のバスケットボール競技の統括団体、NPO 法人日本ドリームバスケットボール協会（以下、JDBA）理事長宛に質問紙調査実施およびチーム情報提供に関する依頼書を送付し、承諾を得た。また対象チームの選出については、JDBA 主催の全国大会出場チームおよび地域大会出場チームとした。郵送先の入手については JDBA からの情報提供を受けた。また地域大会については主催する団体およびキーパーソンに協力を依頼。同意の得られたチームのみ情報提供を受けた。

3. 調査内容

調査内容は、先の調査研究から得られた結果を参考に作成した。主な項目は、①チーム・プロフィール（チームのあり方）、②活動内容、③経済状況、④実施・普及活動、⑤活動頻度、⑥活動方針、⑦自由記載の7項目である。

各項目の質問事項については、前章で明らかにした課題等を反映させ、実施・普及の示唆を得られるよう意図して作成した。具体的には、以下の通りである（表8.参照）。

表 8. 質問紙調査の設問と解決すべき課題との対応

NO	項目	設問	課題との対応
1	チーム・プロフィール	設問 1～5	#1、#6、#8
2	活動内容	設問 6～8	#2
3	経済状況	設問 9～11	#4
4	実施・普及活動	設問 12～16	#1、#5、#7
5	活動頻度	設問 17～18	#7、#8
6	活動方針	設問 19～30	#7、#8
7	自由記載	設問 31	

NO6の活動方針については、インタビュー調査で抽出されたチームの志向性および特徴的状況など、以下の12項目を方針として挙げた。

なお、各項目の評価基準についてはリッカート尺度を用い、「とても重視している。もしくは9割以上の選手は該当する（もしくは、そう考えている）」を5点とし、「やや重視している。もしくは7割程度の選手は該当する（もしくは、そう考えている）」を4点、「どちらとも言えない。もしくは半数の選手は該当する（もしくは、そう考えている）」を3点、「あまり重視していない。もしくは3割程度の選手は該当する（もしくは、そう考えている）」を2点、「重視していない。もしくは1割以下の選手は該当する（もしくは、そう考えている）」を1点とする5件法で回答を求めた。

- ①競技性（スポーツを、どの程度競技として捉えているか）
- ②レクリエーション度（スポーツを、どの程度レクリエーションとして捉えているか）
- ③リハビリテーション度（スポーツを、その程度リハビリテーションとして捉えているか）
- ④社会的統合度（どの程度、障害のあるなし関係のない取り組みを重視しているか）
- ⑤限定志向度（どの程度、メンバーを限定しているか）
- ⑥流動性（メンバーが、どの程度チームに定着しているのか）
- ⑦主体性（どの程度、選手が主体的に取り組んでいるか）
- ⑧拡充要素（メンバーを増やすため、どの程度活動しているか）
- ⑨セルフヘルプ度（チームが、どの程度セルフヘルプの機能を果たしているか）
- ⑩経済的負担度（チームが、どの程度経済的な負担を感じているか）
- ⑪大会満足度（現在参加している大会に、どの程度満足感を持っているか）
- ⑫実施・普及不満度（現在の実施・普及について、どの程度不満を感じているか）

また、要素の抽出については各項目について、筆者のこれまでの経験などから、該当すると思われる質問項目を10つ、候補として挙げた。それらの質問項目12（1項目10個＝120個）について、これまで精神障害のある人のスポーツに携わってきた支援者3名に対して、より妥当と思われる5項目に絞り込みを依頼。デルファイ法を用い決定することで、項目の妥当性を担保した。

4. 倫理的配慮

本調査は、日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審の承認を得て実施した（平成 29 年 2 月 27 日承認：受付番号 16-1001）。

上記の手続を踏まえリストアップした競技性スポーツ大会に参加しているチームに対して、質問紙を郵送もしくは電磁的方法（E-Mail など）にて回答を依頼し、チーム代表者を回答者とした。郵送物もしくは添付資料には①質問紙、②調査協力依頼文、③実施要綱、④返信用封筒（郵送のみ）とし、実施要綱の中で本調査によって不利益になることはないこと、回答は拒否できること、調査への協力撤回は随時可能である旨を伝え、撤回した場合においても不利益にはならない事を記載することとした。なお対象者の調査協力同意については、質問紙の回答（返信）をもって同意を得たと判断することとした。

5. 分析方法

自記式郵送調査を依頼した 368 チームのうち、回答のあった 172 チームを対象に分析を行った（回収率 46.7%）。チーム・プロフィールに関しては単純集計を実施し、チーム代表者の属性やチーム形態、対象疾患、経済状況などを明らかにすることとした。

「チームの志向性」については、各項目において信頼性分析を実施し、項目の信頼性を検証した（表 13.参照）。また各チームにおける志向度の結果について正規性の検定を行ったところ有意な結果を示さなかった。そのため、チーム形態と各項目の関係を明らかにすることを目的に施設チームと地域クラブチームの志向度の違いを、Mann-whitney の U 検定および一元配置分散分析を用いて明らかにすることとした。またチームの成長にも注目し、質問紙調査の結果から全体を「導入期」、「本実施期」、「発展期」の 3 期に分け、その志向度を同様の方法で比較検討した。なお 3 期に分ける上での操作的定義としては質的研究の調査結果から各期の特徴である導入期＝レクリエーション、本実施期＝競技性、発展期＝社会的統合に注目し、競技性に関する設問 5、7、8、17 を競技性が高い順に数値化し、合計点の中央値から上位半分を「本実施期群」とし、下位半分を「導入期群」とした。また設問の中で 0 の値が該当するチームは、合計点に関わらず「導入期群」とした。また設問 1 および設問 6 における回答 3) を選択した群は「発展期群」とし、上記 2 問が該当したチームは他の期該当であっても発展段階の視点からより上位への振り分けが妥当と考え、「発展期群」へと割り振った（表 9.参照）。また選手の年代にも注目し、10～20 代が最も多いチームと 30～40 代が最も多いチーム、40～50 代が最も多いチーム、世代混合のチームの 4 つに分類し、各年代と志向性の関係についても比較を行った。また「チームの志向性」の各項目について、項目ごとの相関分析を実施した。競技性スポーツを介して精神障碍のある人を社会的統合へと向かわせるためには何が必要なのか、影響する要因を明らかにするため因子分析を実施した。対象項目は 12 項目に「チーム形態」を加えた 13 項目とし、主因子法とバリマックス回転を行い、欠損地はペアごとに除外した。なお、スクリープロット上では固有値 4 因子が確認出来たが、第 4 因子（実施・普及不満度）の解釈が難しく、他因子の負荷量が高い項目もあったため、3 因子指定として実行した（表 25.参照）。また因子を構成する項目の選定は、因子負荷量 ≥ 0.300 以上を基準とした。また、上記の結果からスポーツを介した社会的統合を推進するためには、どのような支援が必要なのか重回帰分析を実施した。結果、発展期に相応する重要な 5 つの志向度が抽出された。そのため、その 5 つの志向度と社会的統合との関係を確認するため探索的なパス解析を行い、最も適合度の高いモデル図と質的調査から作成した暫定版実施・普及モデルと比較を行い、その類似性を確認することで妥当性を検討した。重回帰分析は正規分布であることが前提となるが、残差分析の結果「正規分布に近い状態」であることが確認されたことと、重回帰分析は強固な分析であることを考慮し、重回帰分析およびパス解析が妥当と判断した。なお、上記の分析には統計解析ソフト「SPSS Statistics 25 for Windows」、「SPSS Amos 25 Graphics for Windows」を使用した。

表 9. 各期振り分けの手順

期	対象設問	項目	配点
導入期			
本実施期	設問 5 コーチの有無	1)プロの指導者から指導を受けている 2)競技経験者から指導を受けている 3)競技経験のある当事者選手がコーチを兼任 4)医療機関のスタッフから指導を受けている 5)指導者はいない	5 3 3 3 導入期
	設問 7 練習頻度	1)ほぼ毎日、練習している 2)週に 2～3 回程度、練習している 3)週に 1 回程度、練習している 4)月に 2～3 回程度、練習している 5)月に 1 回程度、練習している 6)試合前だけ練習している 7)練習はしていない	7 6 5 4 3 導入期 導入期
	設問 8 練習時間	1)30 分未満 2)30 分～1 時間程度 3)1 時間～1 時間半程度 4)1 時間半～2 時間程度 5)2 時間以上	導入期 2 3 4 5
	設問 17 大会参加	1)年に 1～2 回程度 2)年に 3～5 回程度 3)年に 6～10 回程度 4)年に 11 回以上 5)その他	1 2 3 4 0
	⇒競技性項目の合計点中央地を基準に、上位を本実施期、下位を導入期とする		
定着期	設問 1	3)当事者だけでなく一般の参加者も含む地域型クラブチーム	発展期
	設問 6	3)障碍の有無は関係なく、一般の方も含めて連取	

非
公
開

非公開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

チームの
った
ー
0

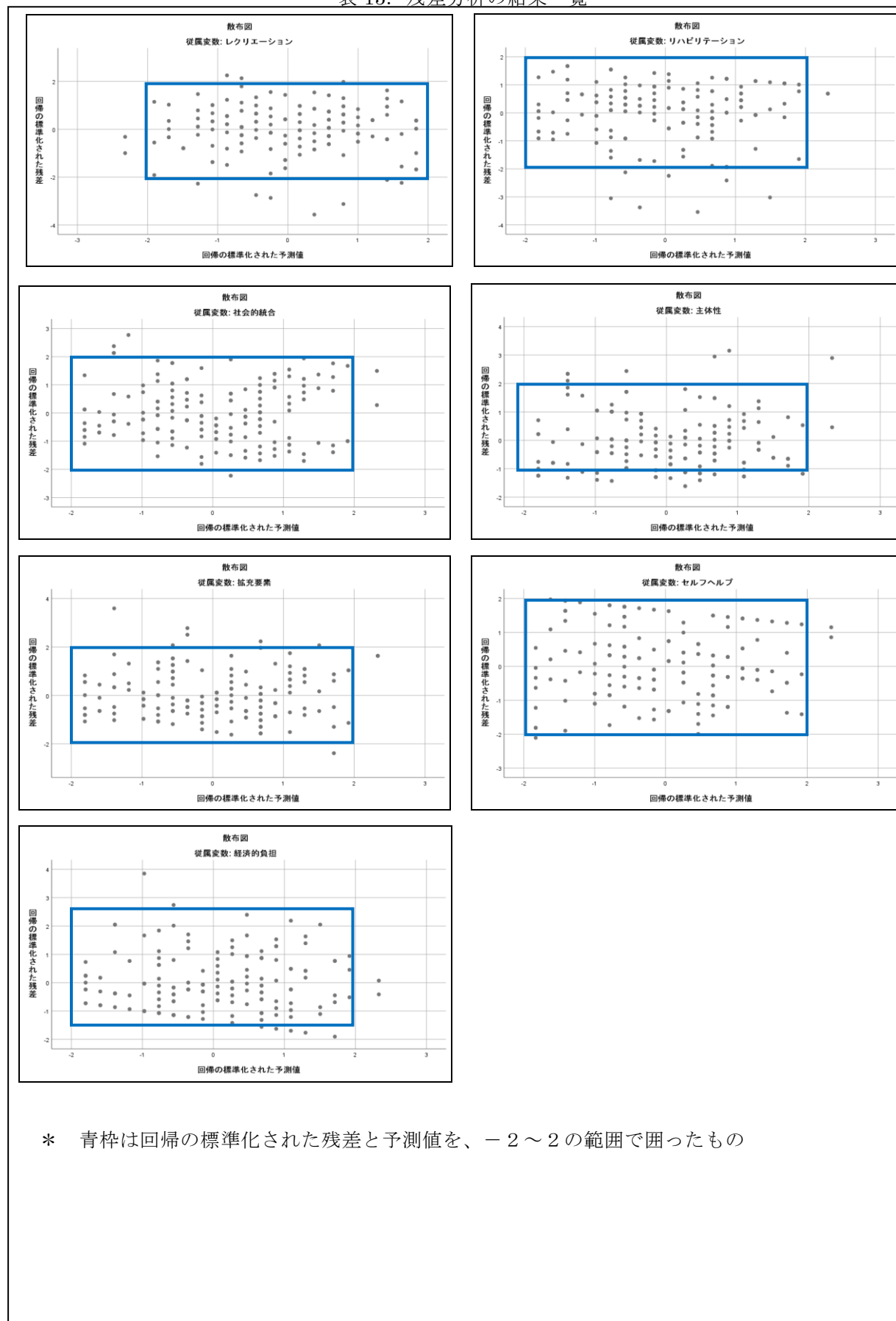
性分析を行
りテ
て
ま

非
公
開

非
公
開

3
6
22
00
00
07
25
00
00
00
00
28
38

表 15. 残差分析の結果一覧



非
公
開

チーム形態：0 = 施設チーム 1 = 地域型クラブチーム

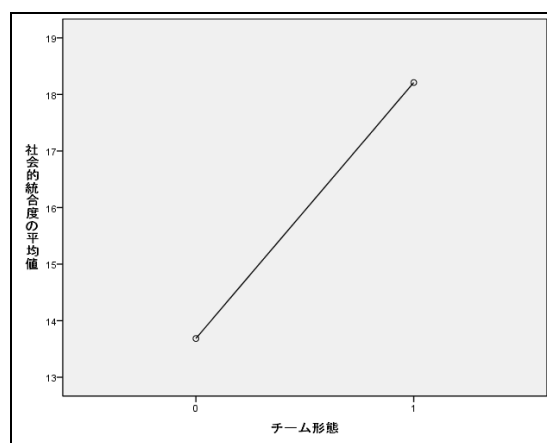
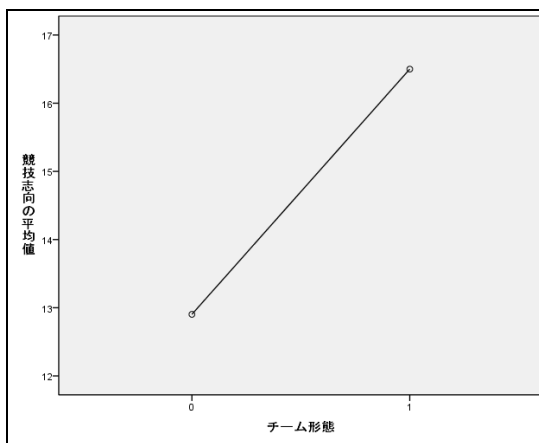
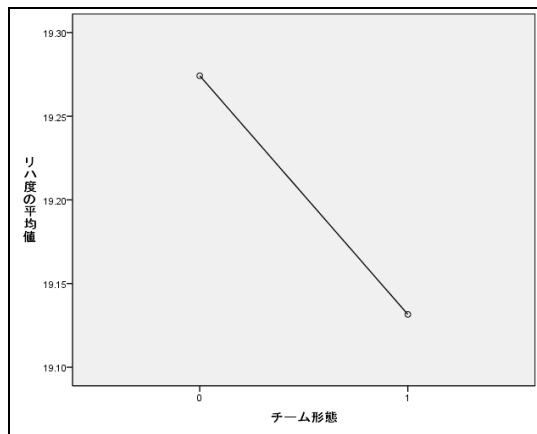
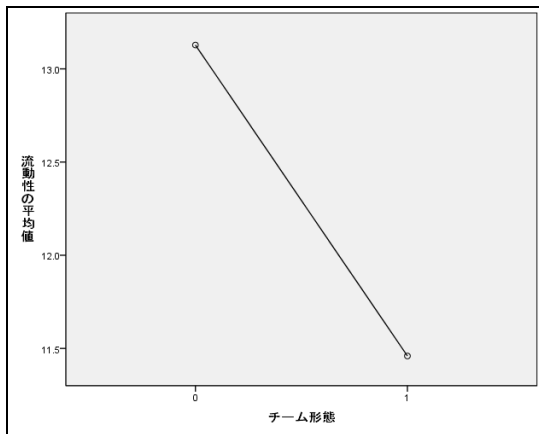
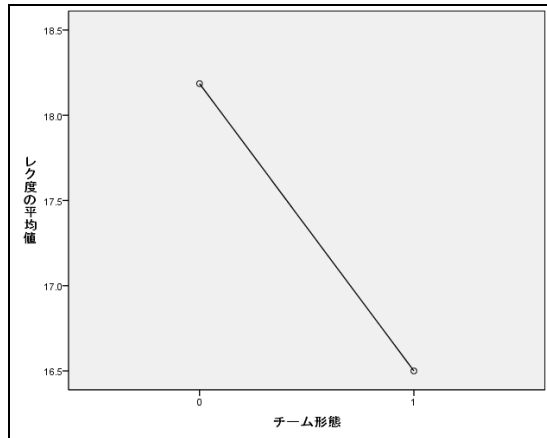
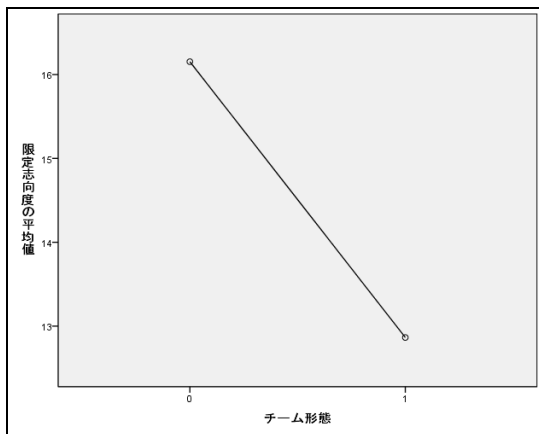


図 11. チーム形態における志向度の一元配置分散分析・プロット図①

チーム形態：0＝施設チーム 1＝地域型クラブチーム

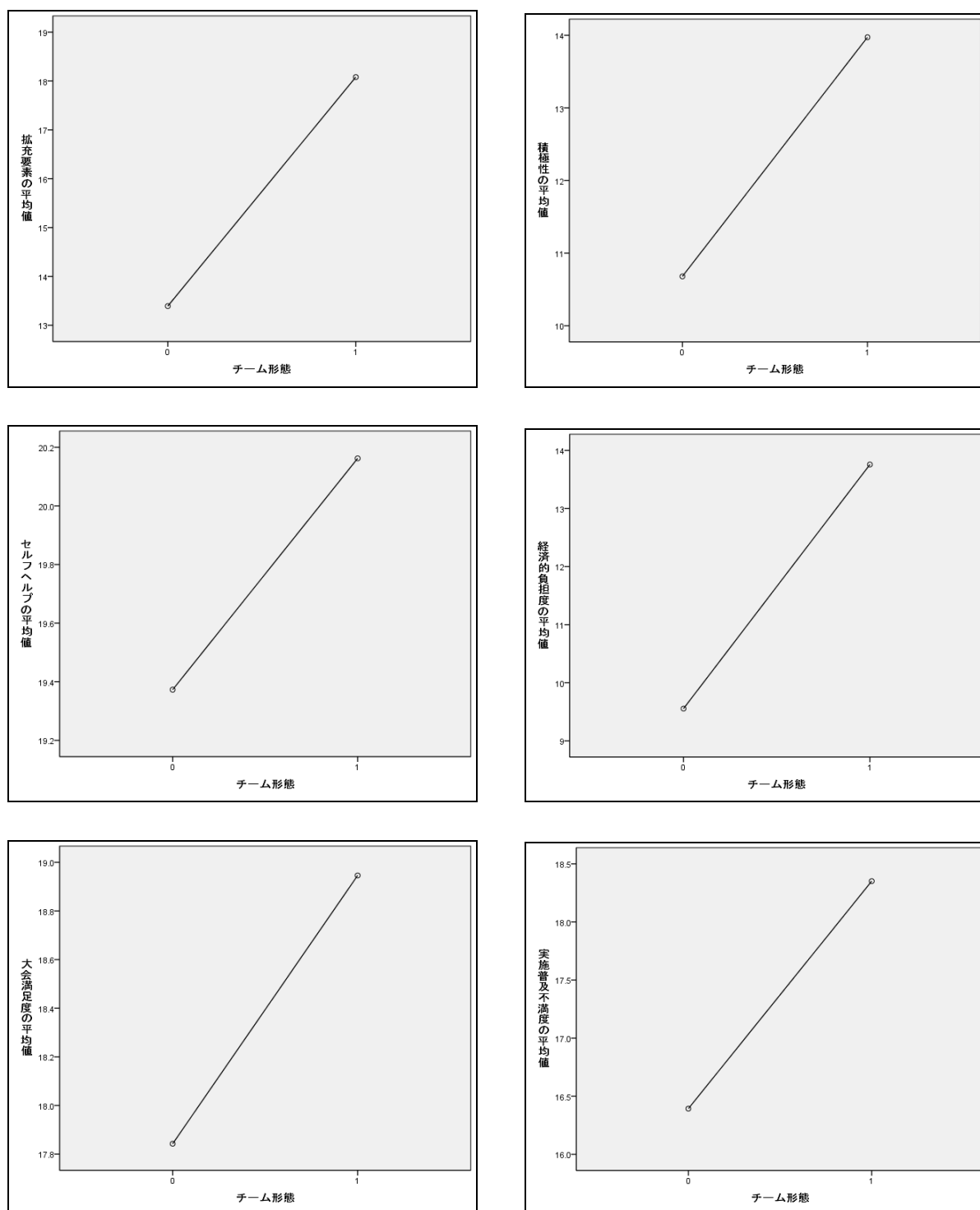


図 11. チーム形態における志向度の一元配置分散分析・プロット図②

非
公
開

非
公
開

非
公
開

非公開

発展段階 1=導入期、2=本実施気 3=発展期

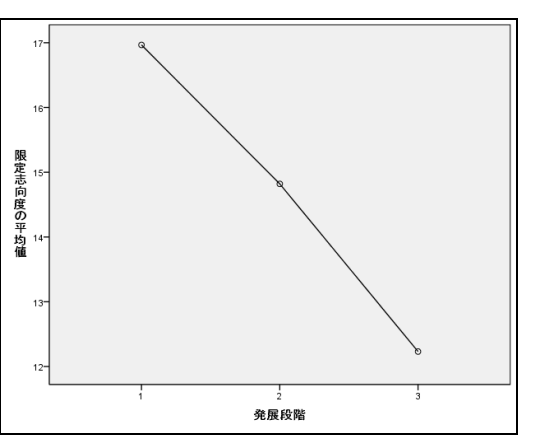
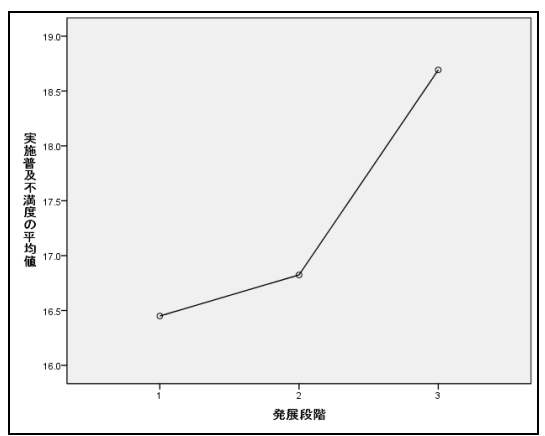
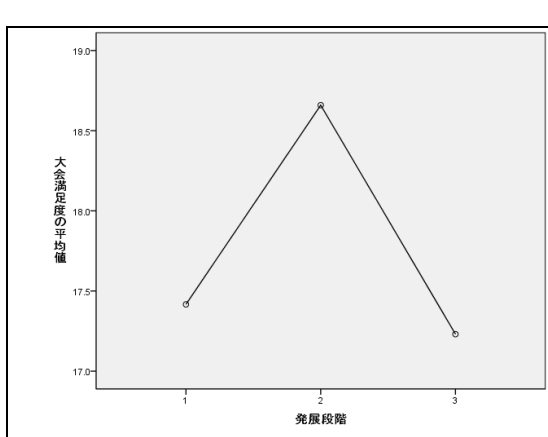
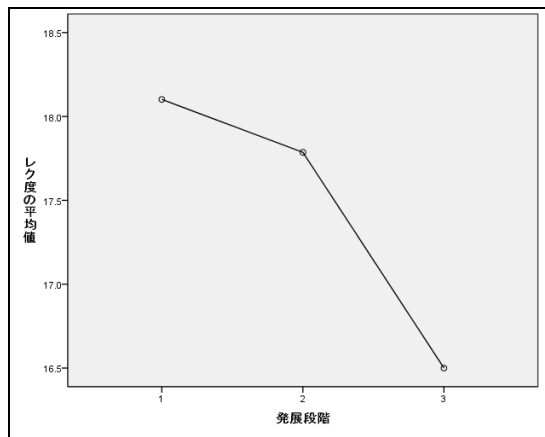
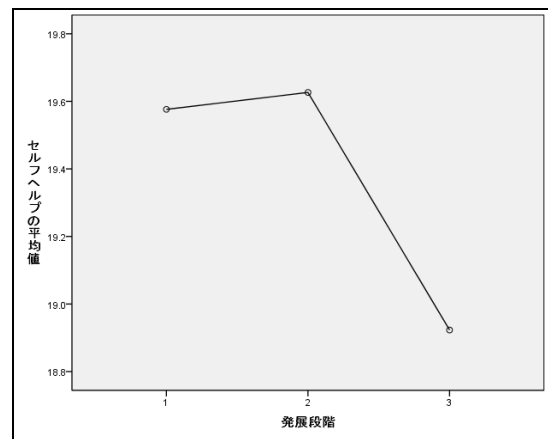
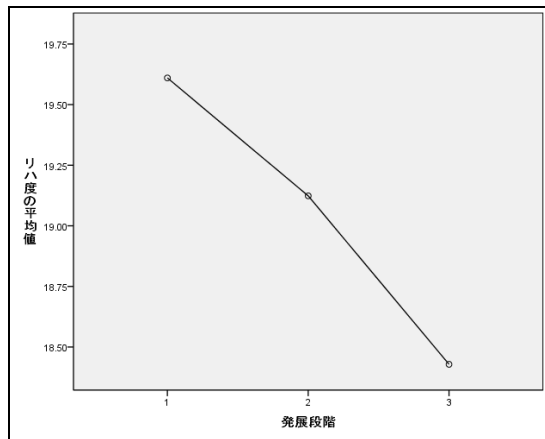


図 12.発展段階における志向度の一元配置分散分析①

発展段階 1=導入期、2=本実施気 3=発展期

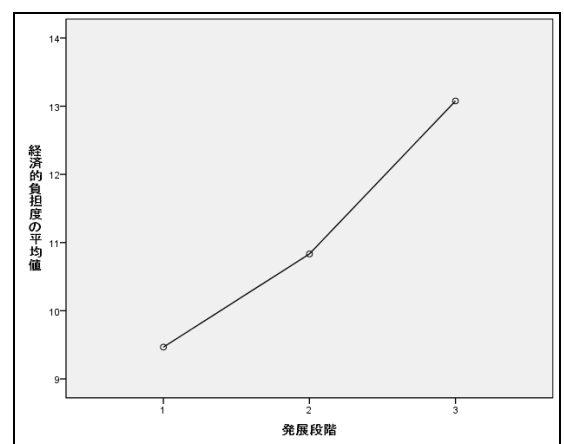
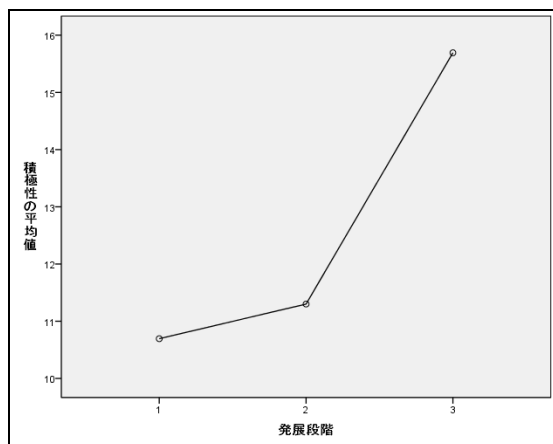
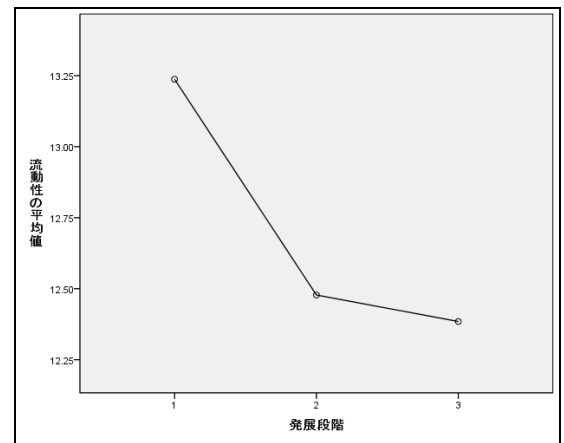
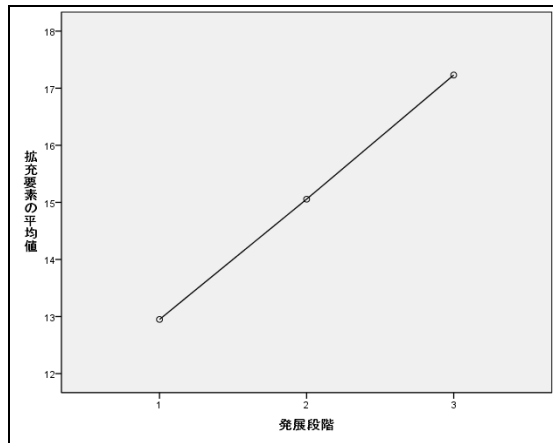
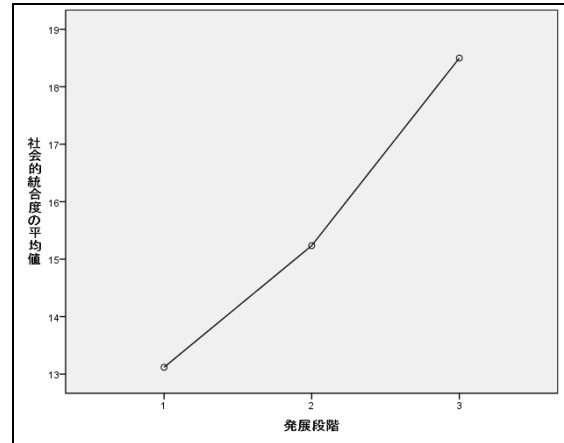
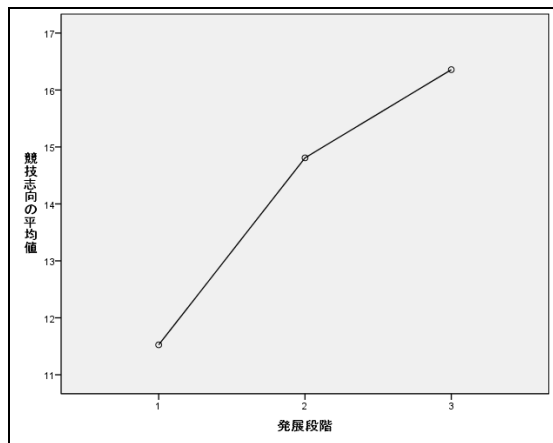


図 12.発展段階における志向度の一元配置分散分析②

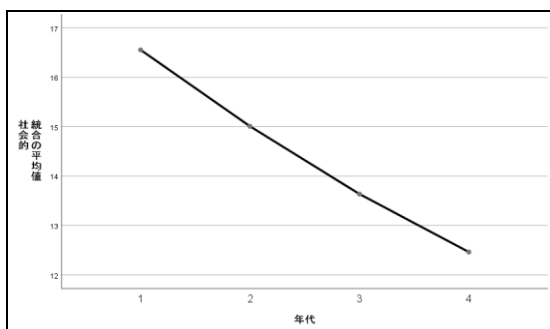
非公開

これらの
ど多
傾

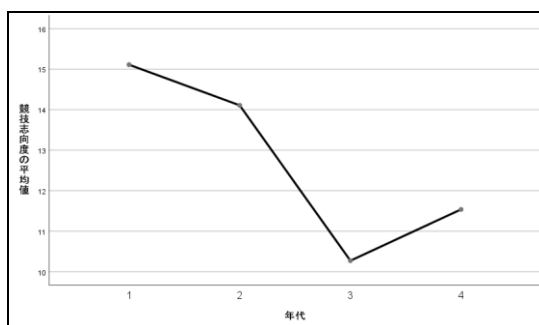
ションな
する
取

非
公
開

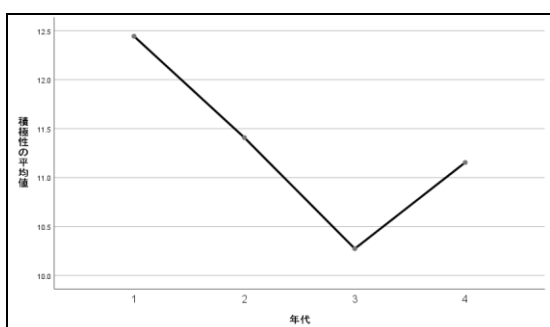
年代別 1=10～20代 2=30～40代 3=50～60代 4=世代混合



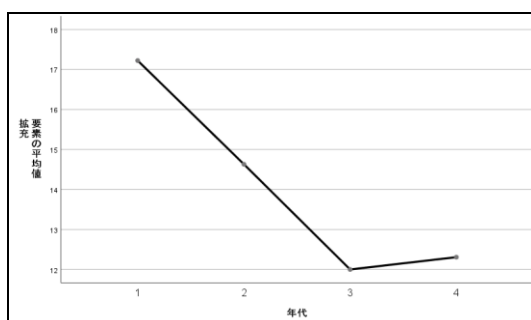
(社会的統合度)



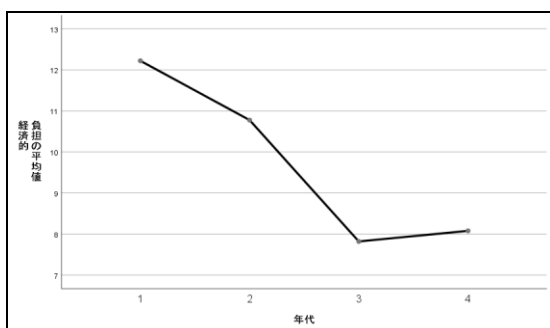
(競技志向度)



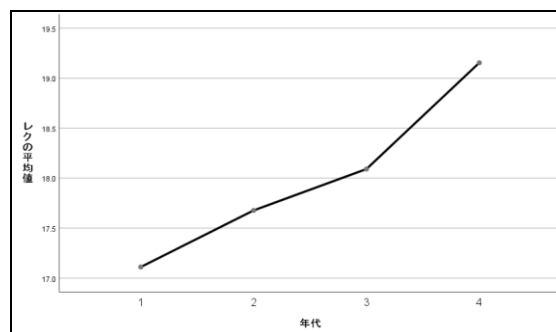
(主体性)



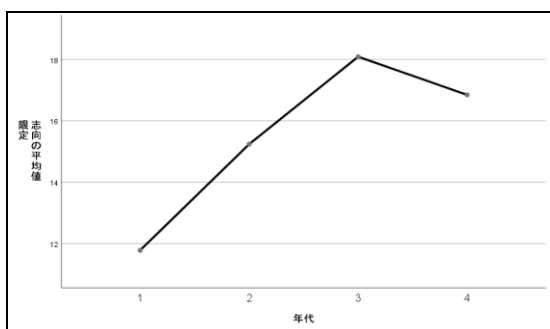
(拡充要素)



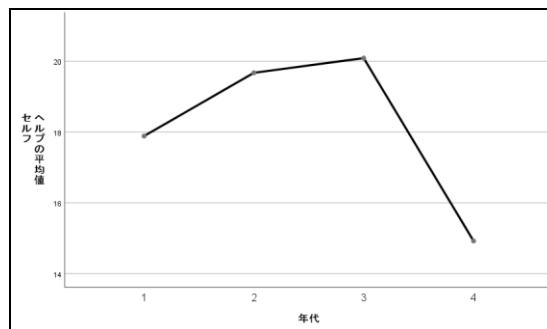
(経済的負担度)



(レクリエーション度)



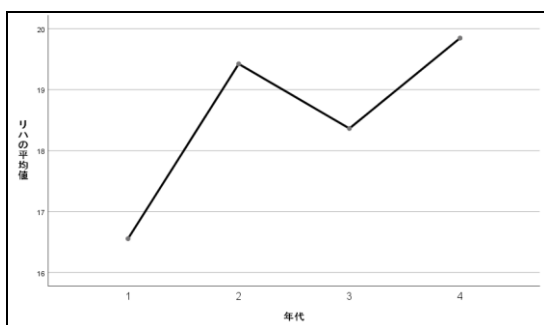
(限定志向度)



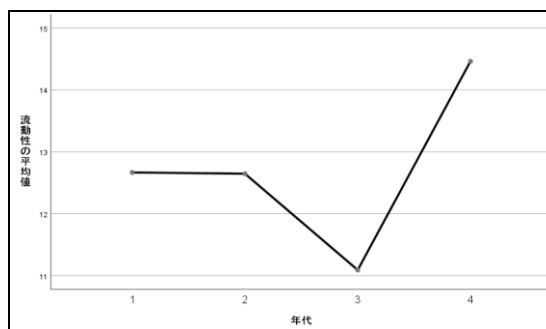
(セルフヘルプ度)

図 13.年代別における志向度の一元配置分散分析①

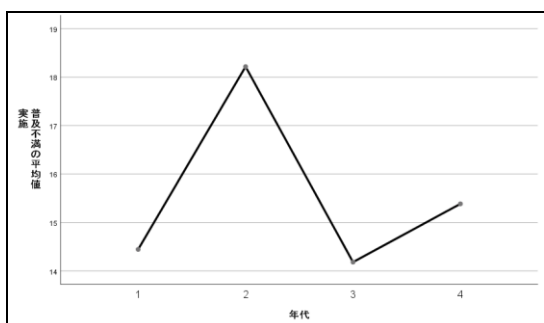
年代別 1=10～20 代 2=30～40 代 3=50～60 代 4=世代混合



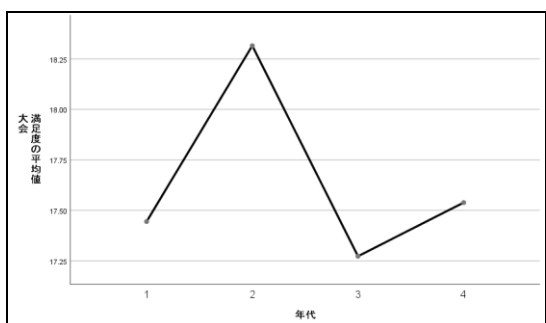
(リハビリテーション度)



(流動性)



(実施・普及不満度)



(大会満足度)

図 13.年代別における志向度の一元配置分散分析②

非
公
開

非
公
開

非公開

非公開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

非
公
開

表 23. 自由意見

カテゴリー	サブ・カテゴリー	n
実施・普及の必要性	広報・情報提供の必要性	5
	競技種目の拡大	5
	指導者の養成	2
経済的課題	経済的に負担	7
	行政サポートの必要性	5
チーム運営の課題	メンバーの減少	7
	練習上の困難	6
	スタッフの過負担	5
	コーチ不在	1
	選手間の温度差	1
	生涯スポーツの必要性	1
大会運営の課題	交流大会の必要性	7
	ルール見直しの必要性	6
	大会の少なさ	4
	チーム数の減少	4
活動目的	社会的統合	4
	リハビリテーション	4
	リカバリー	3
	レクリエーション	1
	社会参加	1
チームの成長	活動の幅の拡大	3
	主体性の獲得	1
懸念事項	選手への負担	4
	就労の妨げ	1

非
公
開

済格差が生
後押
に
大

の意向を
具体的
位
を

非
公
開

非
公
開

非公開

行い、実施
3期の
会

で構築した
社

非公開

目
実施

、
る有

益な活動で
を持
ま

大 広がり
が
高
る

非公開

非公開

生
思わ

と

一方、精
はな
る
か

るわけ
一す
参

非公開

重

非
公
開

も
か
えら

考

非
公
開

なアイデ
うこ
会
オ

題に向き合
の大
あ

非
公
開

非公開

非
公
開

非
公
開

らの理解を
統合し、
せ
得

した社会的
が併
特

非公開

謝辞

1. 本研究の一部は、笹川スポーツ財団の「笹川スポーツ研究助成」の助成金を受けて行われた（研究番号 160A1-017）
2. 本研究の一部は、6th Asia-Pacific Occupational Therapy Congress（2015.9）に発表した。
3. 本研究の一部は、1th Asia-Pacific Occupational Therapy Symposium（2017.10）に発表した。
4. 本研究の一部は、World Federation of Occupational Therapist Congress 2018（2018.5）に発表した。
5. 本研究の一部は、2016 年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書に掲載された。P49-58

本論文の執筆にあたり、多くの先生方および支援者の皆様、当事者選手の方々よりご指導・ご協力をいただきました。この場を借り、心から御礼申し上げます。

主指導教員の大島巖教授からは 6 年間にわたり、様々な事を教えていただきました。専門分野も異なり、また研究方法も理解していなかった私に対して、研究の基本を一から教授していただき、大変感謝しております。また研究方法ではなく、研究者としての姿勢についても学ばせていただきました。

また副指導教員の藤岡孝志教授からも、温かい励ましのお言葉を頂きました。諸事情により 2 年目で研究テーマを変えざるを得ませんでしたが、藤岡教授からの温かいお言葉があったからこそ、続けることが出来たのだと思います。

また吉田光爾先生には、ゼミにおいて様々なご指導を頂きました。的確かつ分かりやすいご指摘を頂き、大変感謝しております。

併せて、インタビュー調査および質問紙調査にご協力頂いた当事者選手の皆様、支援者の皆様に、心から御礼申し上げます。当事者選手の皆様からお伺いした内容はとても重く、また熱のこもったものでした。そのため、私自身もこの内容を必ず形にして示さなくてはいけないと、強く感じるとともに責任の重さを実感致しました。また全国で活躍される支援者の皆様の、精神障害スポーツにかける強い思いには、心震わすものがありました。これらの強い思いが、私の研究の後押しをしてくれました。

また研究に際して、温かく見守って下さった職場の関学科長および同僚の皆様に、心から御礼申し上げます。

そして大島ゼミ、藤岡ゼミの皆様にも、改めて御礼申し上げたいと思います。良い時も悪い時も、共に過ごしたゼミの時間は、私にとって宝です。

最後に、6 年にわたる長い研究期間を支え続けてくれた妻、3 人の子供たち、両親に改めて感謝致します。第 3 子が生まれ、新生児の育児をしながら私をサポートしてくれた妻には、感謝しても感謝しきれません。また 3 人の子供たちは、まだ父親と遊びたい時期にも関わらず、ほとんど休日を取ってやることができず、多くの我慢をさせてしまいました。本研究は、そういった家族のサポートが無ければ、成し遂げることが出来ませんでした。

精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及は、これからがスタートだと感じています。今後もさらに研究を深め、精神障害のある人にとって、よりよいスポーツ環境を整え、社会的統合を後押ししていければと考えております。

平成 31 年 2 月 18 日
日本社会事業大学大学院
社会福祉研究科博士後期課程
鎗田英樹

文献

- 荒谷幸次, 山本友香, 森山歩美, 他 (2009). ボッチャ教室の試み—地域への普及を目指して—. 日本理学療法学術大会 2008(0) : E3P1209—E3P1209.
- 井上誠士郎 (2013). 精神障害者スポーツの今とこれから 精神障害者スポーツの国際化に向けて—地域での取り組みから—. スポーツ精神医学 10 巻 : 21—26.
- 岩田正美 (2008). 社会的排除 参加の欠如・不確かな帰属. 有斐閣 : 174—175.
- 岩田正美 (2014) 「社会的包摂」日本社会福祉学会事典編集委員会編『社会福祉学事典』丸善出版 : 40—43
- 上出杏里, 柳迫康夫, 田村玉美 (2015). アジアユースパラ競技大会マレーシア 2013 医務活動を通した障がい児のスポーツ参加における—考察. 日本障害者スポーツ学会誌 (1881-8218)23 号 : 60 - 63.
- 内田直 (2002). 規則的にスポーツをしているデイケア患者の生活時間の特徴. 厚生労働科学研究.
- 内田直, 高畑隆, 宮崎伸一 (2002). 精神障害者スポーツと競技性. 精神神経学雑誌 104 巻 12 号 : 1242 - 1248.
- 内田若希 (2015). パラアスリートのスポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的課題と支援方略の検討. 2015 笹川スポーツ研究助成報告書 : 58—65,
- 大島巖, 上田洋也, 山崎喜比彦, 他 (1993). 精神障害者施設とのコンフリクトを経験した大都市近郊進行住宅地域の精神障害者観 : 近隣関係、およびコミュニティ意識との関連. 社会精神医学会雑誌 11(1) : 17—29.
- 太田雅夫, 柳澤裕哉 (2002). スポーツにおける社会化要因の検討. 天理大学学報 203 : 27—35.
- 大西守, 高畑隆, 浅井邦彦 (2002). スポーツとメンタルヘルス 精神障害者スポーツの振興に関する最近の動き. 臨床精神医学 31(11) : 1411—1415.
- 大西守 (2003). 精神障害者のスポーツ振興のための組織基盤確立に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金厚生労働特別研究事業. 平成 14 年度総括・分担研究報告書 14.
- 大西守 (2004). こころとスポーツ 精神障害者スポーツの現状と課題. スポーツ精神医学 1 : 11—15.
- 大西守 (2007). 精神障害者スポーツの歴史と課題. 社会精神医学研究所紀要 36(1) : 10—15.
- 大西守 (2008). 日本における精神障害者スポーツの展望. 日本社会精神医学会雑誌 17(1) : 57—61.
- 大西守, 高畑隆, 田所淳子 (2009). 精神障害者スポーツ振興のための体制整備に関する調査研究. 平成 20 年度「精神障害者スポーツ(バレーボール)大会開催事業」報告書. 社団法人日本精神保健福祉連盟 : 47—65.
- 大西守 (2014). 精神障害者スポーツ振興を再考する. スポーツ精神医学 11:p11.
- 岡川暁, 田引俊和 (2015). 教養教育の一環としてのアダプテッド・スポーツ教育第 1 報. 第 34 回医療体育研究会. 第 17 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会第 15 回合同大会抄録集 : 21.
- 岡崎伸郎 (2003). 精神障害者スポーツ振興の現状と展望—障害者スポーツ界における真の三障害統合を目指して—. 日本社会精神医学会雑誌 12(2) : 179—186.
- 岡崎伸郎 (2004). スポーツ精神科医の役割 精神障害者スポーツ振興における精神科医の役割. スポーツ精神医学 1 : A16.
- 岡村武彦, 高谷義信, 大西守, 他 (2007). 統合失調症における競技スポーツと薬物療法について. スポーツ精神医学 4 : 25—30.
- 影山健, 他 (1977). スポーツ参与の社会学について. 体育社会学研究 6 : 1—23.
- 金田嘉清 (2017a). リハビリテーション (放送大学教材). 放送大学教育振興会 ; 改訂新版 : p6.
- 金田嘉清 (2017b). リハビリテーション (放送大学教材). 放送大学教育振興会 ; 改訂新版 : 281 - 292.
- 学校メンタルヘルスリテラシー教育研究会 (2011). 今, メンタルヘルスリテラシーの向上をめざして なぜメンタルヘルスリテラシーか? 学校教育の意義とこれまでの取り組みの紹介. 精神科看護 38(4) : 49-55

- Carless D, Douglas K. (2008). Social support for and through exercise and sport in a sample of men with serious mental illness. *Issues in Mental Health Nursing* 29(11) : 1179—1199
- 草野勝彦 (2009). アダプテッド・スポーツと障害者・高齢者の福祉. アダプテッド・スポーツの科学. 市村出版 : 19 - 21.
- 久保耕造 (1997). エンパワメント — 障害者の福祉. 月刊ノーマライゼーション 17 (8) : p37.
- 倉本拓, 高谷義信 (2010). 精神障害者の競技スポーツに参加して—当事者の声. 精神神経学雑誌 112(1) : 32—33.
- Kenyon GS, Mcpherson BD (1973). Becoming involved in physical activity and sport. *Human growth and development*. Academic Press : 304—333.
- 向後裕子, 高橋真三樹, 鈴木剛, 他 (2006). 精神障害者スポーツ振興(ソフトバレーボール大会)の経過と今後の課題. 精神保健シリーズ 36 : 2 - 15.
- 厚生労働省 (2014). 平成 25 年度版 障害者白書. 厚生労働省 : 2014 年 5 月 9 日確認
<<http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/zenbun/index-pdf.html>>
- 厚生労働省 (2011). 第 22 回社会保障審議会. 資料 3-1-6. 厚生労働省 : 2018 年 12 月 18 日確認
<<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001ngpw-att/2r9852000001ngxn.pdf>>
- 小塩真司 (2009). はじめての共分散構造分析. 東京図書 : 110—111.
- 後藤邦夫 (2017). 知的障害のある人とスポーツ. 総合リハビリテーション 36 (9) : 831—833.
- Goffman.E (1963). *Stigma : note on the management of spoiled identity*. Englewood Cliffs NJ. Prentice Hall.
- 佐伯聰夫 (1978). 新しいスポーツインターナショナリズム. 「スポーツナショナリズム」. 大修館書店 : 20-22.
- 酒井一浩 (2012). 精神障害フットサルがメンバーに与える影響. 日本作業療法学会抄録集 46 : 845—845.
- 坂井一也 (2010). 精神障害者スポーツの効果と課題 障害者スポーツ大会参加者調査. 健康科学大学紀要 6(1) : 217 - 225.
- 坂井 一也 (2011). スポーツ精神医学におけるコメディカルの役割 作業療法士の立場から. スポーツ精神医学 8 : 12-17.
- 佐々木幸一, 小池和幸 (2007). 障害者のスポーツへの社会化に関する研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 8 : 229-236.
- 佐藤広之 (2012). 地域障害者スポーツの普及(解説/特集). *Journal of Clinical Rehabilitation* 21(8) : 763-769.
- Soundy A, Roskell C, Stubbs B, et al (2015). Investigating the benefits of sport participation for individuals with schizophrenia: a systematic review. *Psychiatr Danub* 27(1) : 2-13.
- 塩野谷祐一 (2005). スポーツに見る競争の倫理. 家計経済研究 66 : 82 - 83.
- 下田武良 (2015). ペルーにおける障がい者スポーツの普及・促進. JICA 短期ボランティア活動報告(会議録). 理学療法科学 30(6) : p5.
- Simmel.G (1966). 堀喜望他訳. 「闘争の社会学」. 法律文化社 :
- スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会 (2016). 第 2 回ダイバーシティカップ 報告書 pdf. <https://bigissue.or.jp/wp-content/uploads/2018/09/diversity2016_02.pdf>
- 関根弘和, 西村圭治, 矢吹知之 (2003). 障害者スポーツからユニバーサル・スポーツへ. PT ジャーナル 37(10) : P882.
- 高野隼, 吉村匡史, 村上貴栄, 他 (2012). 地域運動プログラムの有用性 —精神障害者サッカーアカデミー参加を通して—. 日本作業療法学会抄録集 46 : 346—346.
- 高橋春一 (2012). 精神障害者スポーツの今とこれから 精神障害者スポーツ実態調査. スポーツ精神医学 10 : A32.
- Takahashi H, Kato M, Sassa T, et al (2010). Functional deficits in the extrastriate body area during observation of sports-related actions in schizophrenia. *Schizophr Bull* 36(3) : 642 - 7.

- 高橋明 (2004) . V障害者スポーツの歴史. 障害者とスポーツ. 岩波書店 : 97-102.
- 高畑隆 (2001) . 精神障害のある人の社会統合を促進するスポーツ大会に関する研究. 埼玉県立大学紀要 13 : 99 - 105.
- 高畑隆 (2009) . 障害者スポーツ協会と精神障害者. 埼玉県立大学紀要 10 : 43 - 47.
- 高畑隆 (2009) . 精神障害者とスポーツ大会. 埼玉県立大学紀要 10 : 49 - 55.
- 高畑隆 (2011) . スポーツと精神医学—精神障害者スポーツ競技の動向. 臨床精神医学 40(9) : 1159-1167.
- 高畑隆 (2013) . 精神障害者スポーツの今とこれから わが国の精神障害者スポーツ大会とその推移. スポーツ精神医学 10 : 14-20.
- 田川豪太 (2017) . 障害者スポーツの推進の取り組み—障害者スポーツ文化センター横浜ラポールの取り組みから. 地域リハビリテーション 12(11) : 906-911.
- 田所淳子. 精神科領域における QOL の向上 精神障害者スポーツがもたらすもの. 外来精神医療 9 巻 1 号, 26-30, 2009
- 田中ウルヴェ京 (2005) . キャリア・トランジション. 日本労働研究雑誌 537 : 67-69.
- 田中暢子 (2013) . 精神障害者スポーツ推進システムに関する国際比較研究. 平成 25～27 年度科学研究費補助金「基盤研究 (C)」1 年次研究成果報告書.
- 友枝敏雄 (2009) 「社会統合」 庄司洋子、木下康仁、武川正吾、藤村正之編『福祉社会事典』弘文堂 : 425-426.
- 豊田秀樹 (1992) . SAS による共分散分析. 東京大学出版.
- 長岡成文 (2018) . 増補ハーバース コミュニケーション行為. ちくま学芸文庫 : 164-165.
- 中川和弘 (2018) . 看護学のための多変量解析入門. 医学書院 : 139-142.
- 長澤由季、入口豊、井上 功一、他 (2009) . 視覚障害者サッカー(Blind Football)の現状と展望(2) 大阪教育大学紀要 第 4 部門 教育科学 58(1) : 39-52.
- 西銘智美, 荒川志保, 大塚俊弘 (2000) . 長崎県における精神障害者スポーツ交流事業の効果. 作業療法(19)特別 : P141.
- 日本体育学会監修 (2015) . 障害者スポーツ. 最新スポーツ科学辞典 : P384.
- (公財) 日本障がい者スポーツ協会 (2017) . 第 2 章 わが国のスポーツ施策と障がい者スポーツ. ぎょう せい : 6-9.
- 日本体育学会監修 (2015) . 障害者スポーツ. 最新スポーツ科学辞典. 平凡社 : P385.
- 日本スポーツ精神医学会ホームページ (2018) . 設立趣意書. 2018 年 7 月 17 日確認
<<https://www.sportspychiatry.jp/blank-1>>
- 野邊政雄, 梶房出 (2013) . スポーツへの関わりに関する研究動向. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録 153 : 109 - 113.
- 能村藤一 (1996) . 知的障害者スポーツの現状と展望. 総合リハ 24(3) : 275 - 277.
- 浜口義信 (1983) . スポーツ概念の意味的研究. スポーツ教育学研究 27 : 73-79.
- 濱口義信 (2007) . スポーツにおける競争の概念と理念についての考察. 同志社大学学術研究年報 58 : 53 - 60.
- 濱野強, 片見眞由美, 日渡秀世, 他 (2004) . 地域における精神障害者スポーツの展開に関する一考察. 日本健康教育学会誌 12(特別号) : 122 - 123.
- 濱野強, 藤澤由和, Nam Eun Woo (2005) . 精神障害者における QOL 評価の試み 精神障害者のスポーツ活動の有用性の検討. 新潟医療福祉学会誌 5(1) : 40 - 47.
- Herdt A, Knapen J, Vancampfort D, et al (2013) . Social anxiety in physical activity participation in patients with mental illness: a cross-sectional multicenter study. *Depress Anxiety*.30(8) : 757-62.
- Habermas.J(1981=1985). *Theorie des kommunikativen handelns*. Suhrkamp :
- Habermas.J, 河上倫逸他訳 (1985 - 87) . コミュニケーション的行為の理論(下). 未来社 : 400-404

- Battaglia G, Alesi M, Inguglia M, Roccella M, et al 2013. Soccer practice as an add-on treatment in the management of individuals with a diagnosis of schizophrenia. *Neuropsychiatr Dis Treat* 9 : 595–603.
- 平井麻紀, 小泉典章, 松本忠巳, 他 (2007). 3 年間にわたる本県の精神障害者スポーツ支援の報告. *精神神経学雑誌* 109(6) : p623.
- 藤田紀昭 (1998) . ある身体障害者のスポーツへの社会化に関する研究—車いすバスケットボールプレーヤーの個人史より—. *スポーツ社会学研究* 6 : 70 - 83.
- 藤田紀昭 (2003) . 身体障害者施設における運動・スポーツの実施状況に関する調査研究. *障害者スポーツ科学* 1(1) : 64-72.
- 藤田紀昭 (2008) . 障害者スポーツの世界. 角川学芸出版 : 27 - 28.
- 藤田紀昭 (2013) . 障害者のスポーツへの社会化における重要な他者に関する研究. *日本体育学会大会予稿集* 64(0) : p401.
- 古川孝順 (2009) 「インテグレーション」 庄司洋子、木下康仁、武川正吾、藤村正之編『福祉社会事典』 弘文堂 : p58
- Frableigt.W.P (1989) . 近藤良享他訳. 「スポーツモラル」. 不味堂出版 : 106-108.
- President' s New Freedom Commission on Mental Health (2003). *Achieving the promise: transforming mental health care in America-Executive summary of final report* (Rep. No. DMS-03-3831). Department of Health and Human Services. Rockville.
- Mangerud WL, Bjerkeset O, Lydersen S, et al (2014). Physical activity in adolescents with psychiatric disorders and in the general population. *Child Adolescent Psychiatry Mental Health* 22. 8(1).
- 皆川倫実, 行實志都子, 田村綾子 (2010). 精神障害者スポーツを行うことにより精神障害のある方の精神面での変化の有効性 団体競技と個人競技の比較から. *精神保健福祉* 41(3):252 - 253.
- 宮崎信一, 内田直 (2003). 競技性の高い知的障害者スポーツの現状と問題点. *日社精医誌* 12 : 173 - 178.
- 宮島喬 (2009) . 移民の社会的統合と排除. 東京大学出版会 : 205 - 216
- 森本幸子, 伊藤知之, 川村有紀, 他 (2016) .アンチスティグマ活動—当事者の声を発信する意義—. *予防精神医学* 11(1) : 92-101.
- 安井友康 (2009). アダプテッドスポーツとリハビリテーションスポーツ. *リハビリテーションスポーツ* 28 : 5-8.
- 鎗田英樹 (2014). 障害領域別にみる障害のある方のスポーツ① 精神障害領域におけるスポーツ. *作業療法ジャーナル* 148(10) : 1013–1016.
- 鎗田英樹 (2012). 千葉県における精神障がい者バスケットボール推進の試み. *スポーツ精神医学* 9 : A39.
- 鎗田英樹, 大角浩平, 押鐘正幸, 他 (2012). 千葉県における精神障がい者フットサル推進の試み. *日本作業療法学会抄録* 46 : 348 - 348.
- 横山浩之 (2012). 精神障害者スポーツの今とこれから 精神障害者スポーツの効果. *スポーツ精神医学* 9 : A31.
- 吉田毅 (2009) . 後天的身体障害者のスポーツへの社会化の諸相—車椅子バスケットボール男子選手を事例に—. *東北工業大学紀要* 29 : 47 - 56.
- 米満弘之 (1998) . 知的障害者とスポーツ. *Journal of Clinical Rehabilitation* 17(9) : 920–925.
- Ragins M(著), 前田ケイ(監訳) (2005). *ビレッジから学ぶリカバリーへの道*. 金剛出版 : 24 - 95.
- World Health Organization (2001) . *International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF)*. WHO. Geneva.

精神障がい者を対象とした競技性スポーツ大会の実施・普及モデル開発に関する聞き取り調査
聞き取り調査ガイドライン(当事者選手用)

所属チーム：	
面接日：平成 年 月 日	調査時間： ： ～ ：
回答者 ID：	調査員氏名 ： 鎗田英樹

【競技性スポーツ大会に参加する目的・意義】

■ 競技性スポーツに参加するようになった経緯

- あなたは、どのような経緯で競技性スポーツに取り組むようになりましたか。
- ・なぜレクリエーションではなく、競技としてのスポーツに取り組むのですか
- あなたが競技性スポーツに取り組むようになって、何か身体的な影響がありましたか。
- ・良い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
 - ・悪い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
- あなたが競技性スポーツに取り組むようになって、何か病状に変化はありましたか。
- ・良い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
 - ・悪い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
- あなたが競技性スポーツに取り組むようになって、何か気持ちに変化はありましたか。
- ・良い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
 - ・悪い影響はありましたか。またどのような影響でしたか。
- あなたにとって、競技性スポーツに取り組むことの意義や目的は何ですか。
- ・どのようなことから、そう感じましたか。
- あなたは、同じ障害を抱える仲間などに、競技性スポーツについて紹介をしていますか。
- ・それは、どうしてですか。
- あなたは競技性スポーツ大会に、どのようななど事を望んでいますか。
- ・それは、どうしてですか。

【当事者選手へのサービス提供】

■ 大会に参加するまでの準備

- あなたは、どのような経緯で現在のチームに所属しましたか。
- ・チームの情報を、どこで得ましたか。
 - ・チームには、スムーズにたどり着けましたか。
- あなたは、どのような経緯で競技性スポーツ大会にエントリーしましたか。
- ・大会の情報は、どのようにして得ましたか。
 - ・大会情報は、容易に得ることが出来ましたか。
- あなたが現在、どのような所で、どの程度練習を行っていますか。
- ・あなたが練習を行う上で、なにか課題はありますか。
- あなたが競技性スポーツを続けていく上で、なにか課題となることはありますか。
- ・それは具体的に、どのような事ですか。
 - ・その問題を解決するためには、どのようなことが必要ですか。

■ 大会出場に向けての理解・協力

- 競技性スポーツ大会に出場する上で、チーム内でどのような話し合いが行われましたか。
- 競技性スポーツ大会に出場する上で、チーム内で特に工夫したことがありますか。
- 競技性スポーツ大会に出場する上で、何か困難に感じたことはありますか

【大会に出場する上での配慮】

■ 大会運営サイドとの連携

- 競技性スポーツに取り組む上で、大会などを主催する競技主幹団体に望む、競技チームとの連携のあり方とはどのようなものですか。何か考えがあればお聞かせ下さい。
- 競技性スポーツに取り組む上で、精神保健関連団体やスポーツ競技団体に望む、競技主幹団体との連携の在り方とはどのようなものですか。何か考えがあればお聞かせ下さい。
- 競技性スポーツ大会の開催日程について、何かお困りのことはありますか。何か考えがあればお聞かせ下さい。

■ 競技大会の実施内容

- 現在の競技性スポーツ大会の実施内容について、どのようにお考えですか。何か考えがあればお聞かせ下さい。
- 大会実施の時間枠について、どのようにお考えですか。何かお考えがあればお聞かせ下さい。
- 大会運営を行うスタッフ（審判および進行係など）について、満足されていますか。
 - ・それは、どうしてですか。

■ 大会開催以外の支援

- 競技大会の開催以外に、どのような支援が必要と感じていますか。何か考えがあればお聞かせください。

【競技性スポーツについて】

■ 実施普及

- どうすれば、精神障がいをお持ちの方の競技性スポーツが普及すると思いますか。何か考えがあればおきかせください。

■ その他、自由意見

- その他、何かご意見等ありましたら、お願い致します。

◇◇ ご協力、どうもありがとうございました ◇◇

精神障がい者を対象とした競技性スポーツ大会の実施・普及モデル開発に関する聞き取り調査 聞き取り調査ガイドライン(支援者用)

所属団体：	
面接日：平成 年 月 日	調査時間： ： ～ ：
回答者 ID：	調査員氏名 ： 鎗田英樹

【競技性スポーツ大会の開催や普及・推進活動をおこなう目的・意義】

■ 競技性スポーツの実施・普及活動を行うようになった経緯

- あなたは、どのような経緯で競技性スポーツの実施・普及活動に取り組むようになりましたか。
- あなたは過去に、何かスポーツ経験がありますか。
- ・そのことは、今の活動に取り組む上で何か関係がありますか。
- 競技性スポーツの実施・普及活動に携わることで、あなた自身に心境の変化はありましたか。
- ・それは、どのような変化ですか。
- あなたにとって、競技性スポーツの実施・普及活動に取り組む意義は何ですか。
- ・どのようなことから、そう感じましたか。
- あなたは精神障害をお持ちの方に、競技性スポーツについて紹介をしていますか。
- ・それは、どうしてですか。
- あなたは周囲の支援者に、競技性スポーツについて紹介をしていますか。
- ・それは、どうしてですか。
- あなたは競技性スポーツに、なにか望ましい展望を持っていますか。
- ・それは、どのような展望ですか。

【当事者選手へのサービス提供】

■ 競技性スポーツの実施・普及にむけた活動

- あなたは、競技性スポーツの実施・普及に向けて、どのような活動を行ってきましたか。
- ・具体的に、どのような活動ですか（大会の開催や教室など）
 - ・中でも重要だと感じたものは、何ですか。
 - ・なぜ、そのように感じましたか。
- あなたは、競技性スポーツの実施・普及に向けて、多職種と有志の会（実行委員会）を立ち上げましたか。
- ・具体的に、どのような職種で、何名くらいで構成されていますか。
 - ・中でも重要だと感じた職種は、何ですか。
 - ・なぜ、そのように感じましたか。
 - ・当事者は、どのような役割を果たしていますか。
- 有志の会（実行委員会）を継続していく中で、組織の在り方は立ち上げ当初に比べ、変化しましたか。
- ・それは、どのような変化ですか。
 - ・どのような組織形態が効果的（もしくは効率的）だと考えていますか。
- あなたは、競技性スポーツの実施・普及に向けて、他団体から協力（支援）を得ていますか。
- ・具体的に、どのような団体から、どのような協力（実働支援・後援・協賛など）を得ましたか。
 - ・中でも重要だと感じた団体は、何ですか。
 - ・なぜ、そのように感じましたか。

○あなたが競技性スポーツの実施・普及活動をしていく上で、なにか課題となることはありますか。

- ・それは具体的に、どのような事ですか。
- ・その問題を解決するためには、どのようなことが必要ですか。

○あなたは、競技性スポーツの実施・普及に向けて、広報活動を行ってきましたか。

- ・具体的に、どのような活動ですか。
- ・中でも効果的だと感じた広報は、どのようなものですか。
- ・なぜ、そのように感じましたか。

○どうすれば、精神障がい者を対象とした競技性スポーツが普及すると思いますか。何か考えがあればおきかせください。

■ 大会開催に向けての理解・協力

○競技性スポーツ大会を開催する上で、有志の会（実行委員会）でどのような話し合いが行われましたか。

○競技性スポーツ大会を開催する上で、有志の会（実行委員会）で特に工夫したことはありますか。

○競技性スポーツ大会を開催する上で、何か困難に感じたことはありますか

【大会を開催する上での配慮】

■ 当事者チームとの連携

○競技性スポーツ大会を開催する上で、当事者チームに臨む連携のあり方とはどのようなものですか。何か考えがあればお聞かせ下さい。

○競技性スポーツ大会を開催する上で、精神保健関連団体およびスポーツ競技団体に望む連携のあり方とはどのようなものですか。何か考えがあればお聞かせ下さい。

○競技性スポーツ大会の開催日程について、何かお困りのことはありますか。何か考えがあればお聞かせ下さい。

■ 競技大会の実施内容

○現在の大会実施内容について、どのようにお考えですか。何か考えがあればお聞かせ下さい。

○大会実施の時間枠について、どのようにお考えですか。何かお考えがあればお聞かせ下さい。

○大会実施のコストについて、どのようにお考えですか。何かお考えがあればお聞かせ下さい。

○大会参加のチーム数や競技レベルについて、どのようにお考えですか。何かお考えがあればお聞かせ下さい。

- ・その問題を解決するためには、どのようなことが必要ですか。

■ 大会開催以外の支援

○大会の開催以外にも、当事者選手に対して何か支援が必要だと感じていますか。何かお考えがあればお聞かせください。

【競技性スポーツについて】

■ その他、自由意見

○その他、何かご意見等ありましたら、お願い致します。

競技性スポーツ実施・普及の意義と可能性に関する状況調査

本調査は、精神障がいをお持ちの方（以下「当事者」と表記します）を対象とした競技スポーツの実施状況を把握することを目的としています。次項の設問を読みいただき、ご回答をお願い致します。

公益社団法人 日本精神保健福祉連盟 精神障害者スポーツ推進委員会
NPO 法人 日本ソーシャルフットボール協会
NPO 法人 日本ドリームバスケットボール協会

【期日】平成29年3月4日(土)までに、同封致しました返信用封筒(3つ折り封入)にてご返信ください

別紙の「質問紙への記入について」をご参照の上、ご記載下さい
本アンケートの回答は、チーム代表者が行ってください。

	該当する個所（数字）に○をつけてください
回答者属性 ※必須	1) 当事者選手 2) 当事者家族 3) 医師 4) 看護師 5) 保健師 6) 精神保健福祉士 7) 作業療法士 8) 理学療法士 9) 心理士 10) 体育療法士 11) メンタルヘルス運動指導士 12) その他[]

所在地 ※必須	県市
チーム名 ※任意	
競技種目 ※必須	<p>該当する個所（数字）に○をつけてください</p> <p>1) バレーボール</p> <p>2) フットサル</p> <p>3) バスケットボール</p> <p>4) その他[]</p> <p>※競技として大会などに出ているものに限りです</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>※原則、1 競技のみの記載をお願いします。 「質問紙への記入について」をご確認下さい。</p> </div>

競技スポーツ実施状況調査

チームの属性	
設 問 1	<p>●チームの形態について、該当する個所（数字） 1つに○を付けて下さい</p> <p>1) 精神障がい当事者のみで構成された地域型のクラブチーム（サークル）</p> <p>2) 精神障がい当事者および支援者で構成された地域型のクラブチーム（サークル）</p> <p>3) 精神障がい者当事者だけでなく、一般の参加者も含む地域型のクラブチーム（サークル）</p> <p>4) クリニック・デイケア所属のチーム</p> <p>5) 福祉施設所属のチーム（就労移行・定着支援、地域活動支援センターなど）</p> <p>6) 精神科病院デイケア所属のチーム（総合病院デイケアも含む）</p> <p>7) 精神科病院所属のチーム（入院中の方が中心のチーム）</p> <p>8) その他[]</p>
	<p>●メンバーの人数（登録人数または直近1年間の利用者数）を、ご記載ください</p> <p>チーム登録者数（ ）名：男性（ ）名・女性（ ）名</p>
設 問 3	<p>●メンバーの対象疾患について、多い順に番号を付けてください。</p> <p>[] 統合失調症</p> <p>[] うつ病性障害</p> <p>[] 双極性障害</p> <p>[] 強迫性障害</p> <p>[] 発達障害</p> <p>[] パーソナリティ障害</p> <p>[] 物質関連障害</p> <p>[] 摂食障害</p> <p>[] 社会不安性障害</p> <p>[] その他[]</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>多い順番に数字で付けて回答して下さい</p> <p>※「対象でないもの」あるいは「所属メンバーがいないもの」には数字を付けないで下さい</p> </div>
	<p>●メンバーの年齢構成について、多い順に番号を付けてください。</p> <p>[] 10～19 歳 [] 20～29 歳 [] 30～39 歳 [] 40～49 歳</p> <p>[] 50～59 歳 [] 60 歳以上</p> <p>[] 世代混合のチーム（世代が分散している）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>多い順番に数字で付けて回答して下さい</p> <p>※「対象でないもの」あるいは「所属メンバーがいないもの」には数字を付けないで下さい</p> </div>
設 問 5	<p>●指導者（監督・コーチ等）の有無について、該当する個所（数字）に いくつでも○を付けて下さい</p> <p>1) プロの指導者から指導を受けている（スポーツコーチなど）</p> <p>2) 競技経験者から指導を受けている（スタッフやボランティアなど）</p> <p>3) 競技経験のある当事者選手が、コーチを兼ねている</p> <p>4) 医療機関のスタッフから、指導を受けている</p> <p>5) 指導者はいない</p> <p>6) その他[]</p>

競技スポーツ実施状況調査

練習状況

練習状況					
設 問 6	●普段の練習形態について、該当する個所（数字） 1つに〇 をして下さい				
	1) 当事者選手だけで練習をしている 2) 当事者選手と指導者（監督・コーチ等）で練習している 3) 障害の有無は関係なく、一般の方も含めて練習している 4) 定期的な練習は、していない 5) その他（ ）				
設 問 7	●チームの練習頻度について、該当する個所（数字） 1つに〇 をして下さい。				
	1) ほぼ毎日、練習をしている 2) 週に2～3回程度、練習をしている 3) 週に1回程度、練習している 4) 月に2～3回程度、練習している 5) 月に1回程度、練習している 6) 試合前だけ練習している 7) 練習はしていない				
設 問 8	●1回の練習時間は、どのくらいですか。該当する個所（数字） 1つに〇 をして下さい。				
	1) 30分未満 2) 30分～1時間程度 3) 1時間～1時間半程度 4) 1時間半～2時間程度 5) 2時間以上				
経済状況					
設 問 9	●活動費用はどのように賄(まかな)っていますか。該当する個所（数字）に いくつも〇 をつけて下さい（複数可）。				
	1) メンバー個々から徴収している 2) 所属施設が負担している 3) 寄付や助成金を当てている 4) 活動費用はかかっていない 5) その他[]				
設 問 10	●大会参加費は、どのように賄(まかな)っていますか。該当する個所（数字）に いくつも〇 をつけて下さい（複数可）。				
	1) メンバーもしくは参加者で頭割している 2) 所属施設が負担している 3) 寄付や助成金を当てている 4) 参加費用はかかっていない 5) その他[]				
設 問 11	●大会遠征費用（交通費や宿泊費など）は、どのように賄(まかな)っていますか。該当する個所（数字）に いくつも〇 をつけて下さい（複数可）。				
	1) メンバーもしくは参加者で頭割している 2) 所属施設が負担している 3) 寄付や助成金を当てている 4) 遠征費用はかかっていない 5) 過去に遠征したことはない 6) その他[]				

競技スポーツ実施状況調査

実施・普及活動

実施・普及活動	
設 問 1 2	●どのようにメンバーを募集していますか。該当する個所（数字）にいくつでも○をつけてください（複数可）。 1) ポスターの掲示 2) ホームページやブログなどの活用 3) 口コミ 4) その他[] 5) していない ⇒ していないに○をつけた方は、設問 13 にご回答ください
設 問 1 3	●どうしてメンバーを募集しないのですか。該当する個所（数字）にいくつでも○をつけてください（複数可）。 1) 対象者を施設利用者のみに制限しているから 2) どのような人が来るか、分からないから 3) 今いる選手たちが望まないから 4) 広報の方法が分からないから 5) その他[]
設 問 1 4	●新規メンバーは、どの位いますか。該当する個所（数字）1 つに○をつけて下さい 1) 週に 1 名以上 2) 月に 1 名以上 3) 3 カ月に 1 名以上 4) 半年に 1 名以上 5) 1 年に 1 名以上 6) その他[]
設 問 1 5	●新規メンバーは、どの位定着しますか。該当する個所（数字）1 つに○をつけて下さい 1) ほほ全員、定着する 2) 半数くらいが定着する 3) 少数のみ定着する 4) ほとんど定着しない 5) その他[] ⇒ 「3) 少数のみ定着する」「4) ほとんど定着しない」に○をつけた方は、設問 16 にご回答ください。
設 問 1 6	●なぜ、新規メンバーが定着しないのだと思いますか。該当する個所（数字）にいくつでも○をつけてください（複数可） 1) 練習がキツイため 2) チームメイトになじめないため 3) 病状が安定しないため 4) 経済的な問題 5) 競技への関心が低いため 6) 自宅から遠いため 7) 本人の希望と違ったため 8) 不明 その他[]

競技スポーツ実施状況調査

大会参加状況

設
問
1
7

●どの程度の頻度で大会に参加していますか。該当する個所（数字）1つに○をつけて下さい

- | | |
|----------------|---------------|
| 1) 年に 1～2 回程度 | 2) 年に 3～5 回程度 |
| 3) 年に 6～10 回程度 | 4) 年に 11 回以上 |
| 5) その他[] | |

設
問
1
8

●どのような大会に参加していますか。参加しているものを、代表的な大会を3つご記入下さい

大会名 1:

大会名 2:

大会名 3:

※複数の競技種目に参加している場合は、他競技種目大会名を以下にご記入ください

◎他競技名: _____

大会名 1:

大会名 2:

大会名 3:

◎他競技名: _____

大会名 1:

大会名 2:

大会名 3:

競技スポーツ実施状況調査

以下の設問では、チームの方向性等を 5 段階でおうかがいします。以下の評価基準を参考にし、ご回答ください。

評価の基準

- 5 : とても重視している。もしくは9割以上の選手は該当する（もしくは、そう考えている）
 4 : やや重視している。もしくは7割程度の選手は該当する（もしくは、そう考えている）
 3 : どちらとも言えない。もしくは半数の選手は該当する（もしくは、そう考えている）
 2 : あまり重視していない。もしくは3割程度の選手は該当する（もしくは、そう考えている）
 1 : 重視していない。もしくは1割以下の選手は該当する（もしくは、そう考えている）

チームの競技性志向度

●チームの競技性について、該当する箇所（数字）に○をつけて下さい						
設 問 1 9	・上位大会への出場を目標としている	1	2	3	4	5
	・専属の監督もしくはコーチをつける	1	2	3	4	5
	・試合後に試合内容について反省会を行う	1	2	3	4	5
	・大会に勝つため、練習に多くの時間を費やす	1	2	3	4	5
	・選手間で競争がある（レギュラー争い）	1	2	3	4	5

チームのレクリエーション志向度

●チームの娯楽性について、該当する箇所（数字）に○をつけて下さい						
設 問 2 0	・楽しむことを一番の目標としている	1	2	3	4	5
	・競技レベルが高い試合は敬遠する	1	2	3	4	5
	・練習は自由参加であり、強制性はない	1	2	3	4	5
	・試合でのミスを振り返ることはしていない	1	2	3	4	5
	・試合には全員出場出来るよう配慮する	1	2	3	4	5

チームのリハビリテーション志向度

●選手のリハビリテーション志向度について、該当する数字に○をつけて下さい。						
設 問 2 1	・スポーツを通じてコミュニケーション能力の回復を図る	1——	2——	3——	4——	5
	・スポーツを通じて認知機能の回復を図る (認知機能とは注意や集中、記憶、判断力など)	1——	2——	3——	4——	5
	・スポーツを通じて体力の向上を図る	1——	2——	3——	4——	5
	・スポーツを通じて自尊心の回復を図る	1——	2——	3——	4——	5
	・就労へのステップとしてスポーツを行う	1——	2——	3——	4——	5

チームの社会的統合志向度

●チームの社会的統合志向度について、該当する数字に○をつけて下さい。						
設 問 2 2	・スポーツを通していろいろな人と交流する	1——	2——	3——	4——	5
	・練習には一般市民も加わっている	1——	2——	3——	4——	5
	・支援者もメンバーとして参加する	1——	2——	3——	4——	5
	・一般の大会にも参加する	1——	2——	3——	4——	5
	・活動の中で、障害のあるなしを気にしていない	1——	2——	3——	4——	5

競技スポーツ実施状況調査

評価の基準

1 ← 当てはまらない（1割以下） とても当てはまる（9割以上） → 5

チームの限定志向度

設 問 2 3	●チームの限定志向度について、該当する数字に○をつけて下さい。					
	・メンバーは精神障がい者のみがよい	1	2	3	4	5
	・出場する大会は障がい者大会としている	1	2	3	4	5
	・広報は行わない	1	2	3	4	5
	・連絡先や練習場所は公開しなくてよい	1	2	3	4	5
	・長く在籍しているメンバーが中心となっている	1	2	3	4	5

チームの流動性（不安定性）

設 問 2 4	●チームの流動性（不安定性）について、該当する数字に○をつけて下さい。					
	・その時々でメンバーでチームの目標が変化する	1	2	3	4	5
	・チームの代表者が決まっていない	1	2	3	4	5
	・メンバーの入れ替わりが多い	1	2	3	4	5
	・練習日や練習場所が固定されていない	1	2	3	4	5
	・チーム内で試合に対する温度差がある	1	2	3	4	5

選手の積極性（主体性）

設 問 2 5	●選手の積極性（主体性）について、該当する数字に○をつけて下さい。					
	・練習の進行は選手が中心になって進めている	1	2	3	4	5
	・勧誘活動は選手が率先して行っている	1	2	3	4	5
	・初心者への指導は選手中心で行っている	1	2	3	4	5
	・大会運営の委員として活動に加わる選手がいる	1	2	3	4	5
	・選手が主体となって大会を運営したことがある	1	2	3	4	5

チームの拡充要素

設 問 2 6	●チームの拡充要素について、該当する数字に○をつけて下さい。					
	・チーム連絡先や練習場所を一般に公開している	1	2	3	4	5
	・公開練習や体験参加日などを設けている	1	2	3	4	5
	・HPやBlogなどを積極的に活用している	1	2	3	4	5
	・ユニフォームなどがきちんと揃えられている	1	2	3	4	5
	・競技志向でない人も排除されず参加できる	1	2	3	4	5

競技スポーツ実施状況調査

評価の基準



チームのセルフヘルプ機能

設 問 2 7	●チームのセルフヘルプ機能について、該当する数字に○をつけて下さい。					
	・仲間を見つけ、孤立から脱却できる環境がある	1	2	3	4	5
	・選手同士は対等であり、仲間である	1	2	3	4	5
	・活動を通じ自尊心の回復をはかることが出来る	1	2	3	4	5
	・自らも支援を提供できる環境がある	1	2	3	4	5
	・心理体調面をメンバー同士でサポートしている	1	2	3	4	5

チームの経済的負担状況

設 問 2 8	●チームの経済状況について、該当する数字に○をつけて下さい。					
	・練習費用の捻出を負担に感じている	1	2	3	4	5
	・参加費が負担なためチームや選手が出場を断念したことがある	1	2	3	4	5
	・遠征費が負担なためチームや選手が出場を断念したことがある	1	2	3	4	5
	・他チームと比べて経済的な不公平に感じることもある	1	2	3	4	5
	・活動の継続には、経済的支援が欠かせない	1	2	3	4	5

大会に対する選手の満足度

●大会参加の満足度について、該当する数字に○をつけて下さい						
※チームが一番多く出場している大会（もしくは最上位大会）を想定して、ご記載下さい						
設 問 2 9	・権威ある大会で、出場することが誇りに思える	1	2	3	4	5
	・審判が的確かつ公平であり、勝敗に納得できる	1	2	3	4	5
	・会場施設やアクセスが良く、快適に感じる	1	2	3	4	5
	・大会開催時間が適切で、負担が少なく感じる	1	2	3	4	5
	・参加費用が妥当な値段で、参加しやすい	1	2	3	4	5

実施普及に対する選手の満足度

設 問 3 0	●精神障がいスポーツの実施普及に対する満足度について、該当する数字に○をつけて下さい					
	・競技数が少なく、選択できる幅が狭い	1	2	3	4	5
	・チーム数が少なく、競技に広がりがない	1	2	3	4	5
	・広報が不十分で必要な情報が手に入らない	1	2	3	4	5
	・メンバーが固定していて、新しい人が入り難い	1	2	3	4	5
	・競技大会だけでなく、交流大会もやってほしい	1	2	3	4	5

競技スポーツ実施状況調査

自 由 意 見

●何かご意見等ございましたら、ご記載の程お願い致します。

設
問
3
1

何かご不明な点がありましたら、下記までご連絡ください

研究責任者

日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科

博士後期課程 鎗田 英樹（帝京平成大学・教員）

TEL：0436-74-6015 Mail：h.yarita@thu.ac.jp

ご協力、ありがとうございました。